月の影 影の海

上

十二国記

小野不由美

講談社文庫



月の影 影の海(上)

十二国記

小野不由美



講談社文庫

月の影 影の海(上)

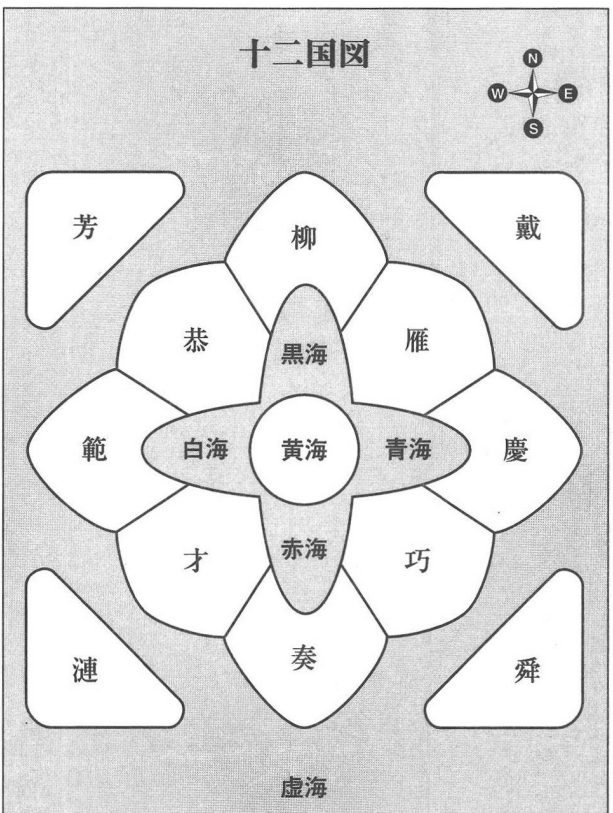
十二国記

小野不由美

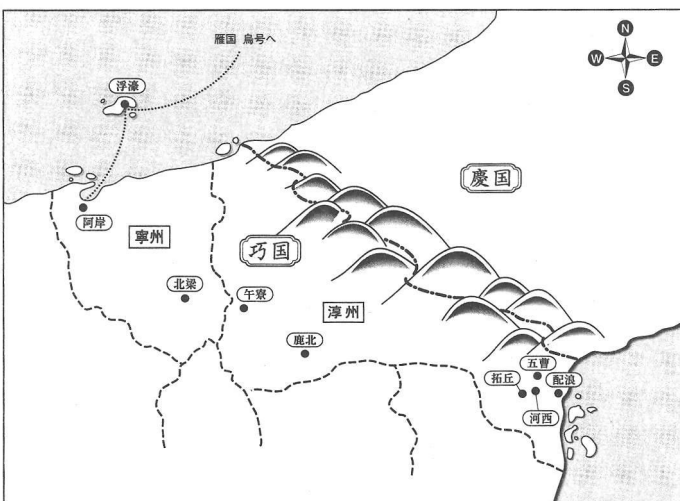
講談社

目次

一章 8
二章 66
三章 133
四章 188


十二国図
N
W
E
S
芳
柳
戴
恭
黒海
雁
範
白海
黄海
青海
慶
才
赤海
巧
漣
奏
舜
虚海

巧国北方図



月の影　影の海（上）　十二国記

一章

1

漆黒の闇、だった。

彼女はその中に立ち竦んでいる。

どこからか、高く澄んだ音色で滴が水面を叩く音がしていた。細い音は闇に谺して、まるで真っ暗な洞窟の中にでもいるようだが、そうでないことを彼女は知っていた。

闇は深く、広い。その天もなく地もない闇の中に、薄く紅蓮の明かりが点った。はるか彼方で炎でも燃えさかっているように、紅蓮の光は形を変え、踊る。

赤い光を背にして無数の影が見えた。異形の獣の群れだった。

こちらは本当に躍りながら、明かりのほうから駆けてくる。猿がいて鼠がいて鳥がいる。さまざまな種類の獣の姿をしていたが、どの獣もどこかが少しずつ図鑑で見る姿とは異なっ

ていた。しかもそのどれもが、実際の何倍も大きい。赤い獣と黒い獣と青い獣と。

前肢を振り上げ、小走りに駆ける。あるいは跳躍し、宙を旋回し、まるで陽気な祭りの行列でも近づいてくるようだった。陽気といえば陽気には違いなく、祭りといえば祭りには違いない。

異形の者たちは犠牲者をめがけて走っているのだ。生贄を血祭りに上げる歓喜に、小躍りしながら駆けてくる。

その証拠に殺意が風のように吹きつけてきていた。異形の群れの先頭まで、もう四百メートルもないだろう。どの獣も大きく口を開けて、声はいっさい聞こえなかったが、歓声を上げているのだと表情で分かる。声もなく足音もなく、ただ洞窟で水が滴るような音だけが続く。

彼女は駆けてくる影をただ目を見開いて注視していた。

――あれが来たら、殺される。

そう理解できても身動きできない。おそらくは八つ裂きにされ、喰われるのだろうと思ったが、まったく身体が動かなかった。たとえ身体が動いたにしても、逃げる場所もなく戦う術もない。

身体の中で血液が逆流する気がする。その音が耳に聞こえるような気がする。それはひどく潮騒に似ていた。

見つめる間に、距離は三百メートルに縮まった。

陽子は飛び起きた。

蜂谷を汗が伝う感触がして、目に強い酸味を感じる。慌てて何度も瞬きをして、そうしてやっと深い息をついた。

「夢……」

声に出したのは確認しておきたかったからだった。ちゃんと確認をして、自分に言い聞かせていないと不安になる。

「あれは、夢なんだ」

夢にすぎない。たとえそれが、このところ一月にわたって続いている夢だろうと。

陽子はゆっくりと首を振る。部屋の中は厚いカーテンのせいで暗い。枕元の時計を引き寄せてみると、起きる時間には少し早かった。身体が重い。手を動かすのにも足を動かすのにも粘りつくような抵抗を感じた。

あの夢を初めて見たのは一月ほど前だった。

最初は単なる闇でしかなかった。高く虚ろに水滴の音がして、真っ暗な闇の中に自分がただひとりで佇んでいる。不安で不安で逃げ出したくても身動きができない。

闇の中に紅蓮の明かりが見えたのは、同じ夢が三日続いたあとだった。夢の中の陽子は、

明かりのほうから怖いものが来ることを知っていた。ただ闇の中に光がある、それだけの夢に悲鳴を上げて飛び起きて、それを五日も続けたころに影が見えた。

それは最初、赤い光の中に浮かんだ黒いシミのように見えた。何日か同じ夢を見るうちに、それが近づいてくるのだと分かった。それが何かの群れだと分かるまでに数日がかかり、異形の獣だと分かるまでにさらに数日を要した。

そうして、と陽子はベッドの上のぬいぐるみを引き寄せた。

――もうあんなに近い。

一月をかけ、地平線からの距離を連中は駆けぬける。おそらく明日か、明後日には陽子の傍に辿り着く。

――そうしたら、自分はどうなるのだろう。

そう考えて陽子は頭を振った。

――あれは夢だ。

たとえ一月続いていても、ましてや日毎に進む夢でも、夢は夢でしかないはずだ。

言い聞かせても不安は胸を去らない。鼓動は速くて、耳の奥で血液が駆けめぐる潮騒のような音がしている。荒い呼吸が喉を灼いた。しばらくの間、陽子は縋るようにしてぬいぐるみを抱きしめていた。

寝不足と疲労で重い身体を無理に起こして、セーラー服に着替えて下に降りた。何をするのもひどく億劫で、おざなりに顔を洗ってダイニング・キッチンに行く。

「……おはよ」

流しに向かって朝食の用意をしている母親に声をかけた。

「もう起きたの？　最近早いのね」

母親は言って陽子を振り返る。チラリと投げられた視線が陽子に止まって、すぐに険しい色になった。

「陽子、また赤くなったんじゃない？」

一瞬、何のことを言われたのか分からずに陽子はきょとんとし、それから慌てて髪を手で束ねた。いつもならきっちり編んでからダイニングに顔を出すのだが、今朝は眠る前に編んだ髪を解いて櫛を入れただけだった。

「ちょっとだけ染めてみたら？」

陽子はただ頭を振った。解けた髪がふわふわと頬をくすぐった。

陽子の髪は赤い。もともと色が薄いうえに、日に灼けてもプールに入ってもすぐに色が脱けてしまう。背中まで髪を伸ばしているが、伸ばすと毛先の色が脱ける。おかげで本当にブリーチしたような色になってしまっていた。

「でなきゃ、もっと短く切る、とか」

陽子は無言で俯く。大急ぎで髪を編んだ。きっちり三つ編みにすると、少しだけ色が濃く見える。

「誰に似たのかしら……」

母親は険しい顔で溜息をついた。

「この間、先生にも訊かれたわよ。本当に生まれつきなんですか、って。だから染めてしまいなさい、って言ってるのに」

「染めるのは禁止されてるから」

「だったらうんと短く切れば？　そうしたら、少しは目立たなくなるわよ」

陽子はうなだれる。母親はコーヒーを淹れながら、冷たい口調で続けた。

「女の子は清楚なのがいちばんいいのよ。目立たず、おとなしくしてるのがいいの。わざわざ目立つよう、派手な恰好をしてるんじゃないか、なんて疑われるのは、恥ずかしいことよ。あなたの人間性まで疑われてる、ってことなんだから」

陽子は黙ってテーブルクロスを見つめる。

「その髪を見て顔を蹙める人もいると思うの。遊んでる、って思われるのも嫌でしょ。お金をあげるから、帰りに切ってらっしゃい」

陽子は秘かに溜息をつく。

「陽子、聞いてるの？」

「……うん」

答えながら窓の外に目をやった。憂鬱な色の冬空が広がっていた。二月半ば、まだまだ寒さは厳しい。

2

陽子が通っているのは平凡な女子校だった。女子校であるということ以外、何の特徴もない私立高校。父親が断固として選んだ学校だった。

陽子の中学時代の成績は比較的よいほうだったから、もっと上のレベルの学校も狙えたし、事実教師は強く他の学校を勧めたのだが、父親は譲らなかった。家から近いこと、悪い気風も、反対に華やかな校風もないこと、むしろ今どきにしては堅い校風が気に入ったらしい。

最初は模試の成績票を見て惜しそうにしていた母親も、すぐに父親に賛成した。両親が頷けば陽子には選択の余地がない。少し離れたところに制服が気に入っている学校があったが、制服にこだわって駄々をこねるのも気が咎めたので、黙ってそれに従った。そのせいかどうか、入学して一年が過ぎようとしている学校には、今も特に愛着がわかない。

「おっはよー」
陽子が教室に入ると、明るい声がした。二、三の女の子が陽子に向かって手を挙げている。中のひとりが駆け寄ってきた。
「中嶋さん、数学のプリントやってる？」
「うん」
「ごめーん。見せて」
陽子は頷く。窓際にある自分の席に着いてプリントを引っぱり出した。数人の女の子が机のまわりに集まって、さっそくそれを写し始める。
「中嶋さんって真面目なんだねぇ。さっすが、委員長」
言われて陽子は曖昧に微笑う。
「ホント、真面目。あたし宿題なんて嫌いだから、すぐ忘れちゃう」
「そう、そう。やろうと思ってもよく分かんないし。ダラダラ時間かかって、それで眠くなっちゃうんだよね。頭のいい人はいいよなぁ」
「こんなの、一瞬で終わっちゃうんでしょ」
陽子は慌てて首を振る。
「そ、そんなことない」
「じゃ、勉強が好きなんだ」

「まさか」
陽子は笑ってみせた。
「うち、母親が厳しくて」
それは事実ではなかったが、こう言っておいたほうが角が立たない。
「寝る前にいちいちチェックするから、嫌になっちゃう」
母親はむしろ陽子が勉強することを嫌う。成績などどうでもいいというわけではなかったが、塾に行く時間があったら家事を覚えなさい、というのが母親の言い分だった。それでも真面目に勉強をするのは、好きだからというわけではない。ただ、教師に叱られるのが怖いからだった。
「ひゃあ。厳しい」
「分かる、分かる。ウチもだよぉ。人の顔見ると、勉強しろってさぁ。自分はそんなに勉強が好きだったのか、ってーの」
「だよね」
どこかほっとしながら陽子が頷いたとき、女の子のひとりが小さな声を上げた。
「あ、杉本だ」
教室にひとりの少女が入ってくるところだった。
チラチラと全員の視線が向けられて、そうしてすぐに離れていった。しんとそらぞらしい

空気が流れる。

その生徒を無視するのが、ここ半年ほどクラスで流行っている遊びだった。彼女はそんなクラスの様子を上目づかいに見渡してから深く俯いた。及び腰に陽子のほうに歩いてくると左隣の席に腰を下ろす。

「中嶋さん、おはよう」

遠慮がちに声をかけられて陽子は反射的に返事をしそうになり、慌ててそれを呑みこんだ。いつだったか、うっかり返事をして、あとでクラスメイトに皮肉を言われたことがある。

それで黙ったまま気がつかなかったふりをした。くすくすと周囲で忍び笑いが起こる。笑われたほうは傷ついたように俯いたが、物言いたげに陽子に視線をよこすのをやめなかった。それを感じながら、陽子は周囲の会話に相づちを打つ。無視される彼女を哀れに思うけれども、情けをかけて周囲に逆らえば今度は自分が被害者になる。

「あの……中嶋さん」

隣からおずおずとした声が聞こえたが、陽子はこれにも気がつかなかったふりをした。故意に無視する気分は苦い。それでも陽子には、ほかにどうすればいいのか分からなかった。

「中嶋さん」

彼女は辛抱づよく何度もくりかえす。そのたびに周囲の声がとぎれ、やがてその場に集ま

っていた全員が彼女のほうに冷たい視線を向けた。陽子もそれ以上無視することができなくて、上目づかいに自分を見ている相手に目を向ける。視線を向けたが、返答はしなかった。

「あの……数学の予習やってる？」

彼女の気おくれしたような声に、陽子の周囲がどっと笑い崩れた。

「……いちおう」

「悪いけど、見せてくれない？」

数学の教師は授業で当てる生徒を前もって指名する。そういえば彼女が今日指名されていたことを陽子は思い出した。

陽子は視線を友人たちに向ける。誰も何も言わず、同じ色の視線でそれに応えた。全員が、彼女を拒絶する陽子の言葉を期待しているのだと分かる。陽子は苦いものを呑み下した。

「まだ、見直しをしたいところがあるから」

婉曲な拒絶は観客の気に入らなかったようだった。すぐさま声がかかる。

「中嶋さんって、やさしーい」

ふがいない、と暗に責めている声だ。陽子は無意識のうちに身を竦めた。別の生徒がそれに同意する。

「中嶋さん、ピシャッと言えばいいのに」

「そうそう。あんたなんかに、声をかけられるの、迷惑だって」
「世の中にはハッキリ言わないと分からないバカっているからさぁ」
陽子は返答に困る。周囲の期待を裏切る勇気は持てないけれど、同時にまた、隣の席で俯いているクラスメイトにあえてひどい言葉を投げつける勇気も持てなかった。それで陽子はただ困ったように微笑う。
「……うーん」
「ホントに中嶋さんって、人が好いんだから。だから誰かさんみたいなのに、アテにされるんだって」
「あたし、いちおう委員長だし……」
「当たるのが分かってるのに、やってこないほうが悪いんだって。そんな奴の面倒まで見ることないよぉ」
「そうかな」
「そう。——だいいち」
と、言った生徒は酷薄な笑みを浮かべた。
「杉本なんかにノートを貸したら、ノートが汚れるじゃない」
「あ、それは困るかも」
「でしょお？」

どっ、と再び全員が笑い崩れる。一緒に笑いながら、陽子は視野の隅で隣の席の様子を窺う。深く俯いた少女は、涙をこぼし始めた。

——杉本さんにも、責任はある。

陽子はそう自分に言い聞かせる。誰もが理由もなく被害者を決めるわけではない。被害者になったからには、彼女の中にそれなりの要因があるのだ。

3

——天もなく地もない闇の中に、高く高く虚ろに水滴の音がする。

陽子はその闇の中に立っていた。

顔が向いた方向に、薄く紅蓮の明かりが見える。その光を背に無数の影が蠢いている。異形の獣の群れが躍りながら駆けてくる。

群れと自分との間はもう二百メートルほどしかない。異形のものたちが大きいだけに、それはおそろしく短い距離に思える。哄笑の形に口を開けた大きな猿の、赤い毛並みが光を弾いて、跳躍するたびに盛り上がっては伸びる筋肉の動きが見てとれる。もうそれだけの距離しかない。

身体を動かすことも声を上げることもできなかった。眦が裂けるほど目を見張って、近

づいてくる群れを見守っているしかない。
走る。跳躍する。躍るように駆けてくる。吹きつけてくる殺意は突風のように呼吸を詰まらせた。
――起きなきゃ。
あれが辿り着く前に、夢から覚めなければ。
そう念じても目覚める方法が分からない。意志の力で起きることができるのなら、とっくにそうしている。
なす術もなく見つめる間に、距離はさらに半分に縮まった。
――起きなきゃ。
歯ぎしりするほどの焦燥に襲われる。身内でうずまいて肌を突き破りそうだ。荒い呼吸と速い鼓動と、駆けめぐる血潮が海鳴りに似た音をたてる。
――どうにかして、ここから逃げなければ。
そう思ったとき、突然頭上に気配を感じた。殺気が陽子を押しつぶす勢いで落下してくる。陽子は夢の中で初めて身動きをした。頭上を振り仰いだ。
茶色の翼が見えた。同じく茶色の逞しい脚と、おそろしく鋭く太い爪と。
逃げる、という意思さえ念頭に浮かぶ暇がなかった。一瞬、身体の中の潮騒が強くなって、陽子はただ悲鳴を上げた。

「中嶋さん！」

陽子はとっさにその場を逃げた。身体が逃げることを切望していて、思わずそれに従ってしまった。逃げたあとでようやく周囲の様子が目に入る。

呆れた表情の女教師と、同じく呆れた表情の生徒たち。一拍遅れて、どっと笑いが湧いた。

安堵の息をついてから、陽子はにわかに赤くなった。

眠っていたのだ。このところ夢のせいで寝つきが悪く、眠りも常に浅かった。ずっと寝不足ぎみだったから授業中にトロトロしたことはよくあるが、夢を見たのは初めてだった。

ツカツカと女教師が近づいてきた。どういうわけだか陽子を目のかたきにしている教師だった。よりによって、と陽子は唇をかむ。陽子はおおむね教師にうけがよかったが、いくら従順に振るまっても、この英語教師とだけはうまくやっていくことができなかった。

「……まったく」

彼女はそう言って教科書で陽子の机を叩く。

「いねむりをする生徒ならいますけどね、寝ぼけるほどゆっくりお休みいただいたのは、初めてですよ」

陽子はうなだれて席に戻る。

「あなたは何をしに学校へ来てるんですか。眠いんだったら家で寝ていればいいでしょう。授業が嫌なら、何も無理に来ていただかなくてもいいんですよ」

「……すみません」

教師は教科書の角で机を叩く。

「それとも、そんなに夜遊びで忙しいの？」

どっと生徒たちが笑った。てらいもなく笑った生徒の中には、友達の姿も混じっている。聞こえよがしの笑い声が左隣からも聞こえた。

女教師は軽く、ひとつに編んで背中に垂らした陽子の髪を引っぱった。

「これ、生まれつきなんですって？」

「……はい」

「そう？　わたしの高校の友達にもいたわね、こういう髪の人が。何だか彼女を思い出すわ」

そう言ってから教師は笑う。

「もっとも、その人はあなたと違って脱色してたんだけど。三年のときに補導されて学校を辞めちゃったの。今ごろどうしてるかしら。懐かしいわ」

教室のあちこちで、忍び笑う声が起こる。

「――それで？　授業を受ける気があるの？　ないの？」

「……あります」
「そう？　じゃ、そうやって立ってなさい。そうすれば起きてられるでしょう？」
教師はそう命じて含みのある笑い方をしてから、教壇に戻った。
立ったまま授業を受けたその時間中、教室の中では忍び笑いが絶えることがなかった。

陽子はその日の放課後、担任の呼び出しを受けた。どうやら英語の時間の所行が耳に入ったらしい。
職員室に呼び出されて、どういう生活をしているのか長々と問いただされた。
「夜遊びをしてるんだろう、と言う先生もいるしな」
中年の担任はそう言って顔を蹙める。
「どうなんだ？　何か夜更かしをするような事情でもあるのか」
「……いえ」
まさかあんな夢の話を他人にできない。
「夜遅くまでテレビでも見てるのか」
「いえ、あの……」
陽子は慌てて理由を探す。
「中間テストで成績が落ちたので……」

担任はあっさり納得したようだった。
「ああ、そういやちょっと悪かったな。それでか。――だがな、中嶋」
「はい」
「いくら家で夜遅くまで勉強しても、肝心の授業を聞いてなきゃ意味がないぞ」
「すみません」
「謝ってもらうようなことじゃないが。中嶋は誤解されやすいんだよ。けっこうその髪の毛が目立つんだよなぁ。それ、何とかならんか？」
「今日、切ろうと思ってたんです……」
「そうか」
そう言って担任は頷く。
「女の子だからなあ。嫌だろうけど、そのほうがお前のためだと思うぞ、先生は。染めてるだの、遊んでるだのと言う先生もいるしな」
「はい」
担任は陽子に手を振る。
「じゃ、帰っていいから」
「はい。失礼します」
陽子は頭を下げる。そのときだった。背後から声をかけられたのは。

4

「……見つけた」
声と一緒に微かに海の匂いがした。
担任が不審そうに陽子の背後を見て、それで陽子も振り返る。
陽子のうしろには若い男が立っていた。まったく見覚えのない顔だった。
「あなただ」
男はまっすぐ陽子を見て言う。年は二十代後半といったところだろう。ぽかんとするくらい奇妙な男だった。裾の長い着物に似た服を着ている。能面のような顔に髪を膝裏に届くほど長く伸ばして、それだけでも尋常でなく奇妙だというのに、その髪がとってつけたように薄い金色をしている。
「誰だ、君は」
担任が咎めるように訊く。男はそれを気にしたふうもなく、さらに唖然とするようなことをやってのけた。陽子の足下に膝をついて、深く頭を下げたのだ。
「……お捜し申しあげました」
「中嶋、お前の知り合いか？」

担任に訊かれ、ぽかんとしていた陽子は慌てて首を振った。
「違います」
あまりに異常な事態に、陽子はもちろん、担任もうまく反応ができないようだった。困惑した気分で見つめていると、男は立ち上がる。
「どうか私とおいでください」
「はぁ……？」
「中嶋、何なんだ、こいつは」
「分かりません」
訊きたいのは陽子のほうだった。救いを求めて担任を見る。職員室に残っていたほかの教師たちが怪訝そうに集まってきていた。
「何だ、お前は？　校内は関係者以外は立ち入り禁止だぞ」
担任がやっとそれに思い至ったように強く言うと、男は無表情に教師を見返す。少しも悪びれたところがなかった。
「あなたには関係がない」
冷たく言って周囲に集まった教師たちを見わたす。
「あなた方もです。退りなさい」
あまりにも居丈高な物言いに誰もがまず驚いている。同じように驚くばかりの陽子を男は

見据えた。
「事情なら、おいおい説明いたします。とにかく私とおいでください」
「失礼ですけど」
誰なんですか、と陽子が訊きかけたとき、ふいに間近で声が響いた。
「タイホ」
人を呼ぶ語調の声に男が顔を上げる。この奇妙な男の名前なのかもしれなかった。
「どうした」
眉を顰めて男が問い返した方向にはしかし、声の主は見当たらなかった。
どこからともなく再び声が響いた。
「追っ手が。蹤けられていたようです」
能面のような顔が急に険しい表情になった。ただ頷いて陽子の手首を摑む。
「失礼を。——ここは危険です。こちらへ」
「……危険、って」
「説明をする余裕はありません」
ぴしゃりと言われて陽子は思わず身を竦める。
「すぐに敵が来ます」
「……敵？」

何とはなしに不安を感じて問い返したときだった。もう一度近くで声がした。
「タイホ、来ました」
見まわしたけれど、やはり声の主の姿は見えない。教師たちが何か言いかけるのと同時だった。
——裏庭側の窓ガラスが割れたのは。
割れたのは陽子の間近の一枚だった。とっさに目を閉じた陽子の耳に、ガラスの砕ける音に混じって悲鳴じみた叫びが聞こえた。
「何だ⁉」
担任の声に閉じた目を開くと、教師はガラスが割れた窓に駆け寄り、外を見まわしていた。広い川に面した窓からは冷たい風が吹きこんで、冷気と一緒に何か生臭い臭気を外から運んで来ていた。床には破片が散乱している。比較的窓の傍にいたにもかかわらず陽子が破片を被らずにすんだのは、奇妙な男が盾になってくれたからだった。
「なに……？」
状況が把握できずに問う陽子に、男がいくぶん冷ややかな声を出した。
「だから危険だと申しあげましたのに」
言って、改めて陽子の腕を摑む。

「こちらへ」
強い不安を感じた。摑まれた腕を振り解こうとしたが、男はまったく離すふうがない。それどころかかえって強く引っぱる。たたらを踏んでよろめいた陽子の肩に手をかけた。
引っぱる男を押し留めたのは、担任だった。
「これは、お前の仕業か⁉」
男は険を含んだ目で担任を見る。上げた声は冷ややかで容赦がなかった。
「あなたには関係がない。退っていなさい」
「偉そうに、何だ、お前は。うちの生徒に何の用だ？　外に仲間でもいるのか」
男に向かって怒鳴ってから陽子を睨む。
「中嶋、どういうことなんだ」
「……分かりません」
訊きたいのは陽子のほうだった。首を振る陽子を男は引っぱる。
「とにかく、ここは」
「嫌です」
こういう誤解は恐ろしい。こんな男と仲間だなんて思われたら。身をよじって男の腕を振り解くと同時に、再びどこか上のほうから声がした。
「タイホ」

緊張した声だった。教師たちが声の主を探すように周囲を見まわす。男は明らかに顔を蹙めた。

「まったく、頑迷な」

吐き捨てるように言ってから、男はいきなり膝をついた。反応する間も与えず陽子の足を摑まえる。

「ゴゼンヲハナレズチュウセイヲチカウトセイヤクスル」

早口に言うやいなや、陽子を睨み据えた。

「許す、と」

「何なの」

「命が惜しくないのですか。――許す、とおっしゃい」

語気荒く言われ、気圧されて陽子は思わず頷いていた。

「許す……」

次いで男がとった行動は、陽子を呆然とさせるのに充分だった。

一拍おいて、周囲から呆れたような声が上がる。

「お前ら！」

「何を考えてるんだ！」

陽子はひたすら唖然としていた。この見ず知らずの男は頭を垂れて、摑まえた陽子の足の

甲に額を当てたのだ。

「何を――」

するの、と言いかけて陽子は言葉を途切らせた。

立ち眩みがした。何かが自分の中を駆け抜けていって、それが一瞬、目の前を真っ暗にする。

「中嶋！　どういうことだ⁉」

顔を真っ赤にした担任が怒声を上げるのと同時だった。

どん、と低い地響きのような音がして、裏庭側に残ったガラスというガラスが白く濁った。

5

その一瞬は、まるで大量の水が噴きこんでくるように見えた。

砕け散ったガラスの破片が鋭利な光を弾いて水平に殺到してくる。

とっさに目を閉じ、腕を上げて顔を背けた。その腕に、顔に身体に小さな痛みが吹きつけてくる。すさまじい音がしたはずだが、陽子の耳には届かなかった。

小石のぶつかるような感触が絶えたことを確認して目を開けると、職員室はガラスの破片

で光を撒いたように見えた。集まってきた教師たちがその場にうずくまっている。陽子の足元には担任が身を伏せていた。

だいじょうぶですか、と問いかけて、彼の身体に無数の破片が刺さっているのを発見する。教師たちが上げている呻き声がようやく陽子の耳に入った。

陽子はとっさに自分の身体を見下ろす。担任の脇に立っていたにもかかわらず、陽子の身体には傷ひとつなかった。

ただ驚くしかない陽子の足を担任が摑んだ。

「お前……何をしたんだ」

「あたしは、何も」

その血だらけの手を引き剝がしたのは、あの奇怪な男だった。

「行きましょう」

この男も無傷だった。

陽子は首を横に振る。蹴っていけば本当に仲間だと思われてしまう。それでも手を引かれるまま、つい足を動かしてしまったのは、その場に残るのが恐ろしかったからだった。敵が来る、という言葉には現実感がない。それよりも怪我人だらけで血の臭いのたちこめた、この場所に留まっていることが怖かった。

職員室を飛び出したところで駆けつけてきた教師に会った。
「どうした!?」
初老の教師は怒鳴り、陽子の脇にいる男に目を留めて眉を顰める。陽子が何を言うよりも早く、男が手を挙げて職員室を示した。
「手当てを。怪我人がいる」
それだけを言って陽子の手を引く。背後で教師が何かを叫んだが、何と言ったのかは分からなかった。
「どこへ、行くんですか」
陽子が声を上げたのは、男が階段を降りようとせず昇ろうとしたときだった。とにかくこの場を逃げ出して家に帰りたい、そう意図して階下を指さす陽子の腕を、男は上に向かって引く。
「そっちは屋上……」
「いいから、こちらへ。そちらからは人が来る」
「でも」
「我々が行くとかえって迷惑をかける」
「迷惑、って」
「無関係な者を巻きこむことをお望みか」

男は屋上へ通じるドアを開く。強く陽子の手を引いた。

無関係な者を巻きこむということは、陽子は無関係ではないということなのだろうか。男が言った「敵」とは、いったい何だろう。訊きたかったが、気後れがした。

手を引かれるまま、半ばよろめくようにして屋上へ出たとき、背後から奇声がとどろいた。

錆びた金具が軋むような声に、陽子は背後へと視線を走らせる。今出てきたばかりのドアの上に影が見えた。

茶色の翼。毒々しい色合いの曲がった嘴が大きく開かれ、興奮した猫のような奇声を上げている。

両翼の先までが五メートルはあろうかという巨鳥だった。

――あれは。

絡め取られたように身動きができなかった。

――あれは、夢の中の。

建物の屋根から、奇声と一緒に濃厚な殺意が降ってくる。夜を迎え始めた曇天の空は暗い。大きな襞を見せる雲に、どこからか漏れた夕陽が微かに赤い光を投げていた。

鷲に似たその鳥には角があった。首を振り、大きくいちど羽搏きすると、嫌な臭気のする風が圧力をもって吹きつけてきた。夢と同じように、陽子はそれをただ見ていた。

巨鳥の身体が舞い上がる。ごく軽く浮き上がると、宙でもういちど羽搏きし、そうして急に翼の角度を変えた。

急降下してくる体勢だ、と陽子は呆然と思った。太い脚が陽子をまっすぐに指している。茶色の羽毛に覆われた脚には、圧倒されるほど太く鋭い鉤爪が見えた。

陽子が衝撃から立ち直る暇もなく、鳥の身体が落下してくる。悲鳴を上げることさえできなかった。

陽子の目は見開かれたままだったが、何も見ていなかった。それで肩に鈍い衝撃が当たったときにも、それが自分を引き裂く鉤爪のせいなのだとすんなり納得した。

「ヒョウキ！」

どこからか声が響いて、目の前に暗い赤い色が流れた。

――血だ……。

そう思ったが、不思議にさほどの痛みは感じなかった。

陽子はようやく目を閉じる。想像していたよりも楽そうだ、と思った。死ぬことはもっと恐ろしいことだと思っていたのだけれど。

「しっかりなさい！」

強い声の主に肩を揺すられて、陽子は我に返った。

男が顔を覗きこんでいた。背中にコンクリートの感触がして、左の肩にフェンスの硬い感

触が食いこんでいる。
「自失している場合ではない！」
陽子は跳ね起きた。立っていたはずの場所から、かなり遠い場所に陽子は転がっている。
奇声が響いて、ドアの前で巨鳥が翼を振っているのが見えた。
羽搏くたびに圧力のある風が吹く。鉤爪は屋上のコンクリートを剔っていた。爪が深く食いこんで、鳥は身動きがとれないようだった。
苛立ったように大きく首を振る、その首に赤い獣が喰らいついているのが見えた。暗い赤の毛並みに覆われた豹のような獣だった。
「……なに」
陽子は悲鳴を上げた。
「何なの、あれは！」
「だから危険だと申しあげたのに」
男は陽子を引き起こす。陽子は一瞬だけ男と鳥とを見比べた。
鳥と獣とは縺れ合うようにして競り合いを続けている。
「カイコ」
男の声に呼ばれたように、コンクリートの床からひとりの女が現れた。まるで水面に浮かびあがってくるように羽毛に覆われた女の上平身が現れる。

女は鳥の翼のようなその腕に一本の剣を抱いていた。宝剣、といっていいような優美な鞘の剣だった。柄は金、鞘にも金の装飾がある。宝石らしい石を散らし、珠飾りをつけたその剣はとうてい実用に堪えるようには見えない。

男は女の腕から剣を取りあげる。手に取ったそれをまっすぐ陽子に突きつけた。

「……なに」

「あなたのものです。これをお使いなさい」

陽子はとっさに男と剣を見比べた。

「……あたしが？　あなたじゃなくて？」

男は不快げな顔をして剣を陽子の手に押しこんだ。

「私には剣を振るう趣味はない」

「こういう場合、あなたがそれで助けてくれるんじゃないの⁉」

「あいにく剣技を知らない」

「そんな！」

手の中の剣は見かけよりも重い。とうてい自分に振りまわせるとは思えなかった。

「あたしだって知らない」

「おとなしく殺されてさしあげるおつもりか」

「いや……」

「ではそれをお使いなさい」

陽子の頭の中は混乱の極致にあった。殺されたくない、という思念だけが強い。だからといって剣を振りかざして戦う勇気はない。そんな力や技量があるはずがない。剣を使えという声と、使えるはずがないという声と。両極の声が陽子に第三の行動をとらせた。

つまり、剣を投げつけたのだ。

「何を――愚かな！」

男の声には驚愕と怒りとが混じっている。

鳥をめがけて陽子が投げた剣は、目標に届きもしなかった。打ち振るう翼の先をわずかにかすめて巨鳥の足元に落ちる。

「まったく。――ヒョウキ！」

舌打ちするのが聞こえそうな声だった。

男の声に鳥の翼に爪をたてていた暗赤色の獣が離れる。離れざま身をかがめて落ちた剣を咥えると、矢のように陽子のほうへ駆け戻ってくる。

剣を受け取りながら男は獣に問う。

「持ちこたえられるか」

「何とか」

驚いたことに返答したのは、まぎれもなくヒョウキと呼ばれた暗赤色の獣だった。
頼む、と短く言って男は黙って控えていた鳥のような女に声をかける。
「カイコ」
女が頷いたとき、細かな石が飛んできた。
巨鳥が爪を抜いてコンクリートの飛沫が上がったところだった。
舞い上がろうとする巨鳥に赤い獣が跳びつく。いつの間にか全身を現して宙に舞いあがっていた女がそれに加わった。女の脚は人そのもの、ただし羽毛に覆われて、さらに長い尾がある。
「ハンキョ。ジュウサク」
男に呼ばれて女が現れたのと同じように、二頭の大きな獣が現れた。一方は大型犬に、一方は狒狒に似ている。
「ジュウサク、この方を。ハンキョ、ここは任せる」
「御意」
二頭の獣は頭を下げた。
頷き返し、男は背を向ける。ためらいのない動きでフェンスに歩み寄ると、するりと姿を掻き消した。
「……そんな！　待って！」

叫んだときだった。狒狒に似た獣が腕を伸ばした。

陽子の身体に手をかけ、有無を言わさず抱えこむ。陽子はとっさに悲鳴を上げた。それを無視して狒狒は陽子を小脇に抱える。その場を蹴ってフェンスの外に跳躍した。

6

狒狒は屋根から屋上へ、屋上から電柱へ、驚異的な跳躍を繰り返して風のように駆けた。陽子がその乱暴な運搬から解放されたのは街はずれの海岸、港に面した突堤の上だった。狒狒は抱えた陽子を地面に下ろし、陽子が息をついている間に一言もなく消え失せた。どこへ消えたのかと周囲を見渡していると、積み上げられた巨大なテトラポッドの間から滑り出るようにして宝剣を提げた男の姿が現れた。

「ご無事か」

訊かれて陽子は頷く。目眩がするが、これは狒狒の跳躍に酔ったせい、そうして次々に起こる常識外れの出来事のせいだと自覚していた。

足腰が萎えてその場に座りこむ。意味もなく涙がこぼれた。

「お泣きになっている場合ではない」

陽子はいつの間にか傍らに膝をついた男を見た。いったい何が起こったのか。答えを求め

て男を見上げたが、男には説明する気がないようだった。
陽子は目を伏せる。男の態度はあまりにもそっけなくて、あえて質問をする勇気が出ない。それで震える手で膝を抱いた。
「……怖かった」
呟いた陽子に、男は強い口調で吐き捨てるように言う。
「何を悠長なことを言っておられる。じきに追ってくる。ゆっくり息を整えている猶予はないのですよ」
「追って……くる？」
驚いて見上げると、男は頷く。
「あなたがお斬りにならなかったのだから仕方ない。ヒョウキたちが足止めをしているが、おそらくそんなには保たないでしょう」
「あの鳥のこと？　あの鳥は何だったの？」
「コチョウ」
「コチョウって？」
男は軽蔑したような目つきをした。
「あれのことです」
陽子は身を竦める。そんな説明では分からない、という抗議は声にならなかった。

「あなたは、誰なんですか？　どうして助けてくれたんですか？」
「私はケイキです」
短く言ったきり、それ以上の説明はない。陽子は軽く溜息をついた。タイホというのが名前ではないの、と訊きたかったが、とうてい尋ねられるようなムードではなかった。
こんな得体のしれない男の前から逃げ出して家に帰りたかったが、教室に鞄とコートをおいたままだった。とうていひとりで取りに戻る気にはなれないが、かといってこのまま家に帰るわけにもいかない。
「――もうよろしいか？」
途方にくれた思いでうずくまっていると、唐突にそう訊かれた。
「よろしい、って」
「もう出発してもよろしいか、とお訊きした」
「出発って、どこへ？」
「あちらへ」
あちら、というのがどこなのか、陽子にはまったく分からなかった。ただボンヤリしている陽子の手を男が摑んだ。腕を引かれて、これで何度目だろう、と思った。
どうしてこの男は満足な説明もなしに、陽子に何かを強制しようとするのだろう。
「……ちょっと待ってください」

「そんな暇はない」
男は苛立った口調で言う。
「充分お待ち申しあげた。これ以上の余裕はない」
「それは、どこなんですか？　どれくらいの時間がかかるの」
「まっすぐに行けば、片道に一日」
「そんな、困ります」
「何を」
咎めるように言われて、陽子は俯く。とりあえず行ってみようと思うには、男はあまりに得体がしれない。
片道に一日というのも陽子にとっては論外の数字だった。両親に何と言って家を空ければよいのか。頭の固い両親が、陽子のひとり旅など許すはずがない。
「……困ります」
何だか泣きたかった。何ひとつ陽子には分からない。男は何も説明してはくれない。それなのに、こんな無理な要求を怖い顔で突きつけるのだ。
泣けばまた叱られるだろうから、必死で涙をこらえた。
ひたすら膝を抱いて黙りこんでいると、突然またあの声が響いた。
「タイホ」

男は空を見上げる。
「コチョウか」
「はい」
ぞっ、と陽子の背筋を悪寒が走った。あの鳥が追ってきたのだ。
「……助けてください」
男の腕を摑むと、男は陽子を振り返る。手に提げた剣を突きつけた。
「命が惜しければ、これを」
「でもあたし、こんなの使えません」
「これはあなたにしか使えない」
「あたしには、無理です！」
「ではヒンマンをお貸しする。――ジョウユウ」
呼ばれて地面から男の顔が半分だけ現れた。
岩でできたような、顔色の悪い男で、くぼんだ目が血のように赤い。
するりと地中から抜け出したその首の下には身体がなかった。半透明のゼリー状のものがクラゲのようにまといついているだけだ。
「……なに⁉」
小さく悲鳴を上げた陽子をよそに、それは地中から滑り出る。まっすぐ陽子に向かって飛

んできた。

「いや！」

逃げようとした陽子の腕をケイキが摑む。

逃げ出すに逃げ出せない陽子の首のうしろに、ごとんと重いものが載った。あの首が載ったのだと分かった。冷たいぶよぶよとしたものが制服の衿の中へ潜りこんでくるのを感じて、陽子は悲鳴を上げた。

「いや！　取って！」

摑まれていない片腕をめちゃくちゃに振って、背中のものを払い落とそうとするとケイキがその腕までも摑む。

「やめて！　いや‼」

「聞き分けのない。落ち着かれよ」

「いや！　嫌だってば‼」

冷えた糊のようなものが背中から腕を這う。同時に首のうしろに強く何かが押しつけられるのを感じて、陽子はひたすら悲鳴を上げた。

膝が崩れて座りこみ、がむしゃらに男の腕を振り解こうと身をよじって、腕が自由になるや、勢いあまってその場に転ぶ。半ばパニックを起こしながら両手で首のうしろを払ったときには、もう何の手ごたえもなかった。

「なに？　何なの⁉」
「ジョウユウが憑依（ひょうい）しただけです」
「憑依って」
陽子は身体中を両手で擦る。身体のどこにも、あの嫌な感触はない。
「剣の使い方はジョウユウが知っている。これをお使いなさい」
そう冷淡に言って男は剣を差し出す。
「コチョウは速い。あれだけでも斬っていただかねば、追いつかれる」
「あれ……だけ？」
だけ、ということは他にも追ってくるものがあるということだろうか。あの夢の中の光景のように。
「あたし……できない。それより、さっきのジョウユウとかヒンマンとかいう化物は、どこへ行ったの」
男は答えずに空を見上げる。
「来た」

7

陽子が振り返るより先に、背後から奇声が聞こえた。
声のほうを見上げる陽子の手の中に、剣が押しこまれる。それには構わず陽子は振り返る。背後の上空に翼を広げた巨鳥の姿が降下してくるのが見えた。
悲鳴を上げた。逃げられない、ととっさに思った。
逃げるよりも落下してくる鳥のほうが速い。剣なんて使えない。あんな、化物に対峙する勇気なんてない。身を守る方法がない。
太い脚の鉤爪が視野いっぱいに広がった。眼を閉じたかったが、できなかった。
目の前を白い光が走って、硬い激しい音がした。岩と岩とを打ちつけたような音をたてて、斧のように重量感のある鉤爪が顔のすぐ前で止まった。
止めたのは剣、剣を鞘から半ばまで引き抜いて目の前に掲げたのは、ほかでもない自分の両腕だった。
なに、と自問する暇もなかった。
陽子の手が残りの刀身を引き抜いて、抜きざまコチョウの足を払う。
赤い血が散って、生温かい飛沫が陽子の顔に噴きつけた。

陽子は呆然としているしかなかった。

断じて剣を使っているのは陽子ではない。手足が勝手に動いて、狼狽したように浮上するコチョウの片脚を斬って落とす。

また鮮血が飛沫いて顔を汚した。ぬるいものが顎から首筋を伝って、衿の中に入ってくる。その感触に陽子は震えた。

陽子の足は血飛沫を躱すようにその場を退った。

宙へ逃げ出した巨鳥は、すぐさま体勢を立て直して突っこんできた。

その翼に斬りつけながら、陽子は自分の身体が動くたび、動きに従って冷えたぞろぞろとする感触が身体を伝うのを感じる。

――あれだ。あの、ジョウユウとかいう化物。

翼を傷つけられた巨鳥が、奇声を上げながら地に突っこむ。

それを視野に捉えながら、陽子は悟る。

あのジョウユウとかいう化物が自分の手足を動かしているのだ。

身悶えするように羽搏いた巨鳥は、地を巨大な両翼で叩くようにして陽子に向かってきた。

陽子の身体はよどみなく動いて、身を躱しざま、その胴を深く斬って捨てる。

生温かい血糊を頭から被って、手には肉と骨を断つ怖気のするような感触が残った。

「いや」

口は陽子の意思によって呟いたが、身体は動きをやめなかった。

血糊が身体を伝うのも構わず、地面に落ちてあがくコチョウの翼に深く剣を突き立てる。

刺し貫いた剣をそのまま引いて大きな翼を斬り裂いた。

そのまま陽子の身体は踵を返して、奇声を上げ血泡を噴いてのたうつ首へ向かった。

「いや。……やめて」

巨鳥は転がるようにして傷ついた翼を大きく打ち振るっていたが、翼はもはやその体重を浮上させることができなかった。

陽子の腕は、音をたてて宙を扇ぐ翼を避けて胴を刺し貫いた。とっさに目を背けたが、ぶよぶよとした抵抗を斬り裂く感触が手に残る。

その剣を抜きざま振り上げ、躊躇なくその首に振り下ろした。首の骨に当たって剣が止まる。

改めて粘る血肉から引き抜いて振り上げ、赤く染まった首を今度は完全に斬り落とし、そのまだ痙攣している翼で剣を拭ったところで手足の勝手な動きが止まった。

陽子は悲鳴を上げて、やっと剣を投げ捨てた。

突堤の端から身を乗り出して陽子は吐いた。

泣きじゃくりながら、海中に投げこまれたテトラポッドを伝って水の中に飛びこむ。今は二月も半ばで、海の水は身を切るほど冷たいことは、まったく念頭に浮かばなかった。とにかく、頭から被った血糊を洗い落としてしまいたかった。

無我夢中で水を被って、それでようやく落ち着くと、水の中から這い上がることさえできないほど震えた。

のろのろと這いのぼって突堤に戻り、そこで改めて声を上げて泣いた。恐怖と嫌悪で泣かずにはおれなかった。

声が嗄れるほど泣いて、泣く気力さえつきた頃にようやくケイキが声をかけてきた。

「もう、よろしいか」

「……なに……」

ぼんやりと顔を上げると、ケイキの表情には何の色もない。

「これが追っ手の全てではありません。じきに次の追っ手が来る」

「……それで？」

神経のどこかが麻痺したようだった。追っ手という言葉に恐怖を感じず、男をまっこうから睨むことにも気後れを感じなかった。

「追っ手は手ごわい。お守り申しあげるには、私と来ていただくほかはありません」

陽子はそっけなく返した。

「いや」
「分別のないことをおっしゃる」
「もうたくさん。あたし、家に帰る」
「家に帰ったからといって、決して安全ではない」
「もういいの、どうだって。寒いから家に帰る。……化物を取ってよ」
男は陽子を見据えた。その目を陽子も淡々と見返す。
「あたしの身体に張りついてるんでしょ。ジョウユウとかいう化物を取って」
「それは当面、あなたに必要なものだ」
「必要ない。あたし、家に帰るから」
「どこまで愚かな方か！」
怒鳴られて、陽子は目を見開く。
「死んでいただいては困る。否とおっしゃるなら、無理にでもおいでいただきます」
「勝手なことばっかり言わないで！」
陽子は叫んだ。他人を怒鳴りつけたのは記憶にあるかぎり、生まれて初めてのことだったが、いったん叫んでしまうと、身内には奇妙な高揚感があった。
「あたしが何をしたっていうのよ！　あたしは、家に帰るの。こんなことに巻きこまれるのはもういや。どこへも行かない。家に帰る」

「今はお聞きするわけにはいかない」
突きつけられた剣を、陽子は乱暴に手で払いのけた。
「あたしは、家に帰りたいの！　あなたに指図なんかさせない！」
「危険だと申しあげているのがお分かりにならないか！」
陽子は薄く笑ってみせる。
「危険でもいい。あなたに関係ないでしょ」
「関係なくはない」
男は低く吐き捨てて、陽子の背後に目線で頷く。前触れもなく背後から二本の白い腕が伸びて、陽子の腕を摑んだ。
「何をするのよ⁉」
振り返ると、最初に剣を持って現れた鳥のような女だった。女は陽子の腕を摑んで無理やり剣を抱かせる。そのまま羽交い絞めにするようにして抱きかかえた。
「放して！」
「あなたは私の主です」
言われて陽子はケイキを見上げる。
「主？」
「主命とあれば、どのようなことでもお聞きするが、あなたの命がかかっている。今はお許

しいただきます。まずはお身の安全を図り、事情をお聞きいただいて、その上でお帰りになりたいとおっしゃるのなら必ずお送り申しあげます」

「あたしがいつあなたの主人になったの？　勝手にやってきて、何の説明もなしに勝手なことばかり。ふざけないでよ！」

「説明申しあげる猶予はありません」

言ってケイキは、底冷えのする視線を陽子に向ける。

「私としてもこんな主人は願い下げだが、こればかりは私の意のままにならない。主人を見捨てることは許されない。ましてや無関係な人々を巻きこむことはぜったいに避けねば。否というなら力ずくでもおいでいただく。――カイコ。そのままお連れせよ」

「いや！　放して！」

ケイキは陽子を振り返らない。

「ハンキョ」

呼ばれて銅色の毛並みをした獣が物陰から現れる。

「離れて飛べ。血の臭いが移る」

次いでヒョウキ、と呼ばれて巨大な豹に似た獣が姿を現した。女は陽子を羽交い絞めにしたままその背を跨ぎ越す。

ふうわりと、同じようにハンキョに跨った男に陽子は訴えた。

「冗談じゃないわよ！　家に帰して！　せめてあの、化物を取って!!」
「別に邪魔になるわけではないでしょう。ジョウユウが憑いていたからといって、何かを感じるわけではないはずだ」
「それでも気味が悪いの！　取りなさいよ！」
ジョウユウ、と陽子のほうを振り向いて男は命じる。
「決して姿を現さず、ないものとしてふるまえ」
これに対して返答はなかった。
ケイキが頷くと、陽子を乗せた獣が立ち上がった。とっさに自分をかかえた女の腕にしがみつくと同時に、獣は音もなく跳躍する。
「……嫌だってば！」
陽子の叫びを無視して獣は抵抗なく宙へ向かって駆け上がった。
まるでゆるやかに宙を泳ぐようにして高度を増す。地面が眼下を遠ざかっていかなければ、動いていないのかと錯覚するほど獣の動きは穏やかだった。
獣は宙を駆ける。夢のように地上は遠ざかって、日暮れた街の姿をあらわにした。

8

天には凍えた満天の星、地には都市の輪郭を作る一面の星。

獣は海上に躍り出た。

宙を泳ぐように翔て、それでいながら呆れるほど速い。どういうわけか風を切る感触はしないので、さほどでもない気がするが、背後の夜景が遠ざかるスピードを見れば尋常でない速度なのが分かる。

何を叫んでも訴えても、応えてくれる者はいなかった。ついには哀願さえしたが、返答はない。

暗い海上のこと、高さを目測させるものは見えないので高度に対する恐怖は薄いが、行方に対する恐怖がある。

獣はまっすぐに沖へ向かった。ケイキを乗せたもう一頭の獣の姿は近くには見えない。ケイキの言葉どおり離れているのだろう。

疲労感とともに投げやりな気分が押し寄せてきて、陽子はようやく叫ぶことをやめた。諦めてしまえば、思い出したように四肢を動かして宙を駆ける獣の背は心地よかった。背後から廻された女の腕が、冷えた身体に温かい。

陽子はためらい、そうしてようやく背後の女に訊いてみる。
「あの……追ってきてる？」
半身をひねるようにして訊くと、女は頷いた。
「はい。追っ手の妖魔が多数」
女の声は耳にまろく優しかった。それに陽子は安堵する。
「あなたたちは……何者？」
「我々はタイホの僕です。——どうぞ、前を。お落としすると叱られます」
「……うん」
陽子はしぶしぶ前を向く。
視界に映るのは暗い海と暗い空、薄く光る星と波、天高く凍えた月、それで全部だった。
「しっかり剣をお持ちになって。決してお身体からお離しになりませんよう」
その声に陽子は怯えた。またさっきのような吐き気のする戦いをしなければならないのだろうか。
「……敵が来そう？」
「追ってきてはおりますが、ヒョウキのほうが速い。心配はございません」
「……じゃあ？」
「万が一にも剣や鞘をなくされませんよう」

「剣と、鞘？」
「その剣は鞘と離してはなりません。鞘についております珠は、あなたさまのお身を守ります」
陽子は腕の中の剣を見た。鞘には飾り紐が結びつけられていて、その先にピンポン玉大の青い石が下がっている。
「これ？」
「はい。お寒いのでしたら、珠を握ってごらんなさいませ」
言われるままに手の中に握りこんでみると、掌からじんわりと暖気がしみてくる。
「……暖かい」
「怪我や病気、疲労にも役に立ちます。剣も珠も秘蔵の宝重。決してなくされませんよう」
頷いて、次の質問を考えようとしたとき、急に獣の高度が下がった。
真っ暗な海に白く月が影を映している。波の上に縫い留められたその影が、勢いを増して近づいていた。海上がその勢いに押されたように泡立つ。
さらに下降すれば、海面は沸騰したように水柱を上げて荒れているのが分かった。
獣はその荒れる海の上に輝く、光の円の中へ飛びこもうとしている。それを感じて陽子は悲鳴を上げた。
「あたし、泳げない！」

白い腕にしがみつくと、女はやんわりと腕に力をこめる。
「大事ございません」
「でも！」
それ以上を言う暇はなかった。海面が前に塞がって、陽子は悲鳴を上げた。

光の中に飛びこんだ瞬間、叩きつけられる衝撃を覚悟したが、そんなものは全くなかった。
逆巻いた波の飛沫も、水の冷たさも感じない。ただ光の中に溶けこむように、閉じた瞼の下に白銀の光が射しこんできただけだった。
ごく薄い布で顔を撫でる感触がして目を開けると、そこは光のトンネルだった。少なくとも陽子には、そのように見えた。音もなく風もない。ただ冴え冴えとした光だけが満ちている。
頭から飛びこんできた足元では、月の形に白い光が闇を切りとっていた。その表面が大きく波立っているのが見て取れる。
「なに……これ」
潜るように進む頭上には、足元と同じく丸い光が見える。
頭上にある光の円盤が、足元に白く光を投げかけているのか、それとも逆に、足元にある

円盤が頭上に光を投げているのだろうか。いずれにしてもそれが出口だとしたら、このトンネルはひどく短い。

煌々とした光の中をあっという間に駆けぬけて、陽子を乗せた獣は丸い光の中に飛びこんだ。再び薄い布で身体を撫でたような感触があって、そうして躍り出たそこは、海の上だった。

突然、耳に音が戻る。鈍い光を弾く海面、目を上げるとそれが見わたすかぎり続いている。入ったときと同じように、真っ暗な海上の月の影から陽子たちは滑り出ていたのだ。

海面の、はるか向こうは分からない。ただ暗い海ばかりが、月の光を浴びてどこまでも広がっているように見えた。

月の影から出ると同時に、獣を中心に大きな波が同心円を描いて広がり始める。海面はみるみるうちに泡立って、嵐のように荒れ狂う波を打ち上げ始めた。

波頭の飛沫がちぎれていく様子を見れば、恐ろしいほどの風が吹いているのが分かる。ずっと無風に近かった獣の周りでも、ゆるやかな風が逆巻き始め、頭上には雲が流れ始めた。獣は高度を増して宙を駆ける。荒れた海の上に縫い留められた月の影が、月の影そのものにしか見えなくなるほど遠ざかってから、ふいに女が声を上げた。

「ヒョウキ」

硬い声に陽子は女を振り返り、そうして彼女の視線を追って背後を見た。夜の海の上、白

い月の影から無数の黒い影が躍り出てくるのが見えた。
光を宿したのは天頂の月とその影だけ、それも掻き消すように雲に覆われ、やがて完全な闇が訪れた。——まさしく、漆黒の闇。
天もなく地もない闇の中に薄く紅蓮の明かりが見える。月の影が落ちていた方角だった。その薄い明かりは、炎でも燃え盛っているように形を変え、踊る。
その光を背に無数の影が見えた。異形の獣の群れだった。
こちらは本当に躍りながら、明かりのほうからこちらへ向けて駆けてくる。猿がいて鼠がいて鳥がいる。赤い獣と黒い獣と青い獣と。
陽子は呆然とした。
「あれは……」
あれは。この風景は——。
陽子は悲鳴を上げた。
「やだ！　逃げてーっ」
女の手があやすように陽子をゆすった。
「そうしております。どうぞご安じくださいまし」
「いや！」
女は陽子の身体を伏せさせる。

「しっかりヒョウキに摑まって」
「あなたは？」
「少しでも連中の足を留めにまいります。しっかりヒョウキにしがみついて、何よりも決して剣をお放しになりませんよう」
陽子が頷くのを確認して、女は腕を放した。
そのまま漆黒の宙を蹴って背後に向かって駆けてゆく。金茶の縞のある背が、あっという間に闇にのまれていった。

陽子の周囲にはすでに闇よりほかに何ひとつ見えない。風が巻いて、陽子をゆさぶり始めた。
「ヒ……ヒョウキ、さん」
陽子はしっかり背に伏せたまま声をかけた。
「何か」
「逃げられそう？」
「さて。どうですか」
感情の窺えない声で答えてから、
「上！　ご注意を！」

「え？」
振り仰いだ陽子の目に、赤い仄かな光が映った。
「ゴウユが」
しがみついた腕の下の獣が、言うや否や体を躱して宙を横に跳んだ。その脇をおそろしい勢いで何かが墜落していく。
「なに？　どうしたの⁉」
ヒョウキは宙を左右に跳びながら急激に高度を下げていく。
「剣を。――伏兵が。挟まれました」
「そんな！」
叫んだ陽子の目の前の闇に、うっすらと赤い光が点った。その光を背に黒い何かの影が見える。踊るようにして近づいてくる、何かの群れ。
「いや！　逃げて‼」
剣を使うのは嫌だ、そう思った瞬間、そろりと足を冷たいものが撫でた感触がした。
獣に跨った陽子の両膝が、音がするほど強くヒョウキの身体を挟んで絞める。背筋を冷たいものが這って、陽子の上体を無理にもヒョウキの背から引きはがして起こさせる。
腕が勝手に戦闘の準備を始める。両手をヒョウキから放し、剣を鞘から抜き放つと、鞘だけを背中へ、スカートのベルトに挟みこんだ。

「……いや。やめて！」

右手は剣を構える。左手がヒョウキの毛並みを毟るようにして摑む。

「お願い、やめて‼」

近づいてくる群れと、近づいていくヒョウキと、双方が疾風のように突進して交わった。ヒョウキは異形の群れの中に躍りこむ。当然のことのように、殺到する巨大な獣を陽子の手が斬り捨てた。

「いや！」

陽子は目を閉じた。叫ぶことと目を閉じることだけが陽子の意のままになる。

生き物を殺したことなどない。理科の解剖でさえ直視することができなかった。そんな自分に殺生を要求しないでほしい。

剣の動きが止まった。ヒョウキの声が響く。

「目を閉じるな！　それではジョウユウが動けない‼」

「いや‼」

がく、と首が仰け反るほどの勢いで獣が横に跳躍する。

前後に左右に振りまわされながら、陽子は固く目を閉じていた。殺し合いなど見たくない。目を瞑ることで剣が止まるなら、断じて目など開けるものか。

ヒョウキが強く左に跳ぶ。

突然に、壁にでも突き当たったような衝撃を感じた。ちょうど犬が上げる悲鳴のような短い声を聞いて、陽子はとっさに目を開ける。瞳が深い漆黒だけを捉えた。

何が起こったのか考える間もなく、ヒョウキの身体が大きく傾き、両膝の間から毛並みの感触が消え失せた。

悲鳴を上げる余裕もなかった。陽子は宙に投げ出されていた。

驚いて見開いた目に、突進してくる猪に似た獣が見えて、右手に肉を斬った重い衝撃を感じた。陽子の耳に刺さったのは獣の咆哮と、自分の悲鳴。

それを最後に五感までもが闇の中に墜落していった。

二　章

1

荒れた波が打ち寄せる砂浜だった。

ふと気がつくと、陽子は波打ち際に倒れていた。

実際に波が砂を洗っている汀から、陽子が倒れた場所までは少しだけ距離があったが、水の打ち寄せる勢いが激しい。飛沫が陽子の顔にかかって、それで目を覚ましたのだと分かった。

陽子は顔を上げる。ひときわ大きな波が押し寄せてきて、砂の上を這った水が、倒れた陽子の爪先を濡らした。不思議に冷たい気はしなかったので、陽子はそのままそこに横たわっている。爪先を波が洗うに任せた。

濃く潮の匂いがする。潮の匂いは、血の匂いに似ている、と陽子はぼんやりそう思った。

人の身体の中には海水が流れている。だから、耳を澄ますと身内から潮騒がする。そんな、気がする。

また大きな波が打ち寄せてきて、陽子の膝のあたりまで水が押し寄せてきた。波に浚われた砂が膝をくすぐる。濃厚な潮の匂いがした。

ぼんやりと足元を眺めていた陽子は、爪先を洗っては引いていく水に赤い色が混じっているのに気づいた。ふと目線を沖へ向ける。そこには灰色の海と灰色の空が広がるばかり、赤い色はどこにもない。

また波が打ち寄せてきた。引いていく水がやはり赤い。色の出どころを探して、陽子は目を見開いた。

「……あ」

赤い色の出どころは自分の足だった。波が洗う爪先から、脛から、赤い色が溶け出している。

慌てて両手をついて身体を起こした。よくよく見てみると手も足も真っ赤で、制服までが赤黒い色に変色してしまっている。

陽子は小さく悲鳴を上げた。

——血だ。

全身が、浴びた返り血で真っ赤に染まっている。両手はほとんど黒く見えるほど、軽く両

手を握ってみるとおそろしく粘った。そっと触れると、顔も髪も同じように粘つくもので覆われている。

陽子の悲鳴に合わせたように、またひときわ高い波が打ち寄せてきた。

波は身を起こした陽子の周囲を洗っていく。打ち寄せる水は濁った灰色、なのに引いていく水には赤い色が溶かしこまれている。

押し寄せてきた水をすくって、陽子は両手を洗った。指の間から滴る水は、血液そのものの色をしていた。

波が打ち寄せるたびに水をすくって手を洗った。洗っても洗っても、両手は白い色を取り戻さなかった。いつの間にか水は、座りこんだ陽子の腰のあたりに達している。そこから赤い色がにじみ出て、周囲の水面は赤く染まっていた。しかもその赤は徐々に大きく広がっている。灰色ばかりの風景の中で、赤い色が鮮やかだった。

ふと陽子は、自分の手に変化が起こっているのを見つけた。赤い手を目の前にかざす。

爪が伸びていた。

尖った鋭利な爪が、指の第一関節ほども長く伸びている。

「……どうして」

しみじみと見つめて、さらに変化を悟る。手の甲に無数のひび割れができていた。

「なに……？」

ぱら、と小さな赤い破片が落ちた。風に流されて沖へ飛んでいく。
小さな破片がはがれた、その下から現れたのは、ひとつまみの赤い毛だった。ごく短い毛が小さな面積にびっしりと生えている。
「まさか……」
軽く手をこする。ぱらぱらと破片が落ちて、さらに赤い毛並みが現れる。身動きするたびに足からも顔からも破片が落ちて、そこここに赤い毛並みが現れてゆく。
荒い波に洗われて、制服が朽ちたようにちぎれていった。その下から現れたのも、やはり赤い毛並みだった。水がさらにその毛並みを洗う。赤い色を溶かし出して、すでに周囲は見わたすかぎり赤い色に染まっている。
凶器のような爪。赤い毛並み。——まるで獣に変化していこうとしているように。
「——うそ」
叫んだ声はひび割れた。
——どうして、こんな。
制服がちぎれて落ち、現れた腕は奇妙な形にねじれている。それは犬か猫の前肢のように見えた。
——返り血。
——きっと、返り血のせいだ。

化物の返り血が、身体を変えていこうとしている。
——化物に、なる。
(そんな、莫迦な)
——嫌だ。
「いや——っ!!」
叫んだ言葉は聞こえなかった。
陽子の耳は荒れる海の波の音と、一匹の獣の咆哮だけを聞いた。

——陽子が目を開けると、蒼白い闇のなかにいた。
息をしたとたん、全身が痛んだ。特に胸の痛みがひどい。
とっさに両手を顔の前にかざして、陽子は軽く息をついた。そこには爪も、赤い毛並みも見えなかった。
「……」
声にならない安堵の溜息をつく。何が自分に起こったのか原因を思い出そうとして、はたと記憶がよみがえった。慌てて身体を起こそうとしたが、身体が硬直したように強張って動かない。
ゆっくりと何度か息をして、それからそろそろと身を起こした。深い息をくりかえす間

に、痛みはゆるやかに引いていく。半身を起こした陽子の身体からパラパラと松の葉がこぼれ落ちた。

——松。

確かに松葉のようだった。周囲を見わたすと松林、頭上を見上げると折れた枝の断面が白い。そこから墜落してきたのだろうと分かった。

右手はしっかり今もなお、剣の柄を握りしめていた。よくも放さなかったものだと思い、次いで自分の身体を検めて、よくも怪我をせずにすんだものだと思う。細かいかすり傷は無数にあったが、怪我と呼べるほどの傷は見当たらなかった。ついでに、何の変化もない。

陽子はそろそろと背中を探る。スカートのベルトに挟まれて失いもせずにすんだ鞘を引き出すと、それに剣を納めた。

白い靄が薄く流れている。夜明け前の空気が漂っていた。波の音が響いている。

「それであんな夢を見たんだ……」

気味の悪い返り血の感触と、化物と戦わされた経験、そうして、波の音。

「……最低」

呟いて、陽子は周囲を見わたした。

あたりは浜辺によくある松林に見える。海の近く、夜明け前。そして自分は死にもせず身動きできないほどの怪我も受けていない。——それが陽子の得た情報の全てだった。

林には何の気配もなかった。おそらく敵も近くにはいない。そうして——味方も近くにはいない。

海面に映った月の影から滑り出たとき、月は高いところにあった。今は夜明け。それほどの時間、自分がひとりで放っておかれたからには、ケイキたちとはぐれたのに違いない。

——迷子になったときには動かないこと。

陽子は小さく口の中でひとりごちた。

きっとケイキたちが捜してくれるだろう。あんなに偉そうに守ると言っていたのだから。軽はずみに動けば、かえってすれ違ってしまうおそれがある。

そう考えて身体を近くの幹にもたせかけると、鞘に結びつけられた珠を握ってみる。あちこちの痛みがそれでゆっくりと引いていった。

不思議だと、そう思う。

改めて珠を見ても、ただの石にしか見えない。ガラスっぽい光沢の、とろりとした青をしていた。青い翡翠があるとすれば、こんなものかもしれない。

そんなことを考えてから、固く珠を握りなおす。じっとそこに座ったまま目を閉じていた。

目を閉じている間にほんの少しだけ眠ったのだろう、次に陽子が目を開けると、あたりに

は薄い光が満ちて、風景は早朝の色をしていた。

「遅い……」

彼らは何をしているのだろう。どうして自分をこんなに長時間放っておくのだろう。ケイキは、カイコは、ヒョウキは。

陽子は迷ったすえに口に出してみる。

「……ジョウユウ、さん」

まだ自分の身体にとり憑いているはずだ。そう思って声をかけたが、返答はなかった。自分の身体を検めてみても、そこにジョウユウのいる感触はない。もともと剣を振るうときでなければ、いるのかいないのか分からない相手だから、はぐれたのかどうかは判然としなかった。

「いるの？　ケイキさんたちはどうしたの？」

何度訊いてみても、何の応答も気配もない。

不安が頭をもたげた。ひょっとしたらケイキたちは、陽子を捜したくても捜せないのではないだろうか。墜落する直前に聞いた悲鳴が甦った。敵の群れの中に残してしまったヒョウキは無事なのだろうか。

不安に押されて立ち上がった。ギシギシ悲鳴を上げる身体をなだめて立ち上がり、あたりを見わたす。周囲は松の林、すぐ右手に林の切れ目が見える。とりあえずそこまで行くのは

危険なことではないだろう。

林の外はボコボコとした荒れ地だった。白茶けた土に低い灌木がしがみついている。その先は断崖だった。断崖の向こうには黒い海が見える。昨夜見た海も黒かったが、夜のせいだと思っていた。夜が明けた今になってもあんなに暗いのは、海の色自体が相当に深いからなのだろう。

陽子は引き寄せられるように崖へ向かって歩いた。

デパートの屋上から見下ろしたほども崖の高さはある。そこから海を見て、しばらく陽子は呆然としていた。

高さのせいではない。足元に広がる海の異様さに打たれて。

海は限りなく黒に近い紺に見えた。水面に下っていく崖の線を目で辿ってみると、水に色がついているわけではない。むしろ、おそろしく澄んでいる。

それは想像を絶するほど深い海の、深海にわだかまる闇が透明な水のせいであらわになったような印象を与えた。光がとどかないほど深い底を見下ろしている、という感覚。

その深い海の、深いところに小さな光が灯っている。それが何なのかは分からないが、砂粒ほどに見える光が点々と灯り、あるいは集まって薄い光の集団を作っている。

——星のように。

目眩がして陽子は崖に座りこんだ。

それはまさしく宇宙の景観だった。写真で見た星や星団や星雲や、そういったものが自分の足元に広がっている。

――ここは知らない場所だ。

突然に湧きあがってきた思考。直視しないようにしてきたものが噴き出してきて止められない。

ここは陽子の知る世界ではない。こんな海を陽子は知らない。まさしく陽子は別世界にまぎれこんでしまったのだ。

――嫌だ。

「嘘でしょう……」

ここはどこで、どういうところなのか。危険なのか安全なのか。これからいったいどうすればいいのか。

どうしてこんなことになってしまったのか。

「……ジョウユウ、さん」

陽子は目を閉じて声を上げる。

「ジョウユウ！　お願い、返事して！」

身体の中には潮騒のような音だけ。憑依したはずの者からは返答がない。

「いないの!?　誰か、助けてよ!!」

一晩がすでに経った。家では母親がさぞ心配しているだろう。父親は今ごろひどく怒っているに違いない。

「……帰る」

呟くと涙がこぼれた。

「あたし、家に帰る……っ」

いったん、あふれ始めると止まらなかった。陽子は膝を抱いて顔を伏せる。声を上げて泣き始めた。

額が熱を持つほど泣いてから、ようやく陽子は顔を上げた。泣きたいだけ泣いて、少しだけ落ち着いた。

ゆっくりと目を開けてみる。目の前には宇宙のように見える海が広がっている。

「……不思議」

星空を見下ろしている気分がした。冴えた漆黒に満天の星。水の中で星雲はゆるやかに回転している。

「不思議で綺麗……」

ようやく落ち着いた自分を自覚した。

陽子はぼんやりと水の中の星を見つめていた。

2

太陽が天頂を越えるまで、陽子はそこで海を見ていた。

ここはいったいどういう世界で、どんな場所なのだろう。

こちらに来るのには月の影を通ってきたが、あれ自体がそもそもおかしい。月の影を捉まえるなど、夕陽を捉まえるのと同様にできるはずのないことだ。

ケイキと、その周りにいた不可解な獣たち。陽子の世界にあんな獣はいない。間違いなく、あれはこちらの生き物だろう。——そこまでは理解できるのだけど。

ケイキはいったい、何を思って陽子をここへ連れてきたのか。危険だと言い、守ると言ったが、陽子はこうして放置されている。

ケイキたちはどうしたのか。あの敵はいったい何者で、何を目的に陽子を襲ったのだろう。それが全部夢にそっくりだったのはどういうわけなのだろう。——そもそも陽子は、なぜ一月もあんな夢を見続けたのか。

考え始めると分からないことばかりで、思考が迷子になりそうだった。ケイキに出会ってからというもの、何もかもが疑問符でできていて、陽子に理解できることのほうが少ない。

ケイキが恨めしくてならなかった。

突然現れて陽子の事情には構わず、得体の知れない世界に無理やり引きずりこんだ。ケイキにさえ会わなければ、こんなところに来ることもなかったし、化物とはいえ生き物を殺すような事態にだってならなかったはずだ。

だから懐かしいとは思えないが、ケイキ以外に頼る者がない。なのにケイキたちは陽子を迎えに来ない。あの戦闘で何かが起こって迎えに来たくても来られないのか、それとも何か事情があるのか。

それでいっそう自分の置かれた状況が困難なものに思えた。

――どうして自分がこんな思いをしなければならないのだろう。

陽子は何をしたわけでもない。ぜんぶケイキのせいだ。そう考えると、化物に襲われたのまでケイキのせいのような気がする。

職員室で聞いた声は「蹴けられていた」と言わなかったか。ケイキは「敵」と言っていたが、それは陽子の敵という意味ではないはずだ。陽子には化物に敵を作る心当たりなどない。

陽子はケイキの主だという。それがそもそもの原因だという気がした。陽子がケイキの主だから、ケイキの敵に狙われた。その敵から身を守るために剣を使わなければならなかったし、こんなところに来なければならなかった。

しかし、主になった覚えなど、陽子にはないのだ。

主と呼ばれるいわれがあるとは思えなかった。だとしたら、ケイキの誤解か、勝手な思いこみだろう。

ケイキは「捜した」と言っていた。きっと彼は主を捜していて、何か重大な間違いを犯してしまったのだ。

「何が、守る、よ」

陽子は小声で毒づく。

「ぜんぶ、あんたのせいじゃない」

短かった影が伸び始めて、ようやく陽子は腰を上げた。ここにずっと座ってケイキに毒づいていても、どうにもならないことだけは確実だった。

陽子は左右を見わたす。崖はどちらの方向へ行っても、切れ目がなさそうに見えた。しかたなく踵を返し、もといた松林のほうへ戻る。コートはなかったがさほど寒いとは感じなかった。ここは、陽子が住んでいた街よりも気候が良いようだった。

さして深くもない林は、台風のあとのように折れた枝が散乱している。そこを抜けると、沼地が広がっていた。

「……？」

よく見れば、そこは沼地ではなく泥が流れこんだ田圃だった。

ところどころ水面に、まっすぐに整備された畦が顔を出していた。丈の低い緑の植物が頭だけを泥の上に出して、吹き倒されてしまっている。

見わたす限り泥の海で、離れたところに人家が小さな集落を作っているのが見える。その向こうは険しい山だった。

電柱や鉄柱のようなものは見えない。遠くにある集落にも電線のようなものはいっさい見えないし、建物の屋根にアンテナのようなものもなかった。

屋根は黒い瓦、壁は黄ばんだ土壁に見えた。集落の周りを取り囲むようにして背の低い木が植えられていたが、ほとんどが倒れてしまっている。

覚悟していたような異常な風景があるわけでもなく、建物があるわけでもなく、陽子はひそかに胸を撫で下ろした。少しばかり雰囲気は違うが、それは気抜けするくらい日本のあちこちで見かける田園風景に似ていた。

安堵してよくよくあたりを見わたすと、松林からはかなり遠いところに数人の人影が見える。背恰好はさだかではないが、別に化物じみたシルエットには見えない。田圃で作業をしているようだった。

「よかった……」

思わず声が漏れた。最初にあの海を見てすっかり狼狽してしまったが、この風景はそれほど異常には見えない。電気が来ていないようだ、という点を無視すれば、日本のどこかにあ

りそうな村だ。

陽子は深く息をつき、それから遠くに見える人々に声をかけてみることに決めた。見ず知らずの人に話しかけるのは気後れがするが、陽子ひとりではどうにもならない。言葉が通じるかどうか、ふと疑問に思ったが、とにかく誰かに助けを求めなければならなかった。怖じ気づく自分を励ますようにして、陽子は口の中で唱える。

「事情を説明して、ケイキたちを見なかったか訊いてみる」

とにかくそれしか陽子にできることはなかった。

何とか歩ける畦を探して、陽子は農作業を続ける人影のほうへ歩いていった。近づくにつれ、彼らが少なくとも日本人でないことは分かった。

茶色い髪の女がいて、赤い髪の男がいる。ひどくケイキに似た雰囲気があった。

顔立ちや身体つきは少しも白人のようでないのに、取ってつけたように髪の色だけが違うせいだろう。その点を除けばごく普通の男女のようだった。

着ているものは着物に似た少し変わった服で、男の全員が髪を伸ばしてくくってはいたが、それ以外に特に異常は見当たらない。彼らはシャベルのようなものを突き立てて、畦を壊そうとしているようだった。

作業をしていた男のひとりが顔を上げた。陽子を見て周囲の人間をつつく。何か声をかけ

ていたが、特に耳なれない音には聞こえなかった。その場にいた八人ほどの男女が陽子のほうを見て、陽子は軽く頭を下げた。ほかにどうすればいいか思いつかなかった。

すぐに三十前後の黒髪の男がひとり、畦に上がってきた。

「……あんた、どこから来たんだね」

日本語を聞いて、陽子は心底ホッとした。自然に笑みが浮かぶ。思ったほどひどい状況ではないようだ。

「崖のほうからです」

ほかの男女は手を止めて、陽子と男を見守っている。

「崖のほう？　……郷里は」

東京です、と言いかけて陽子は口を噤んだ。事情を話す、と簡単に考えていたが、はたして正直に事情を話して信じてもらえるのだろうか。

陽子が迷っているうちに、男が重ねて訊いてきた。

「妙な恰好をしているが、まさか海から来たのかい」

それは事実ではなかったが、かなり事実に近かったので陽子は頷いた。男が目を丸くする。

「なるほど、そういうことかい。こいつは驚いた」

男は皮肉な笑みを浮かべて、陽子には理解できない納得の仕方をした。不穏な目つきで睨

むようにしてから、陽子の右手に視線を留めた。
「大層なもんを持ってるな。それはどうしたんだ？」
提げたままの剣のことを言っているのだと分かった。
「これは……もらったんです」
「誰に」
「ケイキという人です」
男は陽子のすぐ傍まで歩み寄ってくる。陽子は何となく一歩退った。
「あんたには重そうだな。――よこしな。俺が預かってやろう」
陽子は男の目つきに少し怯える。親切だけで言っているとは思えなかった。それで剣を胸に抱いて首を横に振る。
「……だいじょうぶです。それより、ここはどこなんですか？」
「ここはハイロウだ。人にものを訊くのに、そんな物騒なものをちらつかせるもんじゃない。そいつをよこしな」
陽子は後退った。
「放してはいけないと言われてるんです」
「よこせ」
強く言われて陽子は怖じけた。嫌です、と言い通す覇気を持てなくて、しぶしぶ剣を男に

向かって差し出す。男はひったくるように剣を受け取って、しみじみそれを眺めた。
「たいした造作だ。これをくれた男は金持ちだったろう」
見守っていた男女が集まってきた。
「どうした。カイキャクか」
「そのようだ。見ろや、大層な代物だ」
男は笑って剣を抜こうとする。しかし、どうしたわけか刀身は鞘を動かなかった。
「飾りもんか。——まあ、いい」
男は笑って剣を腰の帯に差す。それからいきなり腕を伸ばして陽子の腕を摑んだ。陽子が悲鳴を上げるのも構わず、男は乱暴に陽子の腕をねじりあげる。
「……痛い！　放して！」
「そうはいかないなあ。カイキャクは県知事に届けるのが決まりだ」
笑いながら言って、男は陽子を押し出す。
「さ、歩きな。なぁに、悪いようにはしないからよ」
男は陽子を無理やり歩かせて、周囲の者に声をかける。
「誰か手伝ってくれ。連れていこう」
——腕が痛い。この男は得体が知れない。どこへ連れていかれるのか不安を感じる。
心底放してほしいと思った。思ったとたん、手足に冷たい感触が伝って、陽子は男の手を

振り解いていた。腕が勝手に伸びて男の腰の剣を鞘ごと引き抜く。大きく跳んで後退った。
「……てめえ」
すごむ男に周囲の人間が声をかける。
「気をつけろ、剣を――」
「なぁに。あれは飾りもんさ。おい、娘。おとなしくこっちへ来い」
陽子は首を振った。
「……いや」
「引きずっていかれたいのか？　いきがった真似をせずにこっちへ来い」
「……嫌です」
遠くからも人が集まり始めていた。
男が踏み出す。陽子の手は剣を鞘から抜いていた。
「なにぃ⁉」
「近づかないで……ください」
棒を呑んだように動けない人々を見わたして、陽子は後退る。身を翻して逃げ出すと、背後から追ってくる足音がした。
「来ないで！」
振り返って追ってくる男たちを認めるや否や、身体が動いてその場に踏み留まった。剣が

身構えるように上がる。音を立てて血の気が引いた。
「やめて……！」
突っこんでくる男に向かって剣が動く。
「ジョウユウ、やめて！」
――だめだ。それだけは、できない。
切っ先が鮮やかな弧を描いた。
「人殺しは嫌ぁっ‼」
叫んで固く目を閉じた。ぴた、と腕の動きが止まった。
同時に強い力で引き倒される。誰かが馬乗りになって剣を毟り取った。痛みよりも安堵で涙がにじんだ。
「ふざけた娘だ」
乱暴にこづかれたが、痛みを感じる余裕はなかった。引きずるように立たされて、ふたりの男に両腕をうしろ手にねじりあげられる。
抵抗する気にはなれなかった。ひたすら心の中で、動かないで、とジョウユウに願う。
「村に連れていけ。その妙な剣もだ。それごと県知事に届けるんだ」
どんな男が言ったのか、目を閉じた陽子には分からなかった。

3

陽子は引き立てられ、田圃の間をうねって続く細い道を歩かされた。

十五分ほど歩いて辿り着いたのは、高い塀に囲まれた小さな街だった。

さっき見た集落は何軒かの家が集まっただけのものだったが、ここは高さが四メートル近くもありそうな塀が街の周囲を取り巻いていて、四角いその外周の一方に大きな門がある。いかにも頑丈そうな門扉は内側に向かって開かれていて、その向こうに赤く塗られ、何かの絵を描いた壁が見える。壁の手前には、どうしたわけか誰も座っていない木製の椅子がひとつ置き去りにされていた。

背後から押されて陽子は街の中に踏みこむ。赤い壁を迂回すると門前の通りが一望できた。

その街の風景は、どこかで見たようで、同時にひどく異質な感じがした。

どこかで見たことがあるような気がするのは、建物の雰囲気が東洋的だからだろう。白い漆喰の壁、黒い瓦屋根、枝を差しかけたひねくれた形の樹木。にもかかわらず少しも親近感を感じないのは、全く人の気配がないからに違いない。

門前からは正面に広い道が、左右に細い道が延びていたが、そこには人の姿は全くなかっ

た。建物は一階建て、道に面しては軒の高さの白い塀が続いている。その塀が一定の間隔で切れて、そこから小さな庭を隔てて建物が見えた。

どの家も大きさに大差はなく、建物の外観も細部は違っているもののよく似ている。それでひどく無機的な感じがした。

家によっては窓が開いていて、外へ向かって押し上げる板戸を竹の棒で支えてあったが、窓が開いているのがかえってしらじらしいほど街にはみごとに人の気配がない。道にも家にも犬一匹見あたらなかったし、何の物音もしなかった。

正面の広い通りは長さが百メートルほどしかなくて、突き当たりには広場がある。白い石に鮮やかな彩色をほどこした建物が見えたが、鮮やかな色がひどくそらぞらしい感じがした。左右の細い道は三十メートルほどで直角に曲がって、突き当たりは街の外壁。その曲がり角の向こうからも人の気配は伝わってこない。

見わたしてみても抜きんでて高い屋根はなかった。黒い瓦の屋根の上に、街の外壁が覗いている。視線を巡らせれば、外壁の形が見て取れる。それは奥行きの深い細長い四角形をしていた。

窒息しそうなほど狭い街だった。広さはおそらく、陽子が通っていた高校の半分もないだろう。街の広さに対して外壁があまりに高い。

まるで水槽の中のようだ、と陽子は思った。大きな水槽の、水の底で眠りについた廃墟の

ような街だった。

陽子は、正面に見えた、広場を囲むように建った建物の中に連れていかれた。

この建物は中華街の建物を思わせる。赤く塗られた柱、鮮やかな色の装飾、なのにどこかそらぞらしい感じがするのは街の雰囲気と変わらない。建物の中には細長い廊下が真一文字に通っていたが、これも暗く、やはり人の気配はなかった。

陽子を連れてきた男たちは、何ごとかを相談してから小突くようにして陽子を歩かせ、小さな部屋の中に押しこめた。

陽子が閉じこめられた部屋の印象は、一言で言うなら牢獄だった。

床には瓦のようなタイルを敷き詰めてあったが、割れたり欠けたりしたものが多い。壁は煤けてひびの入った土壁で、高いところに小さな窓がひとつ、そこには格子が塡っている。ドアがひとつ。このドアにも格子のついた窓があって、そこからドアの前に立った男たちが見えた。

木製の椅子がひとつと小さな机がひとつ、畳一枚ぶんの大きさの台があって、それで家具は全部だった。台の上には厚い布が貼ってある。どうやらそれが寝台のようだった。

ここはどこで、どういう場所なのか、自分はこれからどうなるのか、訊きたいことは山ほどあったが、監視者にそれを訊く気にはなれない。男たちのほうも陽子に話しかけるつもり

はないようだった。それで寝台に座り、黙って俯いている。それよりほかにできることがなかった。

建物の中で人の気配がしたのは、ずいぶんと時間がたってからだった。ドアの前に誰かがやってきて、見張りが替わった。新しい見張りはふたりの男で、どちらも剣道の防具のような青い革の鎧を着けているから、警備員か警察官のようなものなのかもしれない。これから何が起こるのかと息を詰めたが、鎧の男たちは険しい視線を陽子に向けただけで、話しかけてくるわけでもなかった。

それが多少ひどいことでも、何かが起こっている間はいい。放置されていると不安で不安でたまらなかった。何度か外の兵士たちに話しかけてみようとしたが、どうしても声にならない。

叫びたくなるほど長い時間が経って、陽も落ち、牢獄の中が真っ暗になってから三人の女がやってきた。先頭に立って明かりを持った白髪の老婆は、いつか映画で見た古い中国ふうの着物を着ている。

やっと人に会えたこと、それがいかつい男ではなく女であることに陽子は安堵した。

「お前たちは、お退り」

老婆は、いろいろなものを携えて一緒に入ってきた女たちに言う。ふたりの女は荷物を床

に下ろすと、深く頭を下げて牢獄を出ていった。老婆はそれを見送ってから机を寝台の傍に引きよせ、ランプに似た燭台を机の上におく。さらに水の入った桶をおいた。

「とにかく、顔を洗いなさい」

陽子はただ頷いた。のろのろと顔を洗って手足を洗う。手は赤黒く汚れていたが、洗うとすぐにもとの色を取り戻した。

陽子は今になって、手足が重く強張っているのに気がついた。おそらくはジョウユウのせいだろう。陽子の能力を超えた動きを何度もしたせいで、あちこちの筋肉が硬直してしまっている。

できるだけゆっくりと手足を洗うと、細かい傷に水がしみた。髪を梳こうとして、うしろでひとつにまとめて三つ編みにしていたのを解いた。異変に気づいたのはそのときだった。

「……なに、これ」

陽子はまじまじと自分の髪を見る。

陽子の髪は赤い。特に毛先は脱色したような色になってしまっていた。——しかし。

三つ編みを解いた髪はかすかに波打っている。その髪の色。

この異常な色はどうだろう。

それは、赤だった。血糊を染めつけたように、深い深い紅に変色している。赤毛という言葉があるが、この色がとうてい赤毛と呼べるとは思えなかった。ありえない色だ。こんな異

常な。

それは陽子を震えさせた。自分が獣になる夢の中で見た、赤い毛並みの色にあまりにもよく似ていた。

「どうしたんだね？」

老婆が訊いてくるのに、髪の色が変だ、と訴えた。老婆は陽子の言葉に顔を傾ける。

「どうしたんだい？　別に何も変じゃないよ。珍しいけど綺麗な赤だよ」

老婆が言うのに首を振って、陽子は制服のポケットの中を探った。手鏡を引っぱり出す。そうして、間違いなく真紅に変色した自分の髪を確認し、次いでそこにいる他人を見つけた。

陽子には一瞬、それがどういう意味なのか分からなかった。手を挙げておそるおそる顔を撫で、その動きにつれて鏡の中の人物の手も動いて、それが自分なのだと分かって愕然とした。

――これはあたしの顔じゃない。

髪の色が変わって雰囲気が変わっていることを差し引いても、これは他人の顔だった。その顔の美醜はこの際たいした問題ではない。問題は明らかに他人の顔になっている自分、陽に灼けたような肌と、深い緑色に変色した瞳だった。

「これ、あたしじゃない」

狼狽して叫んだ陽子に、老婆は怪訝そうな顔をした。
「何だって？」
「こんなの、あたしじゃない！」

4

取り乱した陽子の手から、老婆は手鏡を取りあげた。ごく落ち着いた動作で鏡を覗きこみ、それから陽子に手鏡を返す。
「鏡が歪んでるわけじゃないようだね」
「でも、あたしはこんな顔じゃないんです」
そういえば、声も何だか違う気がする。まるで別人になってしまったようだ。獣でも化物でもない。だが、しかし——。
「それじゃあ、あんたの姿が歪んでるんだろうね」
微笑い混じりの声に陽子は老婆を振り仰いだ。
「……どうして」
言って陽子はもう一度鏡を見直す。自分がいるべき場所に他人がいるのは妙な気がした。
「さてねぇ。それはあたしなんかには分からないね」

老婆はそう言って、陽子の手を取る。腕についた小さな傷に、何かを浸した布を当てた。

鏡の中の自分は、よく見てみると微かに見慣れた面影を残していた。本当に、ごく微かにではあったけれど。

陽子は鏡をおいた。もう二度と見ないと決めた。鏡を覗いてみるのでなければ、自分がどんな顔をしているか関係のないことだ。髪は鏡を使わなくても見えるが、それは染めたと思えば我慢できるだろう。別に自分の容姿を気に入っていたわけではないが、この変化を再び直視する勇気が陽子にはなかった。

「あたしには分からないが、そういうこともあるんだろうさ。そのうち気分が落ち着いたら、慣れるだろうよ」

老婆はそう言って机から桶を下ろすと、代わりに大きな丼をおく。餅のようなものが沈んだスープが入っていた。

「おあがり。足りなければ、もっとあるからね」

陽子は首を横に振った。とうてい食事をする気分ではない。

「……食べないのかね？」

「ほしくありません」

「口をつけてみると、意外におなかがすいていたりするものだよ」

陽子は黙って首を振った。老婆は軽く息をついて、背の高い水差しのような土瓶からお茶

を注いでくれた。
「あっちから来たんだね？」
訊きながら老婆は椅子を引きよせて腰を下ろす。陽子は目を上げた。
「あっち？」
「海の向こうさ。キョカイを渡ってきたんだろう？」
「……キョカイって、何ですか？」
「崖の下の海だよ。何にもない、真っ暗な海」
あれはキョカイというのか、と陽子はその音を頭の中にしまった。
老婆は机の上に紙を広げた。硯（すずり）の入った箱をおく。筆を取って陽子に差し出した。
「あんた、名前は？」
陽子は戸惑いつつも、おとなしく筆を受け取って名前を書きつけた。
「中嶋、陽子です」
「日本の名前だね」
「……ここは中国なんですか？」
陽子が訊くと老婆は首を傾ける。
「ここは巧国（こうこく）だ。正確には巧州国（こうしゅうこく）だね」
言いながら老婆は別の筆をとって文字を書きつけてゆく。

「ここは淳州符楊郡、廬江郷槇県配浪。あたしは配浪の長老だ」
書きつけられた文字は、少しだけ細部が異なっている。それでも漢字に違いなかった。
「ここでは漢字を使うんですか？」
「文字なら使うともさ。あんたはいくつだね」
「十六です。じゃ、キョカイというのも漢字が？」
「虚無の海と書くね。――仕事は？」
「学生です」
陽子が答えると、老婆は軽く息をつく。
「言葉は喋れるようだね。文字も読めるようだし。あの妙な剣のほかに、何を持ってる？」
問われるまま、陽子はポケットの中を検めた。ハンカチと櫛、手鏡と生徒手帳、壊れた腕時計、それで全部だった。
並べてみせると、老婆はどういう意味なのか、頭を振る。溜息をつくようにして机の上の品物を着物の懐に収めた。
「……あたし、これからどうなるんですか」
「さてね。そんなのは上の人が決めることだ」
「あたし、何か悪いことをしたんですか？」
まるで罪人のように扱われている、と陽子は思う。老婆はこれにも首を振った。

「別に悪いことをしたわけじゃない。ただ、カイキャクは県知事へ届けるのが決まりでね。悪く思わないでおくれ」

「カイキャク？」

「海から来る来訪人のことさ。海の客、と書く。虚海のずっと東のほうから来ると、そう言われている。虚海の東の果てには日本という国があるそうだ。別に確かめた者がいるわけじゃないけど、実際に海客が流れてくるんだからそうなんだろうね」

老婆は言って陽子を見た。

「日本の人間がときおりショクに巻きこまれて東の海岸に流れ着く。あんたのようにね。それを海客というんだよ」

「ショク？」

「食べる、に虫と書くんだ。そうだね、嵐みたいなものかね。嵐とは違って、突然始まって、突然終わる。そのあとで海客が流れ着くんだ」

言って老婆は困ったような微笑いを浮かべる。

「たいがいは死体だけどね。海客は生きていても死んでいても上へ届けることになってる。上のほうの偉い人があんたをどうするか決めるんだ」

「どうするか？」

「どういうことになるのか、本当のことは知らないよ。ここに生きている海客が流れ着いた

のは、あたしのお祖母さんのとき以来のことだからね。その海客は、県庁に送られる前に死んだそうだ。あんたは溺れずに辿り着いた。運がよかったね」

「あの……」

「何だえ」

「ここはいったい、どこなんですか？」

「淳州だよ。さっき、ここに」

地名を書きつけた場所を示す老婆を制した。

「そうじゃありません！」

驚いたように目を見開いた老婆に向かって陽子は訴える。

「あたし、虚海なんて知りません。巧国なんて国、知りません。こんな世界、知らない。ここはどこなんですか⁉」

困ったように息をついただけで、老婆はそれに答えなかった。

「……帰る方法を教えてください」

「ないね」

あっさり言われて、陽子は両手を握りしめる。

「ない、って」

「人は虚海を越えられないのさ。来ることはできても、行くことはできない。こちらから向

こうへ行った人間も、帰った海客もいない」
言葉が胸の底に落ち着くまでに少しかかった。
「……帰れない？　そんな莫迦な」
「無理だね」
「だって、あたし」
涙がこぼれた。
「両親だって、いるんです。学校にだって行かなきゃならないし。ゆうべだって外泊だし、今日だって無断欠席だし、きっとみんな心配して」
老婆は気まずそうに視線をそらす。立ち上がって、卓上のものを片づけ始めた。
「……諦めるしかないね」
「だってあたし、こんなところに来るつもりなんて、ぜんぜんなかった！」
「海客はみんなそうだよ」
「全部向こうにあるんです。何ひとつ持ってこなかった。なのに帰っちゃいけないの⁉　あたし……」
それ以上は言葉にならなかった。声を上げて泣き始めた陽子には構わず、老婆は部屋を出ていく。運びこまれたものが運び出されて、鍵をかける音が響いた。牢獄の中には陽子だけ。燭台さえ持ち去られて、ひとすじの光さえなかった。

「あたし、家に帰りたい……！」

身体を起こしていることが困難で、寝台に身体を丸めた。そのまま声を上げて泣いて、やがて泣き疲れて気を失うように眠りについた。

夢は、見なかった。

5

「起きろ」

そう言って陽子は叩き起こされた。

泣き疲れた瞼が重い。ひどく光が目にしみた。疲労と飢えで深い脱力を感じたが、何かを食べたいとは思わなかった。

牢に入ってきて陽子を起こした男たちは、陽子の身体に軽く縄をかけた。そのまま外に押し出される。建物から出たところにある広場には馬車が待っていた。

二頭の馬に荷車を繋いだ馬車の上に乗せられ、そこから周囲を見わたすと広場のあちこちや道の角に大勢の人間が集まって陽子のほうを見ていた。

これだけの人間が、昨日見た廃墟のような街のどこに潜んでいたのだろう。

誰もが東洋人のようだが、髪の色が違う。大勢集まると、それがひどく奇異な感じがし

た。誰もが好奇心や嫌悪をないまぜにした表情をしている。本当に護送される犯人のようだと陽子は思う。

目を開けてから、目覚めるまでのほんの一瞬の間に、全部が夢だったらどんなにいいだろうか、と心から念じた。それはすぐに陽子を乱暴に引きずり起こす男の手によって破られたのだけれど。

身づくろいをする暇も、顔を洗う暇も機会も与えられなかった。海に飛びこんでそのままの制服は、淀んだ海の臭気を漂わせている。

男がひとり陽子の隣に乗りこんで、馭者が馬に手綱を繰り出す。それを見ながら、お風呂に入りたいな、と陽子はボンヤリ思った。たっぷりのお湯の中に身体を沈めて、いい匂いのするソープで身体を洗って。新しい下着とパジャマに着がえて、自分のベッドで眠りたい。

目が覚めたらお母さんの作ったご飯を食べて、学校へ行く。友達と挨拶をして、他愛のないお喋りをして。そういえば化学の宿題が半分残っていた。図書館から借りた本も、もう返さなくてはならない。ゆうべ、ずっと見ていたドラマがあったのに見逃してしまった。母親が思い出して録画しておいてくれるといいのだけれど。

考えていると虚しくて、どっと涙があふれた。陽子は慌てて俯く。顔を覆いたかったが、うしろ手に縛られていてそれもできなかった。

――諦めるしかないね。

そんな言葉は信じない。ケイキだって戻れないとは言わなかった。ずっとこのままなんてあるはずがない。着がえることも顔を洗うこともできなくて、罪人のように縄をかけられて汚い馬車に乗せられて。確かに陽子は聖人のように善良ではなかったが、こんな仕打ちを受けるほどの悪人でもなかったはずだ。

頭上を後ろへ退っていく門を見ながら、陽子は縛られたままの肩口に頬を寄せて涙を拭った。隣に座った三十がらみの男は胸に袋を抱いて淡々と風景を見ている。

「あの……どこへ行くんですか」

おそるおそる陽子が声をかけると、疑うような目つきで見返してきた。

「喋れるのかい」

「はい。……あたしはこれから、どこへ行くんですか？」

「どこって。県庁だ。県知事のところに連れていく」

「それからどうなるんですか？　裁判か何か、あるんですか」

どうしても自分が罪人だという考えが消えない。

「お前が良い海客か、悪い海客か、それがはっきりするまでどこかに閉じこめられることになるな」

男の突き放すような物言いに、陽子は首を傾けた。

「良い海客と、悪い海客？」

「そうだ。お前が良い海客なら、しかるべきお方が後見人について、お前は適当な場所で生活することになるだろうよ。悪いほうなら幽閉か、あるいは死刑」

陽子は反射的に身を竦めた。背筋に冷たい汗が浮く。

「……死刑？」

「悪い海客は国を滅ぼす。お前が凶事の前触れなら、首を刎ねられる」

「凶事の前触れって」

「海客が戦乱や災害を連れてくることがある。そういうときは、早く殺してしまわなくては、国が滅ぶ」

「それをどうやって見きわめるんです？」

男はうっすらと皮肉な色の笑みを浮かべた。

「しばらく閉じこめておけば分かる。お前が来て、それから悪いことが起これば、お前は凶事の前触れだ。もっとも」

男は剣呑な目つきで陽子を見る。

「お前はどちらかというと凶事を運んで来そうだな」

「……そんなこと」

「お前が来たあの蝕で、どれだけの田圃が泥に沈んだと思う。配浪の今年の収穫は全滅だ」

陽子は目を閉じた。ああ、それで、と思う。それで自分は罪人のように扱われているの

か。村人にとってすでに陽子は凶事の前触れなのだ。

怖い、と切実に思った。死ぬのは怖い。殺されるのはもっと怖い。こんな異境でもしも死んだとしても、誰も惜しまず泣いてもくれない。たとえ死体だけにしても家に帰ることさえできないのだ。

——どうしてこんなことに。

どうしてもこれが陽子の命運だとは信じられなかった。一昨日にはいつものように家を出たのだ。母親には行ってきます、とだけ言った。いつものように始まって、いつものように終わるはずだった一日。いったいどこで、何を踏み違えてしまったのだろう。

村人に声をかけたのがいけなかったのか。そもそも崖でじっとしているべきだったのか、陽子をこちらに連れてきた、あの連中とはぐれたのがいけなかったのだろうか。——それとも、そもそもあの連中に蹤いてきたのがいけなかったのか。

しかし陽子には選択の余地などなかったのだ。ケイキは力ずくでも連れていく、と言った。化物に追われて、陽子だって何とかして身を守らねばならなかった。

まるで何かの罠の中に嵌りこんでしまったようだ。ごく当たり前に見えたあの朝にはすでに何かの罠の中にあって、それが時間と共に引き絞られた。おかしいと思ったときにはすでに抜き差しがならなかった。

——逃げなきゃ。

陽子は身体だけが焦って暴れ出しそうになるのを抑える。失敗は許されない。逃げそびれたりしたら、どんな仕打ちを受けるか分からない。機会を窺って、どうにかしてこの窮地から逃げ出さなければ。

陽子の頭の中で、何かが猛烈な勢いで回転を始めた。こんな速度でものを考えたことは生まれて初めてかもしれない。

「……県庁まではどれくらいかかるんですか？」

「馬車なら半日、ってところかな」

陽子は頭上を見上げた。空は台風のあとのような青、太陽はすでに真上にある。陽が落ちる前に何としても逃げ出す機会を見つけなければならない。県庁がどんなところかは知らないが、少なくともこの馬車よりは逃げることがむずかしいだろう。

「あたしの荷物はどうなったんですか」

男は怪しむような目つきで陽子を見た。

「海客が持ってきたものは届け出るのが決まりだ」

「剣も？」

男はさらに訝しむような顔をする。警戒するのが分かった。

「……訊いてどうする」

「あれは大切なものなんです」

軽く背後で手を握った。
「あたしを捕まえた男の人が、とても欲しそうにしていたから。ひょっとして彼に盗まれたんじゃないかと思って」
男は鼻を鳴らした。
「くだらない。ちゃんと届けるさ」
「そうかしら。あれは飾りものだけど、とても高価なものなんです」
男は陽子の顔を見て、それから膝の上の布袋を開いた。中から鮮やかに光を弾いて、宝剣が現れた。
「飾りものなのか、これは？」
「そうです」
少なくとも身近にあることに安堵しながら、陽子は男を見つめた。男が柄に手をかける。どうぞ、抜けないで、と祈った。田圃で会った男には抜けなかった。ケイキはそれが陽子にしか使えないと言っていた。ひょっとしたら陽子以外には抜けないのではないかと、そう思ったが確信はない。
男が手に力をこめる。柄は鞘から寸分も動かなかった。
「へえ。本当に飾りもんだ」
「返してください」

陽子が訴えると男は皮肉な色で笑う。

「届けるのが決まりなんでな。それにお前も首を斬られちゃ、用がないだろう。眺めようにも眺める目を瞑っちゃぁな」

陽子は唇を噛む。この縄さえなければ取り戻すことができるのに。ひょっとしてジョウユウが何とかしてはくれないか、と思ったが、力をこめてみても縄はもちろん切れなかった。別に怪力になったわけではないらしい。

何とか縄を切って剣を取り戻す方法はないものか、とあたりを見まわしたとき、流れていく風景の中に金色の光を見つけた。

馬車は山道にさしかかろうとしていた。何かの樹を整然と植えた暗い林の中に、見覚えのある色を見つけて陽子は目を見開いた。同時にぞろり、とジョウユウの気配が肌を這う。

林の中に人がいた。長い金色の髪と白い顔、裾の長い着物に似た服。

——ケイキ。

陽子が心の中で呟くのと同時に、確かに陽子のものではない声が頭の中で聞こえた。

——タイホ。

6

「停めて！」
陽子は馬車から身を乗り出して叫んだ。
「ケイキ！　助けて‼」
隣の男が陽子の肩を摑んで押さえつけた。
「こら」
陽子は男を振り返る。
「馬車を停めて。知り合いがいるんです！」
「お前の知り合いはここにはいねえよ」
「いたの！　ケイキだった！　お願い、停めて‼」
馬の歩みが落ちた。
振り返ると、すでに金色の光は遠い。それでもそこに確かに人がいること、そのすぐ横にもうひとり誰かがいること、その人物が頭から死神のように暗い色の布を被っていること、何かの獣を幾頭か連れていることは見てとれた。
「ケイキ！」

叫んで身を乗り出す陽子の肩を男が強く引いた。思わず尻餅をつき、改めて顔を上げたときには、もう金色の光は見えなかった。いたはずの場所はまだ見える。そこにいた人物のほうが姿を消してしまっていた。

「ケイキ!!」

「いい加減にしろ！」

男が乱暴に陽子を引きずる。

「どこに人がいる。そんなことで騙そうたって、そうはいかねえぞ」

「いたの！」

「やかましい！」

怒鳴られて陽子は身を縮める。動き続ける馬車の上から諦め悪く視線だけを投げた。やはりそこには、何の姿もなかった。

――なぜ。

ケイキだと思った瞬間聞こえた声は、きっとジョウユウのものだろう。あれはケイキに間違いない。獣の姿も見えた。ケイキたちは無事だったのだ。

――だったらなぜ、助けてくれない？

混乱した思いでただ視線をさまよわせる。どこかにもう一度、あの金の光が見えないか。そのときだった。視線を向けていた林の中から声が聞こえたのだ。

陽子は声のしたほうを見やり、次いで隣にいる男が顔をそちらへ向けた。
赤ん坊の泣き声だった。どこかで子供がとぎれとぎれに泣いているのが聞こえる。
「おい……？」
泣き声のする方向を指さして男が声をかけたのは、それまで無言で馬車を御していた男だった。馭者はちらりと陽子たちを見やってから、手綱を繰り出す。馬の足が速まった。
「赤ん坊が」
「構うな。山の中で赤ん坊の声がしたら、近づかないほうがいい」
「しかし、な」
赤ん坊は火が点いたように泣き始めた。人が見過ごすことを許さないような、切迫した声だった。声のありかを探すように馬車の縁から身を乗り出した男に、馭者は強い声をかける。
「無視しろ。山の中で人を喰らう妖魔は、赤ん坊の声で鳴くそうだ」
妖魔、の言葉に陽子は背筋を緊張させた。
男は納得のいかない顔で、林と馭者とを見比べている。馭者は硬い顔でさらに手綱を打った。両側の林のせいで翳った坂道を、馬車は大きく揺れながら走り始める。
一瞬だけ、ケイキが自分を助けるために何かをしているのだろうか、と思ったが、ジョウユウの感触が濃厚で、おそろしく全身が緊張している。助けだと単純に喜ぶわけには、とう

ていいかなかった。

おああ、と赤ん坊の声がすぐ間近から聞こえた。それは明らかに近づいてきている。その声に応えるように、別の方向から泣き声がする。あちらからもこちらからも泣き声が聞こえて、馬車の周囲を取り巻くように張りつめた声が坂道に響き合った。

「ひ……」

男は身を硬直させて周囲を見まわす。疾走する馬車の速度を意に介さないように、声はただ近づいてくる。赤ん坊ではない。子供ではありえない。陽子は身をよじった。鼓動が跳ねあがる。身内に何かが充満する。それはジョウユウの気配ではなく、潮騒のような音をたてる何かだ。

「縄を解いて！」

男は目を見開いたまま陽子を見やり、首を横に振った。

「襲われたら身を守る方法はあるの？」

これにも狼狽したように頭を振るだけ。

「縄を解いて。その剣をあたしにください」

馬車を取り囲んだ声は、徐々にその半径をせばめている。馬は疾走する。車は乗り手を振り落とすように何度も跳ねた。

「早く!!」

陽子が怒鳴ると、男は何かに突かれたように身動きした。その瞬間だった。ひときわ大きな衝撃が突き上げてきた。

手ひどく地面に投げ出されて、陽子はようやく馬車が転倒したことに気がついた。詰まった息とともに、軽い吐き気がこみあげるのをやり過ごしてから見ると、馬も車も見事に横倒しになってしまっていた。

間近に投げ出された男が頭を振りながら身を起こす。それでも彼はしっかり布の袋を抱きしめていた。赤ん坊の声は林の縁から聞こえた。

「お願い！　縄を解いて!!」

叫ぶや否や、馬が悲痛な声を上げるのが聞こえた。慌てて目をやると馬の一頭に黒い毛並みの大きな犬が襲いかかっていた。犬はおそろしく顎が発達している。口を開けると顔面がふたつに裂けたように見えた。その鼻面は白い。それが一瞬のうちに赤く染まった。男たちが悲鳴を上げる。

「これを解いて剣をよこして！」

男にはもう、陽子の声は聞こえていないようだった。慌てふためいて立ち上がり、しっかり袋を抱いたまま片手で宙を掻くようにして坂を下へ走っていく。

その背に向かって林の中から数匹の黒い獣が飛び出してきた。

男の姿と黒い獣の姿が交錯する。獣が地に降り立ち、あとには立ち竦んだ男が残された。

――いや、立ち竦んでいるのではない。男の身体には、すでに首と片腕がなかった。一瞬ののちにその身体が倒れる。放水のように噴き出した鮮血がくっきりと軌跡を描いて、あたり一面に赤く水滴を降らせた。陽子の背後で馬が高く嘶いた。

陽子は馬車に身を寄せる。その肩に何かが触れて、驚いて振り返ると馭者だった。

彼は陽子のうしろ手に括られた手を摑む。小刀を握っているのが見えた。

「逃げな。今なら奴らの傍をすりぬけられる」

言って馭者は立ち上がる。陽子を拘束していた戒めがゆるんだ。

馭者は陽子を引き立て、坂の下へ向かって押し出した。坂の上には馬に群がった犬がいる。坂の下には倒れた男に群がった犬。身体の上に小山を作った黒い獣を、少し離れた場所から男の首だけが見つめていた。

この降って湧いたような殺戮に身を竦める陽子には関係なく、戒めを解かれた身体は戦闘の準備をする。手近の石を掻き集めるようにして拾い上げた。

――そんな小石で何ができるの。

陽子の身体は立ち上がる。坂の下に向かった。がつがつと嫌な音をさせている毛皮の群れから、その音に調子を合わせて揺れる男の足が見えていた。目が毛皮の数を数える。一、二、……、五、六。

陽子は群れに近づく。あたりは赤ん坊の声がやんで、今は骨肉を嚙む音だけが満ちてい

た。

ふいに犬の一頭が顔を上げた。白いはずの鼻面は真っ赤に染まっている。その犬が声をかけでもしたように、次々とほかの犬が頭を上げた。

——どうするの。

陽子の身体は小走りに駆け出した。最初に飛びかかってきた犬の鼻面に小石が命中する。むろん、そんなもので倒せるものでもない。獣の足を一瞬の間、止めることしかできなかった。

——無駄よ。

群れが退いたあとには、すでに人の原形を留めていない男の身体があった。

——ここで、死ぬんだ。

喰われるんだ、あんなふうに。あの顎と牙で咬み裂かれて、肉の塊になり、その肉さえ喰い尽くされてしまう。

そんな絶望的な思いにかられながらも、小石で犬を散らして陽子は駆ける。動き出したジョウユウを止める方法はない。できるだけジョウユウのさまたげにならないよう意識をこらし、せめて痛みを感じる暇がないように祈るしかなかった。

駆ける陽子の足に腕に背中に、鈍い衝撃と鈍い痛みが次々に生じる。

救援を求めてとっさに背後を振り返った陽子の目に、小刀をやみくもに振りまわしながら

走り出した男の姿が見えた。駁者は陽子とは反対側の林に向かって駆けこむ。下草を掻き分けたところで、何かが彼の身体を木陰に引きずりこんだ。

どうしてあんな方向へ、と疑問が湧いて、瞬時に自分が囮に使われたのだと悟った。逃げ出した陽子が襲われている間に、自分は林の中に逃げこむつもりだったのに違いない。男の目論見は失敗に終わった。彼は襲われ、そうして陽子も無事でいられるとは思えない。

手の中の石が尽きた。すでに人の形を留めていない男の死体までは三歩の距離。

空の手が右から襲ってきた鼻面を打ち据える。足首にがっきと摑まれる感触を感じて身体が掬い上げられそうになるのを、前のめりに逃げる。背中に重い衝撃が当たったのをさらに前のめりになって躱し、頭から男の死体に突っこんだ。

――嫌だ。

悲鳴は出なかった。心のどこかがひどく麻痺していて、ごく淡い嫌悪が浮かんだだけだった。

身体が起き上がり、背後に向かって身構える。この化物に睨み合いが通用するとは思えなかったが、意外にも犬は頭を低く垂れて間合いを測っている。だからといって、いつまでもそれが続くはずもない。

陽子は右手を死体にかけて、伏せた男の肉塊の下を探った。

この男が一瞬のうちに死体になった姿が目に甦る。時間がない。連中が決心すれば、一瞬

で決着がついてしまう。
探る指先に、硬いものが触れた。
陽子には、手の中に柄が飛びこんできたような気がした。
――あ……ああ。
命綱を摑んだ。鞘ごと男の肉塊の下から引き抜こうとしたが、どうしたわけか鞘が半ばまで現れたところで動かない。剣と鞘とは離してはならないと言われた。しかし。
陽子は迷い、迷う暇さえないことに思い至り、思いきって刀身だけを引き抜いた。切っ先で珠を結んだ紐を切って、珠を手の中に握りこむ。握りこむと同時に、犬が動いた。
それを視野に捉えるや否や、右手が動いて白刃が走る。
「ぁあ――あぁぁ!!」
言葉にならない叫びが喉を突いた。
襲ってきた犬を左右に斬り捨てて、開いた間隙に飛びこむようにして走り出す。なおも追い縋ってくる獣を斬り退け、全力でその場を駆け去った。

7

陽子は太い幹に身体をあずけて座りこんだ。

あの坂を下り、途中から山に分け入って、足が動かなくなった場所がここだった。

汗を拭うつもりで腕を挙げると、制服は血で重く濡れている。顔を蹙めて上着を脱いだ。脱いだセーラー服で剣を拭う。拭った切っ先を目の前にかざしてみた。

いつだったか日本史の授業で、日本刀で斬れるのは数人が限界、と聞いたことがある。刃こぼれと血脂で使いものにならなくなる、と。さぞかし傷んでいるだろうと思ったのに、軽く布で拭っただけで曇りひとつない。

「……不思議」

陽子にしか抜けないことといい、妙な剣だと思った。最初に持ったときには重いような気がしたが、鞘を払えばひどく手に軽い。

陽子は、すでに鋭利な煌めきを取り戻している刀身を脱いだ服でくるむ。それを腕の中に抱きこんで、しばらく息を整えていた。

鞘をあの場に残してしまった。取りに戻るべきだろうか。

鞘と剣とは離してはならないと、そう言われたが、それは鞘にも何かの意味があるということなのだろうか。それとも、鞘には珠がついていたからだろうか。

汗が引くと制服の下に着ていたTシャツだけでは寒かったが、もう一度汚れた上着に袖を通す気にはなれない。落ち着いてみると全身が痛んだ。腕も足も傷だらけだった。

Tシャツの袖には牙が通った痕がいくつもある。下から血がにじんで白い色を斑に染めて

いた。スカートは裂けてしまっているし、その下の足にも無数の傷ができている。傷の大半からまだ血が出ていたが、男を一瞬のうちに殺した牙がつけた傷にしては、おそろしく軽傷だといってよかった。

おかしい、と思う。どう考えてもこんなに軽傷ですむはずがない。そういえば職員室のガラスが割れたときにも、まわりの教師たちが大怪我をした中で、陽子だけは無傷だった。獣の背から落ちたときも、そこが空の上だったというのに擦り傷しかなかった。

変だとは思うがしかし、姿形までが変わってしまったことを思うと取り立てて悩むほどのことでもないのかもしれない。

陽子は何となく息をつく。溜息に似た呼吸をしてから、自分の左手が固く拳を握ったままなのに気がついた。強張る掌を開くと、青い珠が転がり出てくる。改めて握りなおすと、そこから痛みが引いていくのが分かった。

珠を握ってしばらくうとうとし、目覚めてみるとあちこちの傷はすでに乾いていた。

「……不思議」

しくしくと身体を蝕むような痛みは消えている。疲労が薄らいでいるのを感じる。確かにこれは、なくしてはならないものだ。陽子にはこのうえもなくありがたい。

おそらくは、これが結びつけられていたから、鞘をなくすなと言われたのだろう。

制服からスカーフを外し、剣を使って細く裂いた。それを固くねじって珠にあいた穴に通すと、首にかけておくのにちょうど良い長さだった。

珠を首にかけて、陽子は周囲を見わたす。斜面に続く林の中だった。すでに陽は傾いて、枝の下には薄闇が漂い始めている。方角は分からない。これからどうしたらいいのかも、分からなかった。

「……ジョウユウ」

背後に意識を向けて問いかけてみたが、返答はなかった。

「お願いだから、何か言ってよ」

やはり返答はない。

「これから、どうしたらいいの？　どこへ行って何をすればいいわけ？」

どこからも声はしなかった。いないはずはないのに、自分の身体に意識を凝らしてもそれがいる感触は見出せなかった。微かにかさかさと葉ずれの音がするのが、かえって静かな気がする。

「あたし、右も左も分からないのよ」

陽子は不毛なひとりごとを続ける。

「あたしはこっちのこと、何ひとつ分からないんだよ。それであたしにどうしろって言うわけ。人のいるところに出れば、また捕まるんでしょ？　捕まったら殺されるんじゃない。誰

にも会わないように逃げまわって、それで何とかなるの？　どっかにドアでもあって、それを探して開けたら、家に帰れるわけ？　そうじゃないでしょう」

何かをしなければならないのに、何をしたらいいのか分からない。ここに座っていても何ひとつ救われないと分かっているのに、どこへ行ったらいいのか分からない。

林の中は急速にたそがれていこうとしていた。明かりを点す方法も、今夜の寝床のあてもなかった。食べるものも飲むものもない。人のいる場所は危険で近づけず、人のいない場所をあてもなくうろつくのは怖い。

「あたしにどうしろっていうの。せめて、何をどうすればいいのか、それだけでも教えてよ！」

やはり返答はなかった。

「いったい何がどうなってるの。ケイキたちはどうしたの？　さっきいたのはケイキでしょう？　どうして姿を消したの。どうして助けてくれなかったの。ねえ、どうして⁉」

かさこそと葉ずれの音だけがする。

「お願いだから、何か喋ってよ……」

点々と涙がこぼれた。

「……帰りたい」

もといた世界を好きだったとは言わない。それでも離れてみれば、ただ懐かしいばかりで

涙が出てくる。もう一度帰れるなら何でもする。帰ったら二度と離れない。

「家に……帰りたいよぉ」

子供のように泣きじゃくりながらふと思う。

陽子は何とか逃げ出すことができた。県庁に送られることも、あの獣に喰われることもなかった。こうして生きて自分の膝を抱いていられる。

それはしかし、本当に幸いなことだったのだろうか？

――痛みなら……。

浮上してきた考えを、頭を振って無理にも散らす。それを考えるのは怖かった。きっと今はどんな言葉よりも説得力がある。陽子はしっかりと膝を抱きしめた。

突然、声が聞こえたのはそのときだった。

妙に甲高い老人のような声は、陽子が強いて考えないようにした思考を笑いを含んで言ってのけた。

「痛みなら、一瞬で終わったのにナァ」

陽子は周囲を見わたした。すでに右手は剣の柄を握りしめている。林の中はすっかり夜の顔をしていた。かろうじて幹や下草の高さが分かる程度の明かりしかない。

その中にボンヤリとした光がある。陽子の座った場所から二メートルほどの地点。下草の

中から薄蒼い燐光を放つものが覗いている。
それを見据えて陽子は微かに息を飲んだ。
鬼火のように光る毛並みを持った、一匹の猿だった。丈の高い雑草の間から首だけを出して、陽子のほうを見ながらあざ笑うように歯茎を剝き出しにしている。
猿はきゃらきゃらと耳に刺さる音で笑った。
「喰われてしまえば、一瞬だったのにサァ」
陽子は巻きつけた制服の間から剣を抜き出す。
「……あなた、なに？」
猿はさらに高く笑う。
「オレはオレさァ。バカな娘だよ、逃げるなんてヨォ。あのまま喰われてれば、辛い思いをせずにすんだのになァ」
陽子は剣を構える。
「何者、なの？」
「オレはオレだってば。あんたの味方さァ。あんたにいいことを教えてやろうと思ってな」
「……いいこと？」
猿の言葉は鵜呑みにできない。ジョウユウが緊張する様子をみせないので敵ではないのだろうが、怪しげな見かけからしても、とうてい真っ当な生き物とは思えなかった。

「お前、帰れねえよ」
あっさり言われて陽子は猿を睨みつけた。
「黙んなさいよ」
「帰れねえよ。ぜったい無理だ。そもそも帰る方法なんか、ねえのさ。――もっといいことを教えてやろうか？」
「聞きたくない」
「教えてやるってばさ。お前、騙されたんだよォ」
きゃらきゃらと猿は大笑いした。
「だま……された？」
水を浴びせられた気がした。
「バカな娘だよ、ナァ？　お前は、そもそも罠に嵌められたのサァ」
陽子は息を呑んだ。
――罠。
ケイキの？　ケイキの⁉
柄を握る手が震えたが、否定する言葉を思いつけなかった。
「思い当たるフシがあるだろう？　お前は、こっちに連れてこられた。二度とあっちに帰さない罠だったのサァ」

高い声が耳に突き刺さった。
「やめて！」
無我夢中で剣を払っていた。鈍い乾いた音がして草の先が舞う。陽子が自力でやみくもに振りまわした切っ先は猿に届かなかった。
「そうやって耳を塞いでも、事実は変わらないよォ。そんなもんを後生大事に振りまわしているからさァ、死にぞこなっちまうのサァ」
「やめてっ！」
「せっかくいいもんを持ってんだから、もっとマシなことに使いなよォ。——それでちょいと自分の首を刎ねるのさァ」
きゃらきゃらと猿は天を仰いで大笑いした。
「黙れぇっ‼」
手を伸ばして払った先に猿はいない。少しばかり遠ざかって、やはり首だけが覗いていた。
「いいのかい？　オレを斬っちまってサァ。オレがいなかったら、お前、口をきく相手もいないんだぜ」
はっ、と陽子は目を見開いた。
「オレが何か悪さをしたかい。こうして親切にも、お前に声をかけてやってるんじゃないか

ァ」

陽子は歯を食いしばる。固く目を閉じた。

「かわいそうになァ。こんなところに連れてこられて」

「……どうすればいいの」

「どうしようもないのさ」

「……死ぬのはいや」

それはあまりに恐ろしい。

「勝手にするがいいさ。オレはお前に死んでほしいわけじゃないからさァ」

「どこへ行けばいいの？」

「どこへ行っても同じだ。人間からも妖魔からも追われるんだからヨォ」

陽子は顔を覆う。また涙がこぼれた。

「泣けるうちに泣いておきな。そのうち涙なんて涸れちまうからサァ」

きゃらきゃらと声高く猿は笑った。笑い声が遠ざかっていくのを耳にして、陽子は顔を上げた。

「――待って！」

おいて行かれたくない。たとえ得体のしれない相手でも、こんなところにひとりで話す相手もなしに途方に暮れているよりはずっといい。

しかし、顔を上げた先に猿の姿は見えなかった。真っ暗になった闇の中に高い笑いだけが遠ざかり遠ざかりしつつ、いつまでも響いていた。

8

——痛みなら、一瞬ですむ。

その言葉は胸の中に重く沈んで、どうしても忘れることができなかった。

陽子は何度も膝の上にのせた剣に眼をやる。あるかなしかの光を昏く弾いて、冷たく硬いものが横たわっている。

——痛みなら……。

思考がそこで立ち止まる。頭を振って払い落としても、いつの間にかそこに戻っている。戻ることも進むこともできずに、陽子はただ刀身を見つめる。

やがてそれが微かに光を放ち始めて、陽子は目を見開いた。

ゆっくりと、夜目にも白く刀身の形が浮かび上がる。手に取ってかざしてみる。自らが放った光で鋭利な煌めきを作ったその剣は、両刃のさしわたしが中指の長さほどもある。その刃に不思議な色が躍って、陽子は目を凝らした。

何かが映っているのだと悟り、自分の顔だろうと納得しかけ、そうしてそうではないのに

気づいた。刃に何かが映っていることは間違いないが、それは陽子の顔などではない。刀身を近づけてよくよく見ると、人影だった。誰かが動いている姿が映っている。

高く水の音がした。洞窟の中で水滴が水面を叩くような音には聞き覚えがあった。刃に映った人影は、目を凝らすうちにどんどん鮮明になってくる。波紋を描いた水面が水の音とともに落ち着いてしっかりと像を結ぶような、そんなふうに見えた。

人だった。女で、どこか部屋の中を動いている。

そこまでを見て取って、陽子の目に涙が浮かんだ。

「……お母さん」

そこに映っているのは母親で、その部屋は陽子の部屋に間違いなかった。

白地にアイボリーの模様が入った壁紙、小花模様のカーテン、パッチワークのベッドカバー、棚の上のぬいぐるみ、机の上の『長い冬』。

母親はうろうろと部屋の中を歩いては、そのあたりのものに触れる。本を手に取り、ページを軽くめくり、机の抽斗を開けて中を覗きこみ、かと思うとベッドに腰を下ろして溜息をつく。

（お母さん……）

母親はどことなくやつれたように見えた。沈んだ顔色に陽子は胸が痛くなる。

きっと陽子を心配している。あちらを発って、すでに二日が経った。一度だって夕飯の用

意に遅れたこともなければ、行く先を告げずに出かけたこともないのに。

一通りそのあたりのものを弄った母親は、やがてベッドに座りこんだ。壁際に並べたぬいぐるみを取って軽く叩く。そうしてそれを撫でながら、声を殺して泣き始めた。

「お母さん！」

まるで目の前にいるようで、陽子は思わず叫んだ。

叫んだとたんに風景が途切れる。ふと我に返ったように目の焦点を合わせると、そこには一振りの剣。すでに輝きをなくして、刃に影は見えない。水の音もやんでいた。

「――何だったの」

今のはいったい何だったのだろう。まるで現実のように見えた。

陽子はもう一度剣を目の前にかざす。じっと刃に目を凝らしても、もう影は見えなかった。水の音も聞こえない。……水滴の音。

陽子はふと思い出す。

あれは夢の中でも聞いた音だった。一月続いたあの夢の中、必ず高い水滴の音がしていた。あの夢は現実になった。――では、今見た幻影は？

考えても分からなくて、陽子は首を振る。母親の姿を見てしまえば、ただもう帰りたくてたまらなかった。

陽子は猿の消えた方角を見やった。

帰れない、罠だ、と認めればすべての希望が失われてしまう。

罠ではない。さっきケイキが助けてくれなかったのだって、陽子を見捨てたからではない。きっと何か事情があったのに違いない。

――いや、そもそもはっきり顔を見たわけではない。あれがケイキだったというのは、陽子の勘違いだったかもしれない。

「きっと、そうだ」

ケイキに似ていたが、あれはケイキではなかった。ここにはさまざまな色の髪を持った人間がいる。金髪でケイキだと思ったが、しっかり顔を確認したわけではない。そう思ってみるとあの人影は、ケイキよりも少し小さかったような気がした。

「そうよ、そうなんだわ」

あれはケイキじゃない。ケイキが陽子を見捨てるなんてことはありえない。だからケイキを捜しさえすれば、きっと帰れる。

固く固く柄を握りしめたとき、ふいに背筋をぞろりとしたものが走った。

「ジョウユウ？」

身体が勝手に起きあがる。剣から上着を解いて身構えようとする。

「……なに？」

返事がないことは承知で問いかけながら、陽子は周囲に目を配った。鼓動が速まる。ざ

わ、と下草を掻き分ける音が正面からした。

——何かが来る。

次いで、聞こえたのは唸り声だった。犬が他を威嚇するときに出す音。

——あの連中。

馬車を襲った連中だろうか？

何にしても、こう暗くては戦うのには不利だ。陽子はそう考えて背後に目をやる。どこか少しでも明るいところへ行きたい、と足を軽く踏み出すと、ぞろりとした感触がそれを助けた。陽子は駆け出す。同時に背後で、何か大きなものが草叢を掻き分けて突進してくる音が聞こえた。

陽子は暗い林の中を駆ける。追っ手の足が充分に速いようなのに追いつかれることがなかったのは、どうやらあまり機敏な相手ではなかったからのようだった。

幹から幹へ伝うようにして走ると左右に振りまわされる音がする。ときおり幹にぶつかるらしい音さえ聞こえた。

光の見える方向に走って、陽子は林から飛び出した。

山の中腹の木立が切れてテラスのように張り出したところだった。白々とした月光に照らされて、眼下になだらかな山の連なりが一望できる。平野でなかったことに舌打ちしながら背後に向かって身構える。盛大な音をたてて大きな影が飛び出してきた。

それは牛に似ていた。長い毛並みをまとっていて、それを呼吸と一緒に逆立てる。犬のような声で低く唸った。

驚きも恐怖も感じなかった。鼓動は速いし、息も喉を灼くようだが、それでもすでに異形のものに対する恐れが薄れていた。ジョウユウの気配に注意を向ける。身内で潮騒に似た音がする。これ以上返り血を浴びるのは嫌だな、とそんなことを暢気に考えた。

いつの間にか月が高い。冴え冴えと白い光を浴びて刃がさらに白かった。

その白刃が夜目には黒く染まって、三撃で大きな化物は横倒しになった。歩み寄って止めを刺す間に、周囲の林の暗がりの中に、赤く光る目が集まっているのを見てとった。

明るい場所を選んで歩きながら、幾度となく襲ってくる妖魔と戦わなくてはならなかった。

長い夜の間に何度も襲撃を受けて、化物はやはり夜に出没するものなのだと悟る。ひっきりなしというわけではなかったが、珠の力を借りても疲労は溜まっていく。人気のない山道に夜明けが訪れたときには、剣を地に突き刺し、杖の代わりにしても歩くことが辛かった。

明るくなり始めると同時に襲撃は間遠になり、朝の光が射したころには完全にやんだ。そのまま道端で泥のように眠ってしまいたかったが、人に見つかっては危険だ。萎えた手足を引きずるようにして動かし、道の脇の林の中に這いこんだ。山道からさほど遠くもなく近く

もない場所に柔らかな茂みを見つけて、そこで剣を抱いて墜落するように眠りについた。

三章

1

夕方近くに起きて、あてもなく歩き、夜を戦って過ごす。寝る場所は草叢で、食べるものはわずかの木の実で、それで三日を数えた。

疲労が大きいのでそんな場所でも眠れないということはなかったが、それでも飢餓は深い。珠を握っていればどうやら飢えて死ぬことはないようだったが、それで空腹が満たされるわけではなく、胃の中に身内を噛む虫を無数に飼っているような気が、陽子にはした。

四日目になって、ただあてもなく歩き続けることに見切りをつけた。

何かに——それが何かは陽子にも分からない——突き当たりはしないだろうかと思って歩き続け、ただ歩くだけでは何ひとつ進展がないことを認めないわけにはいかなかった。

ケイキを捜さなくてはならない。捜すためには人のいる場所へ行かなくてはならない。し

かし、海客だと知れればまた捕まって、同じことが起こるのに違いない。

陽子は自分の姿を見下ろした。

どこかでせめて着るものを手に入れる必要がある。着るものなりとも変われば、一見して陽子が海客だとばれることはないかもしれない。

問題は着るものを手に入れる方法だった。

こちらの通貨が何なのかは知らないが、陽子には所持金がない。買うことは不可能だった。だとすれば方法は限られている。剣にものを言わせて脅し取るか、あるいは盗み取るか。

着るものの問題には早くから気づいていたが、盗みを働く勇気が陽子にはなかった。四日あてもなく山をさまよって、ようやく決心がついた。

陽子は生きのびなければならない。何も人を殺して、死体からものを盗もうというわけではない。躊躇っていては近いうちに限界がくる。

陽子は太い幹の陰から、間近に見える小さな村落に目をやった。貧しい佇まいの家が谷間の中程に密集している。陽はまだ高く、遠目に見える田圃に人影がある。住人はきっと、農作業をしている最中だろう。

意を決してそろそろと林を出た。集落の一番近くに見える家に近づいてみる。塀のようなものはなくて、周囲を小さな畑に囲まれている。黒い瓦の屋根、半分剝げかけた白い土壁。

窓らしき穴が空いているが、ガラスは入っていない。鎧戸のように板戸がついていたが、どれも開いたままになっていた。

陽子は周囲に注意を払いながら建物に近寄る。最近ではどんな化物を見ても震えないのに、歯を食いしばっていなければ奥歯が鳴るのを止められなかった。

そっと窓から中を窺うと、小さな土間に竈とテーブルがあるのが見えた。ダイニング・キッチンという体裁だった。人影は見えず、耳を澄ましても物音もない。

足音を殺して壁伝いに歩き、井戸の傍に戸口らしい板戸を見つけて手をかけてみる。ドアのように引いて開く板戸は難なく動いた。

息を殺して中を窺い、それでようやくこの家が無人なのだと確認する。軽く息を吐いて陽子は家の中に入った。

六畳程度の土間の部屋だった。質素な作りだが「家」の匂いがする。四方に壁があって家具があって生活の道具があって。それだけのことが泣きたいくらい懐かしかった。

この部屋にあるのは棚がいくつかだけだと見てとって、陽子はたったひとつあったドアに近づく。そっと開けてみると、中は寝室のようだった。いつか牢獄にあったのよりいくらかましな寝台が部屋の両端にふたつあり、棚や小卓や大きな木箱がおいてある。どうやらこの家にある部屋はこの二間きりのようだった。

窓が開いているのを確認し、陽子は部屋の中に入ってドアを閉じる。真っ先に棚を検め、

そこにたいしたものはないのを確認してから、次いで木箱の蓋を取った。

中には布の類がぎっしり入っていたが、一見して衣類と呼べそうなものはなかった。部屋を見まわしても、ほかに着るものが入っていそうな家具はない。この布の中に必ずあるに違いないと目算をつけて上から順に引っぱり出した。

大型のテレビぐらいの大きさをしているその箱を空にして、そこに入っているのは雑多なものを入れた小箱がいくつかとシーツや薄い布団、陽子にはとうてい着られそうもない子供用の着物だけだと分かった。

着るものがないはずはないのに、と改めて部屋を見わたしたとき、隣の部屋のドアが開く音がした。

陽子は文字どおり飛びあがった。一気に鼓動が跳ねあがる。ちらりと一瞬窓のほうを見たが、そこまではおそろしく遠く感じる。ドアの外の相手に気づかれずに、そこまで移動するのは不可能なことに思えた。

——来ないで。

軽い足音が隣の部屋を動きまわって、そしていきなり寝室のドアが動いた。ついに身動きできなかった陽子は、箱の前、布が散乱した中に呆然と立っていた。反射的に剣の柄を握ろうとしたが、やめた。

生きのびるために必要だから盗みに入った。居直って剣で脅すことは簡単なことだけれ

ど、相手が怯えなければ剣を使わなくてはならない。人に向かって剣は振れない。だとしたらこれが命運というものだろう。陽子は生きのびるための賭けに負けたのだ。

——痛みなら、一瞬ですむ。

ドアが開いて中へ踏みこもうとした女が痙攣するように震えて硬直した。中年にさしかかったばかりという年頃の大柄な女だった。

逃げる気にはなれなかった。それで黙って立っていた。すとんと気分が落ち着いた自分を感じる。捕まって小突かれながら県庁へ送られ、そこでしかるべき刑罰を受ける。それで全部が終わりになれば、ようやく飢えも疲労も忘れることができるというものだ。

女は陽子と足元に散らばった布を見比べ、そうして震える声で言った。

「うちには盗む値うちのあるものなんて、ないよ」

陽子は女が叫び出すのを待っていた。

「……それとも着るもの？　着物が欲しいのかい？」

陽子は困惑し、ただ黙っていた。女はその様子から肯定を感じとったのだろう、部屋の中に入ってきた。

「着るものならここだよ」

女は陽子の間近を通って寝台に近寄り、膝をついた。広げてあった布団をめくると、寝台の下が抽斗になっていた。

「その箱の中は使わないものばかりなのさ。死んだ子供の着物とかね」
言いながら抽斗を開けて、中の着物を引っぱり出し始めた。
「どんな着物がいい？　あたしのものしか、ありゃしないんだけどさ」
女は陽子を振り返る。陽子は目を丸くした。答えられずにいると女は勝手に着物を広げ始める。
「娘が生きてりゃよかったんだけどね。どれもこれもあんたにゃ、地味かね」
「……なぜ」
ぽつり、と声がもれた。
どうしてこの女は騒ぎ出さないのだろう。どうして、逃げ出さないのだろう。
「なぜ？」
女が振り返ったが、陽子にはその先の言葉を見つけられなかった。女はわずかに強張った顔で笑い、それから着物を広げる作業を続ける。
「あんた、配浪から来たんだろう？」
「……ええ」
「海客が逃げた、って大騒ぎさ」
陽子は黙りこむ。女は苦笑した。
「頭の固い人間が多くてねぇ。海客は国を滅ぼすだの、悪いことが起こるだの。蝕が起こっ

たのまで、まるで海客が起こしたと言わんばかりだからお笑いさ」
言ってから陽子を上から下まで見る。
「……あんた、その血、どうしたんだい？」
「山の中で、妖魔が……」
それ以上は言葉にならない。
「ああ、妖魔に襲われたのか。最近、多いからね。よく無事だったねぇ」
女はそう言って立ちあがる。
「とにかくお座り。ひもじくはないかい？　ちゃんとものは食べていたのかい。ひどい顔色をしているよ」
陽子はただ頭を振った。自然に頭が下がった。
「とにかく何か食べるものをあげようね。湯を使って汚れを落として。着物のことはそれから考えよう」
女はいそいそと隣の部屋に戻ろうとする。動けない陽子をドアのところから振り返った。
「あんた、名前は？」
答えようとしたが、声が出なかった。次から次へ涙がこぼれてその場にうずくまった。
「かわいそうに」
女の声がして、温かな掌が陽子の背中を叩いた。

「かわいそうに、辛かったろうね」
恢えていたものがどっとこみあげ、嗚咽になって喉を突き破った。その場に胎児のように丸くなって、声を上げて泣いた。

2

「とにかくこれに、着がえなよ」
女は衝立の陰から白い着物を渡してくれた。
「泊まっていくだろ？　とりあえず寝間着を着ておいで」
陽子は深く頭を下げる。
女は泣きじゃくる陽子を慰めてくれて、小豆の入った甘いお粥を作ってくれて、そうして大きな盥に湯を張って、風呂の用意をしてくれた。
長い間苦痛を訴え続けていた飢えがおさまって、熱いお湯で身体を洗って、清潔な寝間着に袖を通すとそれでようやく人間に戻った気がする。
「本当に、ありがとうございます」
風呂を使っていた衝立の陰を出て、陽子は改めて頭を下げる。
「……申しわけありませんでした」

陽子はこの女からものを盗み取ろうとしていたのだ。
まっすぐに見てみると、女の目は青い。その碧眼を和ませて女は笑った。
「いいんだよ、このくらいのこと。それより温かいものでもおあがり。これを飲んで、今夜はゆっくり寝るといい。布団を出してあげたからね」
「すみません」
「いいんだって。それより、その……悪いけど剣をしまわせてもらったよ。どうも心臓に悪くって」
「はい……。すみません」
「謝りっこなしだ。それより、名前を聞きそびれたままだったね」
「中嶋陽子です」
「さすがに海客の名前は変わってるや。あたしはタッキってみんな呼ぶね」
言いながら、彼女は陽子に湯呑みを差し出した。陽子はそれを受け取り、
「タッキ？　どんな字を？」
達姐、と女は指でテーブルに文字を書いた。
「ところで陽子は、これから先のあてがあるのかい？」
訊かれて陽子は首を振った。
「何も……。達姐さん、ケイキという人を知らないでしょうか」

「ケイキ？　あたしの知り合いにゃいないが。――人捜しかい？」
「はい」
「そりゃ、どこの人？　巧国の？」
「こちらの人だとしか……」
達姐は苦笑した。
「それだけじゃねぇ。せめてどの国のどのあたりか、それくらいは分からないと」
陽子は俯いた。
「あたし、全くこちらのことが分からないものだから……」
「そうだろうね」
言ってから達姐は湯呑みをおく。
「こちらには国が十二、ある。ここはそのうちの南東の国だ。巧国っていう」
陽子は頷いた。
「陽の昇るほうが東？」
「そうだよ。そうして、ここは巧国の東だ。五曽っていう。ここから北に十日ほど歩くと、高い山に出る。そこを越えた向こうが慶国だね」
陽子は達姐が机の上に書いた文字を見据える。
「配浪はここからまっすぐ東に行った海岸のあたりだ。街道沿いに歩いて、五日ってとこだ

ね」

全く把握が不可能であったものがようやく形を現してきて、やっとひとつの世界にいるのだという気がした。

「巧国はどのくらいの広さがあるんですか？」

達姐は困惑したように首をかしげる。

「どのくらいと訊かれてもね。そうだね、この巧国を東西に端から端まで歩いて、三ヵ月ってとこかね」

「……そんなに？」

陽子は目を見張った。歩いて、という時間の単位はよく把握できないが、それが少なくとも想像を絶するほどの距離だということは理解できた。

「そりゃあ、そうさ。かりにもひとつの国なんだから。南北に歩くのにも、そのくらいはかかる。隣の国に行くには山か海を越えなきゃならないから、四ヵ月近くの旅になるね」

「……そして、十二国……」

「そうだよ」

陽子は目を閉じた。わけもなく箱庭のような世界を想像していた自分に気がついた。この広大な場所で、たったひとりの人間を捜せというのか。何の手がかりもなく、ケイキという名前だけで。ただこの世界を一周するだけで、四年はかかるというのに。

「そのケイキという人は、どういう人なんだい？」
「……分かりません。たぶん、こちらの人だとしか。あたしをこちらへ連れてきた人なんです」
「連れてきた？」
「はい」
「へえぇ、そういうこともあるんだねぇ」
達姐は感心したように言った。
「珍しいことなんですか？」
「あたしはあんまり学がないんでね」
達姐は苦笑する。
「海客についてもくわしくないのさ。海客なんて、めったにお目にかかるものでもなし」
「……そうなんですか」
「そうだよ。——何にしても、そりゃあ、普通の人間じゃないだろう。あたしたちにはできないことだからさ。神さまの仲間か仙人か、人妖か……」
陽子はキョトンと達姐を見返した。達姐は笑みを浮かべる。
「あちらに行くとか、人を連れてくるとか、普通の人間にできることじゃないんだよ。普通の人間じゃないとなれば、神仙か妖魔だってことになるね」

「妖魔がいるのは分かりますけど……神さまや仙人もいるんですか？」
「いるね。あたしたちには縁のない上の世界のことだけど。神も仙人も上で暮らす。めったに下には下りてこない」
「上？」
「空の上さ。下にいる仙人もいないじゃないけどね。――王様に州侯、みんな空の上さ」
陽子が首をかしげると達姐は苦笑する。
「それぞれの州には領主がひとりいる。ここ淳州なら淳侯だ。王から侯に任ぜられて、淳州を治めてる。州侯ともなれば普通の人じゃない。不老長寿で、神通力を操ったりする。まあ、別の世界の人だねぇ」
「それじゃ、ケイキもそういう人なんでしょうか」
「さてね」
達姐はさらに苦笑した。
「仙人というなら、国の偉い役人もそうだし、王宮で働く者は下っ端にいたるまでみんな仙人さ。人は空の上には行けない。王宮は上にあるから、そういうことになるね。王なら神の一族だ。仙人は王が任命する。それ以外にも自力で昇仙する奴もいるけどね、そういうのはだいたい世捨て人だ。何にしてもあたしたちとは別の世界の人だし、会うこともありゃしない」

陽子は達姐の言葉を丹念に頭の中へしまいこむ。どんな知識も重要だった。

「海には龍王がいて海の中を治めるというけど、本当のことか、おとぎ話かは知らない。本当に龍国があるんだったら、そこの人間も普通の人じゃないんだろうさ。そのほかにも妖魔の中に人の形になれるものがいるそうだ。人妖っていうんだが。たいがいは人に似てるってだけだが、中には普通の人間と区別がつかない姿に化けられるのもいるってさ」

達姐は言って土瓶から冷めたお茶を注ぎたした。

「この世のどこかに妖魔の国があるというけど、本当かどうかは分からない。人と妖魔も、結局のところ別の世界の生き物だからね」

陽子は俯いた。情報は増えたのに、事態はかえって混沌としてきた気がする。

ケイキは人ではないという。では、いったい何者だったのだろう。ヒョウキやカイコや、あの奇妙な獣たちは妖魔の一種だろう。だとしたら、ケイキもまた人妖なのだろうか。

「あの……ヒョウキとか、カイコとかジョウユウという妖魔はいますか？」

達姐は不思議そうな顔をした。

「……そういう妖魔は聞いたことがないねぇ。どうしたんだい？」

「ヒンマンとか」

達姐は少しけげんそうにする。

「賓満だろう。戦場や軍隊に出る妖魔だ。身体がなくて赤い目をしているそうだよ。——何

でそんなもんを知ってるんだい」
陽子は少し身を震わせる。では、ジョウユウは賓満という妖魔なのだ。それが今も自分の身体に憑依している。
それを言ったら達姐に気味悪く思われそうで、陽子はただ首を振った。
「……コチョウとか」
「コチョウ」
身じろぎをして、達姐は蠱雕、という文字を書く。
「角のある鳥だろう。人を喰う獰猛なやつだ。蠱雕がどうしたんだい？」
「襲われたんです」
「莫迦な。どこで」
「あちらで……。蠱雕に襲われて、あたしは逃げて来たんです。あたしかケイキを狙って現れたみたいで……。身を守るためにはこちらへ来るしかないと、ケイキがそう言って」
「そんなことがあるもんかね」
達姐は低く言う。陽子は重い溜息をつく達姐を見返した。
「何か変ですか？」
「変だね。どこぞの山に妖魔が出るというだけでも、こっちの人間にはおおごとなんだよ。もともと妖魔ってのは、そうそう人里に出るもんじゃない」

「そう……なんですか？」

目を見張る陽子に、達姐は頷いてみせる。

「最近はどういうわけか多いけどね。危なくって、日が暮れたら外に出られやしない。蠱雕みたいな獰猛なやつが出るとなったら大騒ぎさ。だけどねぇ」

達姐は難しい顔をする。

「妖魔ってのは猛獣みたいなもんで、特に誰かを狙ったりはしない生き物なのさ。しかもわざわざあちらへ、なんてね。そんな話は初めて聞いたよ。――陽子はひょっとしたら、何かおおごとに行きあっちまったんじゃないのかい」

「そうなんでしょうか」

「あたしにゃ、よく分からないけどね。ちかごろ妖魔が多いことといい、どうにも嫌な感じだねぇ」

達姐の不安そうな声が陽子までも不安にする。山に妖魔がいることも、妖魔が人を襲うことも、こちらではあたりまえのことだと思っていたのに。

――いったい、自分は何に巻きこまれているのだろう？

考えこんだ陽子を励ますように、達姐が明るい声を投げてきた。

「そんな難しいことをあたしたちで考えてもしかたないさ。それより、陽子はこれからあてがあるのかい？」

訊かれて陽子は顔を上げる。達姐の顔を見返して首を横に振った。
「……ケイキを捜すことしか、あたしにできることはないんです」
たとえケイキたちが妖魔だとしても、彼らが陽子に危害を加えないことは知っている。
「それは時間がかかる。簡単にできることじゃないよ」
「……はい」
「とりあえず生活しなきゃならないだろ？　ここにいてくれてもいいけど、近所の連中に見つかると、また県庁へ突き出されることになるよ。親戚の子だと言えば通るだろうけど、そんなに長い時間は無理だ」
「……そんなご迷惑はおかけしません」
「東に行ったところに河西という街があるんだが、そこにあたしのおっかさんがいる」
陽子は達姐を見返した。達姐は笑う。
「宿屋をやっているんだけどね。おっかさんなら、事情を聞いてもあんたを県庁に突き出したりしない。雇ってくれるよ。——働く気はあるかい？」
「はい」
陽子は即座に頷いた。ケイキを捜すのは、とてもむずかしいことだろう。だとしたら、どこかに生活する場所を持っていなければ話にならない。妖魔と戦う夜も、食べるものもなく野宿する夜も、できることならもう終わりにしたかった。

達姐は笑って頷く。

「偉いね。なぁに、そんなに大変な仕事じゃない。ほかに働いてるのも気のいい子ばかりだし、きっと気に入るよ。——明日には発てるかい？」

「だいじょうぶです」

よかった、と達姐は笑った。

「だったらおやすみ。ゆっくり休んで。もしも明日起きて旅が辛いようだったら、しばらくここにいていいんだからね」

陽子は頷く代わりに深く深く頭を下げた。

3

こちらの寝台は畳の上に薄い布団を敷いているような感触がした。一度寝入った陽子は深夜に目を覚ました。

部屋の向かい側にある寝台を見ると、気のいい女は深く眠っている。寝台の上に起きあがって膝を抱くと清潔な肌に清潔な寝間着がさらさらと音をたてた。

音のない深夜、窓の板戸を閉め切った部屋は暗い。重い屋根と厚い壁に守られて、小さな動物のたてる物音が眠りを妨げることもない。空気までが穏やかに淀んで、人の眠る場所だ

という気がしみじみした。

陽子は寝台を下りてダイニングに向かう。棚の中に収めた剣を取り出した。

深夜は起きておくのが短い間についた習慣で、すでに柄を握っていないと何とはなしに不安を感じた。椅子に腰を下ろし、達姐にもらった新しい布を巻いた剣を腕に抱きしめて、そっと息をつく。

達姐の母親が宿屋を営んでいる河西という街まで、歩いて三日の距離だと聞いた。そこへ着けば陽子はこの世界に居場所を得ることができる。

働いた経験はないが、不安よりも期待が大きかった。達姐の母親はどういう人物だろうか。そこで働く同僚はどんな人たちなのだろうか。

建物の中で眠って朝には起きて、一日を働いて夜には眠る。働き始めれば仕事のことよりほかに考えられなくなるだろう。ひょっとしたらあちらの世界の家に帰ることも、ケイキを捜すこともできないかもしれなかったが、それでも構わないという気が、今はしていた。

やっと足場を見つけて陽子はうっとりと目を閉じる。

額を当てた布の下で高く澄んだ音がしたのはそのときだった。

陽子は慌てて剣を見る。巻きつけた布の下で淡い光が点っているのが目に入った。おそるおそる布を解くと、刀身がいつかの夜のように淡く輝いている。その刃に薄く小さな影が見えた。

ぼやけた目の焦点が合うようにして、影が実像を結んだ。まるで映画でも見るように陽子の目の前に現れたのは、陽子自身の部屋だった。手を伸ばせば触れそうなほどリアルだけれど、決して現実ではない。げんに洞窟に反響するような水の音が絶え間なく続いている。

刀身に見えたのは、例によって母親の姿だった。陽子の部屋の中をウロウロとさまよっている。

母親は部屋の中を歩きまわり、抽斗を開け、棚を弄る。何かを探すようにそれを続ける。何度目かに整理ダンスの抽斗を開いたとき、部屋のドアが開いて父親が現れた。

「おい。風呂」

父親の声がはっきり聞こえた。

母親はチラと視線を向けて、そのまま抽斗を検める。

「……どうぞ。お湯なら入ってます」

「着がえは」

「そのくらい、出してください」

母親の声には棘が含まれている。それに対する父親の声にも棘があらわだった。

「こんなところでグダグダしていても、しかたがないだろう」

「グダグダしてるわけじゃないわ。用があるの。着がえくらい、自分で出してください」

父親は低い声で言う。

「陽子は出ていったんだ。こんなところでいつまでもウロウロしていたって、帰ってくるわけじゃない」
（出ていった？）
「出ていったんじゃないわ」
「家出したんだ。学校に妙な男が迎えに来ていたそうじゃないか。ほかにも外に仲間がいて、窓ガラスを割ったんだろう。陽子は隠れて妙な連中と付き合っていたんじゃないのか」
「そんな子じゃありません」
「お前が気がつかなかっただけだろう。陽子の髪だって、実は染めてたんじゃないのか」
「違います」
「子供が不良の仲間に入って、あげくに家を出ていくなんてことは、掃いて捨てるほどあることだ。そのうち家出に飽きたら帰ってくる」
「あの子はそんな子じゃないわ。わたしはそんな育て方はしてません」
睨む母親を父親も睨み返した。
「どこの親もそう言うんだ。学校に押し入った男も髪を染めてたらしいし、おおかたそういう連中と付き合ってたんだろう。あの子はそういう子だったんだ」
（お父さん、違う……！）
「ひどいことを言わないで！」

母親の言葉には恨みがこもる。
「あなたに何が分かるの。仕事、仕事って、子供のことは全部わたしに押しつけて！」
「それでも分かる。父親だからな」
「父親？　誰が？」
「律子」
「会社に行ってお金を持って帰ってくれば父親なの？　娘が姿を消しても、会社も休まなきゃ何をするでもない。そういう人が父親なの⁉　そういう子だった、ですって？　陽子のことを知りもしないで勝手なことを言わないで‼」
父親は怒るよりも先に驚いていた。
「少し落ち着け、莫迦者」
「わたしは落ち着いてます。今までにないくらい落ち着いてるわ。陽子がたいへんなときなんですもの、わたしがしっかりしなくてどうするんですか」
「お前にはお前の役目があるだろう。落ち着いてるんだったら、やることをやって心配をしろ」
「……着がえを出すのが役目なの？　子供の心配をするよりも優先しなきゃいけない、たいそうな役目なの⁉　あなたって人は、自分のことしか考えてないのね！」
怒気で顔を真っ赤にして黙りこんだ父親を、母親は見据える。

「そんな子だった、ですって？　あの子はずっと、いい子だったでしょう。口答えをしたことも反抗したこともない。おとなしい素直な子だわ。心配をかけたことなんて、一度だってない。わたしには何でも話してくれた。家出なんかする子じゃないわ。あの子は家に不満なんてなかったんですからね」

父親はそっぽを向いて黙っている。

「陽子は学校に鞄を残したままなのよ？　コートだって残ってた。それでどうして家出なの！　何かあったのよ。そうとしか考えられないでしょう」

「だったらどうした」

母親は目を見開く。

「どうした、ですって？」

父親は苦々しげに答える。

「何か事件に巻きこまれたとして、それでお前が何をしようというんだ。警察にだってちゃんと届けたろう。私たちがここで右往左往して、それで陽子が帰ってくるのか」

「何なの、その言いぐさは！」

「事実だろうが！　それともビラでも電柱に貼るのか。そんなことをして、陽子が帰ってくるのか。――はっきり言ってやるが」

「やめて」

「家出じゃなくて、何かの事件に巻きこまれたなら、陽子はもう生きてない」
「やめてください！」
「ニュースで見て分かってるだろう。こういう例で生きていたためしがあるか！　だから家出だと言ってやってるんだろうが!!」
母親が泣き崩れた。父親はその姿を見やって乱暴な足どりで部屋を出ていく。
（お父さん、お母さん……）
見ていることがあまりに辛かった。
風景がぼやけて思わず目を閉じ、頬に涙がこぼれたのを感じて目を開けると、視界は澄んで、すでに幻は見えなかった。
目の前には一振りの剣。すでに光を失った剣を陽子は力なく下ろした。
涙が止まらなかった。

4

「……あたし、死んでない」
死んだほうが、ましかもしれない状況だが、それでもとりあえず生きてはいる。
「家出なんか、してない……」

どんなに家に帰りたいか。どれほど両親と家が懐かしいか。

「お父さんとお母さんがケンカするの、初めて見たなあ……」

陽子はテーブルに額を当てて目を閉じる。次から次へ涙がこぼれた。

「……莫迦みたい……」

今見たものが何だか分かりもしないのに。真実だとは限らないのに。

陽子は身を起こし、涙を拭って剣に布を巻く。これはどうやら剣の見せる幻影らしい。真偽のほどは分からない。それなのに、真実に違いないという直感がはたらいた。

せつなくてせつなくて、立ちあがった。裏口を開けて夜の中にさまよい出る。

空は満天の星、しかしながら陽子の知っている星座は見えなかった。もともと星座を鑑賞する趣味はない。ひょっとしたら陽子には分からないだけなのかもしれなかった。

井戸端に座りこんだ。冷えた石の感触と冷たい夜風が少しだけ気分をなぐさめた。膝を抱いてうずくまっていると、ふいに背後から声がした。耳に刺さるような嫌な声だった。

「帰れないよォ」

ゆっくり背後を振り返ると、しっかりした石で作られた井戸の縁に、蒼い猿の首が見えた。まるで切断されて石の上に据えてあるように、身体のない首だけが石の上で笑っている。

「まだ諦めてなかったのかい。お前は帰れないんだよォ。帰りたいだろ？　母親に会いたい

だろ？　いくら願っても帰れやしない」
　陽子は手探りをしたが、剣を持っていなかった。
「だから言ってるのによォ。自分の首を刎ねちまえよ。そうしたら楽になるからサァ。恋しいのもせつないのも、ぜんぶ終わりになるんだぜ」
「あたしは諦めない。いつか帰る。それがずっと先のことでも」
　きゃらきゃらと猿は笑った。
「好きにするサァ。――ついでに教えてやるけどな」
「聞きたくない」
　陽子は立ち上がった。
「いいのかい、聞かないで？　あの女はナァ」
「達姐さん……？」
　振り返った陽子に向かって猿は歯を剝いた。
「あの女は信用しないほうがいい」
「……なに、それ」
「お前が期待してるほど、善人じゃないってことサァ。よかったなぁ、飯の中に毒が入ってなくてナァ」
「いいかげんにして」

「お前を殺して身ぐるみ剝ごうって魂胆か、お前を生かして売り飛ばそうって魂胆か、どっちにしたってそんなもんサァ。それをありがたがっているんだからナァ。甘い、甘い」
「ふざけたことを」
「俺は親切で言ってんだぜェ？　まだ分からないのかい。ここにはお前の味方なんていやしないのさァ。お前が死んでも気にしない。むしろ生きてちゃ迷惑だからな」
陽子は猿を睨み据える。猿はそれに対してきゃらきゃらと笑って応えた。
「だから言ってるのに。痛いのだったら、一瞬ですんだのにサァ」
大笑いしてから、猿は凄みのある顔をする。
「悪いことは言わないから、斬っちまいな」
「なに……」
「あの女を斬って、あり金持って逃げるのサァ。往生際悪く生きる気があるんだったら、そうしたほうが身のためだぜ」
「いいかげんにしろ！」
きゃらきゃらと狂ったように笑って、猿は掻き消すように消えた。いつかの夜のように耳に刺さる笑い声だけが遠ざかってゆく。
陽子はその方角をただ、睨み据えていた。何の恨みがあっての中傷だろう。
——信じない。

あんな化物の言うことなど決して信じたりしない。

翌朝、陽子は身体をゆすられて目を覚ました。

目を開けるとそこは粗末な部屋の中で、大柄な女が困ったように陽子を覗きこんでいる。

「目が覚めたかい？　疲れてるようだけど、とにかく起きてご飯をお食べ」

「……すいません」

陽子は慌てて身を起こす。達姐の表情を見れば、自分がかなりの間眠りこけていたのが分かる。

「謝ることはないさ。どうだい？　出かけられそうかい？　それとも明日にしようかね」

「だいじょうぶです」

起きあがってそう答えると、達姐は笑う。それから自分の寝台を指さした。

「着るものはそこだよ。着方は分かるかい？」

「たぶん……」

「分からなかったらお呼びね」

言って達姐は隣の部屋に消える。陽子は寝台を下りて、彼女が揃えてくれた着物を手に取った。

紐で括りつける踝丈のスカートと、短い着物のようなブラウス、同じく短い上着で一揃

いだった。初めて身に着ける衣服は落ち着かない気分にさせる。何度も首をひねりながらそれを身に着けて隣の部屋に行くと、テーブルの上に朝食が並んでいた。
「おや。よくお似合いだ」
達姐はスープの入った大きな器をおきながら笑う。
「少し地味かね。若いころの着物があればよかったんだけどね」
「……とんでもない。ありがとうございます」
「あたしにはちょっと派手なのさ。どうせそろそろ人にあげようと思ってた。——さ、ご飯にしよう。うんと食べておきなよ。これからずいぶん歩かなきゃならないんだからね」
「はい」
陽子は頷いて頭を下げ、テーブルに着いた。箸を手に取るとき、一瞬だけ昨夜の猿が言った言葉を思いだしたが、現実味を感じなかった。
——良い人だ。
匿ったことが分かれば、それなりの咎めもあるだろうに、本当によくしてくれる。疑っては罰があたるというものだろう。

5

昼過ぎには達姐の家を出た。

そこから河西までの道のりは驚くほど楽しい旅になった。最初の頃こそ人に会うたびにビクビクしたが、達姐に言われ、草の根で髪を染めたせいもあってか、誰ひとり陽子の素性を怪しまないことに慣れてからは、あちこちで人に会うことさえ楽しみになった。

国は古い中国のような佇まいをしていたが、そこに住む人の中にはいろんなタイプの人間がいた。顔だちこそ誰もが東洋人に見えたが、髪や目や肌の色はさまざまだった。

肌の色は白人のような白から黒人のような黒まであったし、目の色も黒から水色までさまざま、髪の色にいたっては本当に千差万別だった。中には紫がかった赤毛や青みがかった白髪まであって、もっと変わった場合には染め分けたように一部の色だけ違っていたりした。

最初は奇妙に感じたが、すぐに慣れた。慣れてみれば、変化があって面白い。ただ、ケイキのような純然たる金髪というのは見かけなかった。

服装は古い中国風、男は上着と丈の短いズボン、女は長いスカートが基本のようだった。ときどき、東洋風であることだけは確実だが、どこの国のどの時代風とも言えない服装をし

た旅人のグループがいたりしたが、それは旅芸人なのだと達姐が教えてくれた。
陽子はただ歩くだけでよかった。道は達姐が示してくれ、食事の調達から宿の手配まで全て彼女がやってくれた。むろん陽子には所持金がないので、全部達姐の支払いである。
「……本当にすみません」
街道を歩きながら言うと、達姐は豪快に笑う。
「あたしは、おせっかいなのさ。気にすることはない」
「何のお返しもできなくて」
「なぁに。ひさしぶりでおっかさんに会える。あんたのおかげだ」
そう言ってくれる心根が嬉しかった。
「達姐さんは、五曽へお嫁にいったんですか？」
「いいや。あそこに振り分けられたのさ」
「振り分け？」
達姐は頷く。
「成人になったら、お上から田圃をもらって独り立ちするんだよ。あたしがもらった田圃はあそこだった、ってことだね」
「成人になったら、誰もがもらうんですか？」
「そうさ。誰でもね。――亭主は隣に住んでるじじいだ。もっとも子供が死んでから別れた

けどね」

陽子は笑った達姐の顔を見返す。そういえば、死んだ子供がいると、この女は言っていた。

「……すみません」

「気にすることはない。あたしの性分が悪かったんだろうさ。せっかく授かった子供を死なせたんだからね」

「そんな」

「子供は天から授かるもんだ。天がそれを取り返したってことは、あたしにゃ任せておけないってことだからね。まぁ、人間ができてなかったんだから仕方ない。子供がかわいそうだったけどね」

陽子は対応に困って曖昧に微笑う。達姐は少しだけ寂しそうにしてみせた。

「あんたのおっかさんも、今ごろせつない思いをしてるだろう。早く帰ってやれるといいねえ」

陽子は頷く。

「……はい。でも、戻れるんでしょうか。配浪の長老さんは、戻れないって」

「来れたもんなら帰れるさ。きっとね」

陽子は瞬く。屈託のない笑顔が心底嬉しかった。

「……そうですね」

「そうさ。――ああ、こっちだよ」

三叉路で達姐は左を示す。街道の角には必ず小さな石碑が立っていて、行く先と距離を刻んであった。距離の単位には「里」を使うらしい。その石碑には「成　五里」と刻んである。

日本史の教科書で習った知識によれば一里は四キロのはずだが、こちらの一里はもっとずっと短い。多くても数百メートルといったところだろう。五里ならば、あまり遠くない。

風景は決して豊かなようには見えなかったが、長閑で美しかった。土地は起伏が多く、山は概して険しく高い。遠くに薄く見える山の中には雲を衝くほど高い山もあったが、雪を被っている様子はなかった。空は何だかとても低く見えた。

こちらは東京よりも一足早く春を迎えたところのようだった。畦には花がちらほらと咲いている。陽子が知っている花もあれば知らない花もあった。

その田園風景のところどころに、小さな家が身を寄せ合うように建っている集落がある。それを「村」というのだと、達姐が教えてくれた。田圃で働く者が住む家なのだと。しばらく歩けば、周囲を高い壁に囲まれた少し大きな集落に出会う。それは「里」といって、近辺の人々が冬の間、住む街らしい。

「冬とほかの季節とでは、住む場所が違うんですね」

「冬は田圃にいてもしかたないからね。冬にも村で暮らす変わり者もいるが、里に戻ったほうが人がいて楽しい。それに里のほうが安全だしね」
「厚い壁がありますもんね。やっぱり妖魔に備えてあるんですか？」
「妖魔ってのはそう簡単に里を襲ったりしない。むしろ内乱や獣に備えているのさ」
「獣？」
「狼や、熊や。このあたりにはいないけど、虎や豹だっているところにはいる。冬になると山に獲物がなくなるから、人里に下りてくるからね」
「冬の間、住む家はどうするんですか？　借りるの？」
「それも成人になるとお上がくれる。たいがい売っ払っちまうけどね。村に行ってる間、商人に貸す連中もいるけどさ。売って冬には家を借りる、そのほうが普通だね」
「へえ……」
街は全て高い城壁に守られていた。街の入り口はひとつだけで、そこには堅牢な門がある。門には衛士がいて出入りする旅人を監視していた。
いつもは衛士はただ門を守っているだけだと、達姐は言う。旅人のうち、特に赤毛の若い女が呼び止められていたから、配浪から逃げた海客に対する警戒なのだろう。
門を入った中には家が密集し、縦横に走った道には店が並んでいる。街には浮浪者が多かった。街の内壁の下にはテントのような家を構えて生活をしている人々がいた。

「必ず土地を貰うのに、どうしてなんですか？」
陽子が壁の下を示すと、達姐は少し眉を顰める。
「あれは慶国から逃げてきた連中さ。かわいそうにね」
「逃げてきた？」
「慶国は今、国が乱れていてね。妖魔や戦争から逃げてきた連中がああして集まっているのさ。暖かくなってきたから、これからもっと増えるだろうよ」
「こちらにも内乱があるんですね」
「あるともさ。慶国だけじゃない。北のほうの戴国だってそうだ。戴国のほうはもっとひどいって話だよ」
陽子はただ頷いた。こちらに比べれば日本は平和な国だったと思う。ここには戦乱があり、しかも治安は格段に悪い。荷物は片時も離せなかった。ガラの悪い男が声をかけてくることは再三だったし、さらにガラの悪い危険そうな連中に囲まれたこともあった。そのたびに達姐が豪快な啖呵を切って陽子を守ってくれた。
そのせいか、人は決して夜の旅をしない。街の門は夜には閉まる。したがって陽が落ちるまでには必ず次の街に辿り着いていなければならなかった。
「ひとつの国から次の国に行くまでに、だいたい四ヵ月近くかかるんですよね？」
「そうだよ」

「歩く以外に旅行をする方法はないんですか？」
「馬や馬車を使うこともあるけどね。そういうのは金持ちのすることだ。あたしぐらいじゃ一生無理かねえ」
こちらは陽子の知る世界に比べてあまりに貧しい。自動車はもちろん、ガスもなければ電気もない。水道もなかった。それがどうやら、たんに文明が遅れているということのせいだけではなく、こちらには石油や石炭が存在しないことが大きな原因のようだと、話をするうちに推測がついた。
「なのにどうして、よその国のことが分かるんですか？　達姐さんは慶国や戴国に行ったことがあるの？」
まさか、と達姐は笑った。
「巧国から出たことはないよ。農民はあまり長旅をしないからね。田圃があるからさ。よその国のことは芸人に聞くんだ」
「芸人？　旅芸人に？」
「そう。芸人の中にはね、世界中をまわってる連中がいる。出し物の中に小説ってのがあってね、それはどこそこでこんなことがありました、ってのを聞かせてくれる。いろんな国の話や、よその街の話なんかをね」
「へぇえ……」

陽子の住んでいた世界でも、ずっと昔には映画館でニュースをやっていたというし、そんなものなのかしら、と陽子は思う。

何にしても、疑問に答えてくれるひとがいるのは嬉しかった。陽子にはこの世界のことが何ひとつ分からない。分からないままなら不安で怖いが、横に親切なひとがいて、ひとつずつ解説してくれればおもしろかった。

達姐に守られてする旅は何の造作もなく、あれほど辛いばかりに思われた世界はもの珍しく興味深い世界に変容した。

夜毎に奇妙な幻が訪れ、家が懐かしくて落ちこんだし、あの蒼い猿も訪れては陽子を不安にさせたが、せつない気分は長続きしなかった。

朝起きて里を出れば珍しいものばかりだったし、達姐はこれ以上ないほど親切にしてくれた。珠の力を借りれば歩き続けることに苦労はない。夜にはちゃんと食事ができ、ちゃんとした宿で眠れると分かっていればなおさらだった。

故国を離れたことは辛いが、少なくとも今は親切な保護者が傍にいてくれる。出会わせてくれた好運に感謝せずにおれなかった。

6

三日の旅はすぐに終わって、陽子を少しもの足りない気分にさせた。三日目に辿り着いた河西の街は、川の畔に大きなビルのような姿で現れた。こちらに来てから初めて見る、都市らしい街だった。

「へえ……。大きい」

門をくぐりながら周囲を見わたす陽子に達姐は笑う。

「このあたりで河西以上に大きい街となると、郷庁のある拓丘ぐらいしかないね」

郷とは県の一段階広い区分らしい。それがどの程度の規模のものなのかは、よく分からない。達姐もあまりよくは知らないようだった。役所といえば里の里庁、ちょっとおおごとで県庁、それで用が足りるらしい。

門を入った目抜き通りには、大小の店が軒を連ねている。これまで通過してきた里とは違って店の構えも豪華で大きく、その光景は中華街を思わせた。大きな建物の窓にはガラスが入っているのがひどく印象に強い。夕刻にはまだかなり早く、通りに人の姿は少なかったが、旅人が駆けこむ時間帯になれば人でごったがえすのだろうと想像がついた。

この活気のある都市で生活することになるのだと思うと、少しだけ気分がよかった。どこ

かで落ち着けるのなら里でも不満はないが、賑やかな街ならなお良いことは言うまでもない。

達姐は目抜きの通りを折れて、一回り小規模な店の立ちならぶ一郭に足を向けた。どことなくうらぶれた風情はあったが、やはり賑やかなことに変わりはない。軒を連ねた店のうち、達姐は比較的立派な建物に入っていった。

建物は緑の柱が鮮やかな三階建ての建物だった。大きな戸口を入った一階は広い食堂になっている。華やかな店構えを見まわす陽子をよそに、達姐は対応に出た従業員らしき男を捉まえた。

「女将さんを呼んでくれるかい。娘の達姐が来たと言ってくれりゃ、分かる」

男は満面に笑みを浮かべて、奥へ消える。達姐はそれを見送って陽子を手近のテーブルに座らせた。

「ここに座っておいで。何か貰おうね。ここのものはけっこう、おいしいよ」

「……いいんですか？」

これまで入ったどんな宿よりも食堂よりも、この店は大きい。

「構うもんか、おっかさんのおごりだ。何でも好きなものをおあがりよ」

そうは言われても、陽子にはまだ献立がよく分からない。それを察したように達姐は笑い、店員を呼んで二、三の品を注文する。店員が頭を下げて退ったところで、店の奥から老

婆といっていい年頃の女が現れた。

「おっかさん」

達姐は立ち上がって笑みを浮かべる。老婆がそれに嬉しげな笑顔で応えた。陽子はそれを見守って、気のよさそうな人だと安堵する。彼女が主人ならそんなに辛い仕事ではないだろう。

「陽子はここで待っておくれね。あたしはおっかさんと話をしてくる」

「はい」

陽子が頷くと達姐は笑って母親のもとに駆けよる。ふたりは背中を叩きあって笑いあい、そうして店の奥に消えていった。陽子はそれを何となく微笑んで見送り、達姐がおいていった荷物を手近に引きよせて店の中を見わたした。

どうやら今店の中には女の店員はいないようだった。テーブルの間を飛びまわっている店員は全部が男で、客もまた男が多い。そのうちの何人かが窺うように陽子のほうを見ているのに気がついて、何となく陽子は落ち着かない気分になった。

少しして入ってきた男の四人連れは、陽子の近くのテーブルに陣取って露骨に野卑な視線を向ける。何ごとかを囁きあっては笑うのが、どうにも居心地が悪かった。

店の奥に視線を向けても、達姐が戻ってくる気配はない。しばらくはじっと耐えていたが、四人組のうちのひとりが立ちあがって陽子のほうに歩いてきたのを認めて我慢がならず

に立ちあがった。

声をかけてこようとした男を無視して陽子は店員を捉まえる。

「あの……達姐さんはどこに行ったんでしょうか」

店員はただそっけなく奥を示した。行ってみてもいいということだろうかと考えて、陽子は荷物を抱えて奥に向かう。止める者は誰もいなかった。

奥の細い廊下を辿っていくと、いかにも店の裏舞台らしい雑然とした一郭に出た。何とはなしにうしろめたくてそっと奥へと歩いていくと、きれいな彫り物をしたドアが開いていて、中を隠すように据えられた衝立の向こうから達姐の声が聞こえた。

「そうオドオドおしでないよ」

「だってお前、手配されてるあの海客なんだろう」

陽子は足を止める。老婆はどうやら、渋っているような声音だった。急に不安が首をもたげた。やはり海客では雇ってもらえないのだろうか。

お願いします、と頭を下げに行きたい気がしたが、それは出すぎた真似というものだろう。かといって店に戻るのは心細くてできない。

「海客が何だい。ちょいとこちらに迷いこんだだけじゃないか。悪いことが起こるだの、そんな迷信をおっかさんも信じてるのかい」

「……そういうわけじゃないが、役人に知れたら」

「黙っていれば分かりゃしないさ。あの子だって、自分から言いやしないよ。そう考えりゃ滅多にない掘り出しものだろう？　器量だっていいし、歳だって手ごろなんだからさ」
「けどねぇ」
「育ちだって悪くないようだ。ちょっと客の扱いを教えれば、すぐにも店に出せる。それをこれだけで譲ろうってんだ。どうして迷うのさ」
陽子は首をかしげた。達姐の口調は何かがおかしい。立ち聞きはいけないことだと思いながらも耳を澄ますことをやめられなかった。耳に秘かな音が聞こえ始める。潮騒に似た、微かな音。
「だって海客じゃ……」
「後腐れがなくていいじゃないか。親や兄弟が怒鳴りこんでくることもない。最初からいない人間と同じなんだから、いろいろと面倒も減るだろう？」
「……それで、あの子は本当にここで働く気があるのかえ」
「あるって本人が言ったんだ。あたしはちゃんと宿だって言った。下働きか何かだと勘違いしてるなら、そりゃあの子が莫迦なのさ」
陽子はただ声に聞き入る。何かがひどくおかしい。「あの子」とは陽子のことだろう。なのにこれまで陽子を呼ぶときにこめられていた温かみが、かけらも感じられなかった。どうしたというのだろう。声の主は達姐ではないかのようだ。

「でも」

「緑の柱は女郎宿だと決まってる。それを知らないほうが悪い。――さ、分別をつけて代金をおよこし」

陽子は目を見開く。ただ荷物を抱きしめて衝撃をやり過ごした。

あの猿は何と言った。どうして自分はあの忠告にもっと真剣に耳を貸さなかったのだろう。

衝撃でか怒りでか、鼓動が振りきれるほど速い。押し殺した息が熱く喉を焦がして、耳を聾するほど荒々しい海鳴りの音がする。

そういうことだったのか、と右手に持った布を巻いた包みを握りしめた。

一瞬のあとには力をゆるめて、代わりにそっと踵を返す。細い廊下を逆に辿り、何でもない顔を装って店を横切り、外に向かった。

足早に戸口を出てもう一度見上げた店は、柱や梁や、窓枠までが緑の塗装を施されている。その毒々しい様式に、やっとのことで陽子は気づいた。腕には達姐の荷物を抱えたままだったが、返しに戻る気にはもちろんなれなかった。

計ったように、そのとき二階の窓が開いた。バルコニー風になった窓の、飾りを施した手摺りに女が凭れて外を眺める。艶やかな色の着物はしどけないほど大きく衿が開かれて、その女の身上があきらかだった。

陽子はひとつ震えた。どっと嫌悪が浮かんだ。見上げる視線に気づいたように陽子を見下ろした女は、小莫迦にしたような笑みを浮かべて窓を閉めた。

7

「嬢ちゃん」

声をかけられて陽子は、慌てて視線を建物の二階からはずした。自分の間近に立っているのは、あの四人組の中のひとりだった。

「お前、ここの者か？」

「違います」

無意識のうちに吐き捨てる口調になった。一言答えて踵を返した陽子の腕を男が摑む。体を入れかえて前に立ちふさがるようにした。

「違うって、お前。女がこんなところに飯を食いにくるもんかい」

「連れがこの店の人と知り合いなんです」

「その連れはどうした。お前、売られてきたんじゃねぇのか」

男の手が顎先にかかって、陽子はとっさに叩き落とした。

「違う。触らないで」

「気が強いなぁ」
男は笑って、摑んだ腕を引きよせる。
「なぁ、俺とどっかに飲みにいかねえか？」
「嫌です。手を離して」
「本当は売られてきたんだろう？　逃げようってのを見逃してやってもいいって言ってんだ。え？」
「あたしは」
陽子は男の腕を渾身の力で叩き落とした。
「こんなところで働いたりしない。売られてきたわけじゃない」
言い捨ててその場を去ろうとする陽子の肩を、改めて男が摑む。それを身をよじって逃げて、さらに摑まえられるより先に剣の柄を握りしめた。
人は身内に海を抱いている。それが今、激しい勢いで逆巻いているのが分かる。表皮を突き破って、目の前の男にそれを叩きつけたい衝動。
「触らないで」
腕を振ると巻いた布が解ける。男がぎょっとしたように身を引いた。
「おい……」
「怪我をしたくなかったら、そこをどいて」

男は陽子と剣とを見比べる。すぐに引きつった笑いを浮かべた。
「そんなもん、お前に使えるのか？」
陽子は無言で剣を上げる。迷わず切っ先を男の喉元に突きつけた。
これが爪だ。陽子に与えられた鋭利な凶器。
「どいて。さっさと店に戻れば。お友達が待ってるんじゃない」
すぐ近くで誰かが叫ぶ声がしたが、陽子にはそちらを見る気になれなかった。往来の真ん中で剣を上げれば騒ぎになるだろうと思ったが、今は気後れを感じない。
男は何度も陽子と切っ先を見比べてから、じりじりと退る。身を翻して店の中に駆けこもうとしたところで、甲高い声が響いた。
「その子！　その子を捕まえとくれ！」
視線を向けると戸口から叫んでいる達姐の姿が見えた。陽子の中で苦いものが広がった。それは夢の中で見た、海に赤いものが広がっていくさまにひどくよく似ていた。
「足抜けだ！　捕まえとくれ!!」
吐き気のように嫌悪がこみあげた。それは善人の顔で陽子を騙した達姐に向けたものかもしれなかったし、あるいはうかうかと騙された自分に対するものかもしれなかった。
店の中から周囲から、人が集まる。陽子は迷わず剣を構えた。手の中で柄を転がし、幅広い刀身を向ける。これで人を殺さずにすむかどうか、それはもうジョウユウ次第だった。少

なくとも陽子は今、捕まるくらいなら人殺しも辞さないくらい荒んだ気分になっている。

――この世界には陽子の味方などいないのだ。

助けだと思った。彼女に感謝し、巡り会えた好運に感謝した。それが心からの思いだったから、吐き気がするほど忌々しい。

突進してきた男たちを認めて、ぞろりとした感触が手足を這う。ごく自然に身体が動いて前を遮るものを排除にかかった。

「捕まえとくれ！　大損だ!!」

ヒステリックな達姐の声に、女を振り返る。騙した者と騙された者の視線が合った。何かを叫びかけた達姐はふいに黙る。怖じけたように二、三歩、退った。

それを冷えた目で見やって、突進してくる男に構える。ひとり、ふたりと体を躱して、三人目を刀身で殴打した。

いつの間にか集まった人間で人垣ができている。人垣の厚みを見て陽子は軽く舌打ちをした。この包囲を本当に殺さずにきりぬけられるのか。

「誰か！　礼は弾むよ、捕まえとくれ！」

達姐が地団駄を踏んだときだった。

人波のうしろから叫び声が聞こえた。全員がつられたように視線を向けると、あっという間に悲鳴混じりの喧噪が近づいてくる。

「どうした」
「足抜けだとよ」
「違う、あっちだ」
ざわ、と人垣がゆれた。
見わたす路地の向こうに、人の波が押し寄せるのが見えた。悲鳴を上げながら、何かから逃げるように我先にと駆けてくる。
「――妖魔」
ぴく、と陽子の手が反応した。
「妖魔が」
「バフク」
「逃げろ!!」
どっと人垣が崩れた。
逃げまどう人の波の中、陽子も駆け出す。すぐに背後から悲鳴が響いて人を薙ぎ倒しながら駆けてくる獣が見えた。
巨大な虎だった。まるで人そのもののような顔を持っていたが、それはすでに赤い斑に染まっていた。周囲の店に飛びこむ人々を避けながら陽子は走る。
すぐに距離を縮められて、仕方なくその場に踏み留まった。

妖魔の首が人面であることに戸惑いながらも柄を握りなおして構える。突風のような速度で突進してくる巨虎を躱しざまに渾身の力で剣を払った。

音をたてて鮮血が飛沫いたが、相手を斬った一瞬に目を逸らさなければそれを避けることが可能なのを発見した。

ぼやけた縞の足を掻き斬られて横倒しになった巨体を避け、陽子は駆け出す。なおも身を起こし、追い縋ってくる獣を剣と足とで躱しながら路地を駆けぬける。

大通りに出たところには、事情を把握しきれないで集まった人垣ができていた。

「どいてっ！」

叫ぶ陽子の声と、背後から駆けてくる獣の姿に、人垣が崩れる。そして。

「……なに⁉」

その外れに陽子は金色の光を見つけた。

人垣の向こう、遠目で顔立ちは分からない。しげしげと見つめている余裕はなかったが、今の陽子は金髪がこちらでは珍しいことを知っている。

「ケイキ！」

思わずその姿を追いかけたが、我先に逃げる人々の流れが、あっという間に金色の光をのみこんでしまった。

「ケイキ⁉」

ふいに陽が翳った。巨虎が陽子の頭上を跳び越えたところだった。妖魔は逃げる人波の上に降り立った。太い前足の下で、踏み倒された人々が悲鳴を上げる。行く手を遮られ、陽子は身を翻す。

――ケイキ？　それとも。

考えている猶予はなかった。追ってきた獣にもう一太刀を浴びせ、人々の混乱に乗じて河西の街を抜け出した。

8

「だからオレが言ったろう」

夜の中、街道に立った石碑の上に蒼い猿の首がある。

河西を出た陽子は、わずかに迷ってから街道を先に進んだ。

ひとりの旅に戻ったわけだが、陽子には結果として奪ったことになる達姐の荷物がある。荷物には達姐の着がえと財布が入っていた。財布の中には宿も食事も最低のランクへ落とせば、しばらく旅ができそうなほどの金銭がある。それを使うことに良心の痛みは感じない。

「忠告してやったのにサァ。バカな娘だぜ」

陽子は猿を無視する。無言で歩いていくと、すべるようにして蒼く燐光を放つ首が蹤いてきた。高笑いを続ける猿を陽子は視野に入れない。騙された自分を愚かだと思うから、今は猿の声を聞きたくなかった。

そして、猿の存在よりも気にかかるのは、河西で見た金髪の人物と街中に現れた妖魔のことだった。

――妖魔は人里には出ないのではなかったろうか。

少なくとも達姐はそう言っていた。それは珍しいことだと。

――妖魔は昼には出ないのではなかったろうか。

夕方、あるいは昼間。妖魔がその時間に現れたのは、河西の巨虎、馬車を襲った犬のような妖魔、学校に現れた蠱雕、それだけだった。

――必ずそこにケイキがいるのはなぜ？

思ったところで猿の甲高い声が耳に刺さる。

「だからお前は、騙されたんだってばヨォ」

これを無視することはできなかった。

「違う！」

「違わねぇサァ。よぉく考えてみろよ。お前もおかしいと思うだろう、エェ？」

陽子は唇を噛んだ。ケイキを信じると決めた。信じなければ縋るものを失ってしまう。な

のに、どうしても迷いが生じる。
「お前は騙されたんだ。塡められたんだよ。あいつにサァ」
「違う」
「そう言い張りたい気分は分かるけどよォ。違ってくれねえと困ったことになるからなァ」
猿はそう言って哄笑する。
「ケイキは蠱離から守ってくれた。ケイキは味方だ」
「そうかい？　こっちに来てからは、とんと助けてくれねえなァ？　あのときだけだった気がしねえかい？」
陽子は猿をまじまじと見る。まさか、あちらでのことをこの猿は知っているのだろうか。
そんな口調なのが不思議だった。
「あのときって？」
「あちらでヨォ、蠱離に襲われたときさ」
「どうして、あのときのことをあんたが知ってるの？」
猿は高笑いする。
「オレはお前のことなら、何でも知ってるのサァ。お前がケイキを疑ってるのも知ってる。それを否定しようとしてるのもな。信じたくねえよなァ。あいつに塡められたなんてヨォ」
陽子は視線を逸らせて暗い街道を見つめる。

「そんなんじゃ、ない」
「だったらどうして助けに来ないんだ？」
「何か事情があるんだ」
「どんな事情があるんだ？　お前を守ってくれるんじゃなかったのかい？　――よぉく考えてみなよ。罠だよ、ナァ？　分かるだろう？」
「学校でのことはともかく、あとの二度ははっきり顔を見たわけじゃない。あれはケイキじゃないに決まってる」
「金の髪がほかにいるのかい？」
――聞きたくない。
「ジョウユウも、ケイキだって認めたんじゃなかったのかい？」
なぜジョウユウを、知っているのか。そう思って見つめる視線と、猿の嘲るような視線がぶつかった。
「オレは何でも知ってるんだ。そう言ったろう」
タイホ、という声が甦って陽子は頭を振った。たった一言にこめられた驚愕した調子が忘れられない。
「――違う。何かの間違いだ。ケイキは敵じゃない」
「そうかナァ？　本当にそうかナァ？　そうだといいなァ」

「やかましい！」
叫んだ陽子を天を仰いで笑って、猿は囁く。
「ナァ、こう考えてみる気はねえかい？」
「聞きたくない」
「……ケイキが妖魔をお前に差し向けてるんだ」
陽子は立ち竦んだ。目を見開いて凝視する陽子を、猿は口元を歪めてながめる。
「……ありえない」
猿は爆笑した。狂ったようにきゃらきゃらと笑い続ける。
「ありえない！」
「どうだかなァ」
「そんなことをする、理由がないじゃない！」
「そうかい？」
猿は歪んだ笑いを浮かべている。
「ケイキがどうして、そんなことをするわけ？　蠱雕から助けてくれたのはケイキなんだよ？　この剣をくれて、ジョウユウを憑けてくれた。おかげであたしは、生きていられる」
きゃらきゃらと猿はただ笑う。
「あたしを殺したいんなら、あのとき、放っておけばよかったんじゃない」

「自分で襲わせておいて、それを助けて仲間になる。そういう手もあるけどナァ」
ぎり、と陽子は唇を噛んだ。
「それでも、ジョウユウがいるかぎり、そう簡単にやられたりしない。あたしを殺したいんなら、ジョウユウを呼び戻すなり、何かするはずだよ」
「殺すのが目的じゃねえのかもナァ」
「だったら、何が目的？」
「さてなァ。そんなことはそのうち分かるさ。これからも襲撃が続くんだからよォ」
陽子はその笑いを浮かべた顔をねめつけて、そうして足を速める。
「帰れねえよ」
声が追いかけてきた。
「お前、帰れねえよ。お前はここで死ぬんだ」
「嫌だ」
「嫌がることはねえだろう？　——痛みなら一瞬ですむんだぜ」
「うるさい！」
陽子の叫びは夜の中に吸いこまれていった。

四章

1

蒼猿だけを道連れに、街道をあてもなくただ配浪から、河西から遠ざかる旅を二日続けた。

どの街も門の警備が厳しくなっており、旅人の検めも注意深くなっていた。ひょっとしたら、配浪から逃げ出した海客が河西にいたことが、ばれてしまったのかもしれない。小さな街では出入りする旅人の数も少なくて、人込みに紛れて門を通るわけにもいかなかった。

仕方なく街道に沿って野営を続け、三日目に着いたのは高く堅牢な城郭に囲まれた河西よりもさらに大きな街だった。門にかかった拓丘城という扁額で、そこが郷庁のある街なのだと分かった。

拓丘では門前にまで店があふれ出していた。

どの街も城壁のすぐ外は田圃が広がるばかりだが、拓丘では門前と城壁の下にテントを広げた物売りが集まって城外市場を作っている。城壁を取り巻く道は売り手と買い手でごったがえしていた。

粗末なテントの中に、あらゆるものがあった。門前の雑踏を歩きながら、陽子は着物を積み上げてあるテントを見つけ、ふと思いついて男物の古着を買った。

若い女のひとり旅にはトラブルがつきまとう。ジョウユウの助けがあるので逃げ出すことは簡単だが、最初からトラブルに巻きこまれずにすむのなら、それにこしたことはない。

陽子が買ったその服は、帆布に似た厚い生地のもので、膝丈の袂のない着物と短めのズボンのひと揃い、それは農夫がよく着ている服だが、貧しい人々や慶国から逃れてきたという難民の中には女でも着ている者が多い。

いったん街を離れ、人目につかない物陰で着がえた。たった半月ほどの間に身体の丸みはもののみごとに殺げ落ちて、男物の着物でもそれほどの違和感がなかった。

脂肪の落ちた身体を目の当たりにして、陽子は複雑な気分になる。腕も足も過酷な労働を強いられるせいだろう、貧弱ながら筋肉の線があらわだった。家にいる頃には体重計に神経を尖らせ、続きもしないダイエットに熱を入れていたのが滑稽な気がする。

唐突に青い色が目に浮かんだ。藍染の少し明るい紺。ジーンズの色だ。陽子はずっとジー

ンズがほしかった。

小学校のとき、遠足でフィールドアスレチックに行くことになった。行ったら男の子と女の子に別れて競争をしようという話になった。スカートでは動けないので母親にねだって、ジーンズを買ってもらったのだが、それを見て父親が怒った。

(お父さんは女の子がそういう恰好をするのが好きじゃない)

(だってみんな、はいてるんだよ)

(そういうのが好きでないんだ。女の子が男の子のような恰好をしたり、男みたいな言葉づかいをするのはみっともない。お父さんは嫌いだ)

(でも、競争があるの。スカートじゃ負けちゃうよ)

(女の子が男の子に勝たなくていいんだ)

でも、と言いつのりたかった陽子を母親が制した。母親は深く頭を下げたのだ。

(すみませんでした。——陽子もお父さんに謝りなさい)

父親に言われて、店に返品に行った。

(返すの、いや)

(陽子、我慢しなさい)

(どうしてお父さんにあやまるの。あたし悪いことなんてしてない)

(お前も将来お嫁に行ったら分かるわ。こうするのが一番いいの……)

思い出していた陽子はふと笑った。

今の自分を見たら父親はさぞ嫌な顔をするだろう。男物の服で剣を振りまわして、宿がとれなければ野宿もする。それを知ったら顔を真っ赤にして怒るかもしれない。

――そういう人だもの、お父さんは。

女の子は清楚で可愛いのが一番。従順で素直なほうがいい。おとなしすぎるぐらい内気で充分。賢くなくていいし、強くなくていい。

陽子自身も、ずっとそう思ってきたのだけど。

「そんなの、嘘だ……」

おとなしく捕まればいいのだろうか。達姐に売られていればよかったのだろうか。

陽子は布を巻いた剣の柄を握りしめた。多少なりとも陽子に覇気があったら、そもそもケイキに会ったときにもう少し強い態度で臨めたはずだ。せめて何のために、どこに行くのか、行き先はどういう場所でいつ帰れるのか、最低限のことぐらい訊けたはずだった。そうすればこんなふうに、途方に暮れることもなかった。

強くなくては無事でいられない。頭も身体も限界まで使わなくては、生きのびることができない。

――生きのびる。

生きのびて、必ず帰る。それだけが陽子に許された望みだった。

着ていた服を達姐の着がえと一緒にして古着屋に持っていくと、わずかの金銭に換えてくれた。

それを握って、陽子は人込みに紛れて門を入る。衛士に声はかけられなかった。入った街の道を奥へ向かう。門から遠ざかるにしたがって宿代が安くなることを達姐との旅で聞いて知っていた。

「坊主、何にする」

入った宿屋でそう訊かれて、陽子は微かに笑った。宿屋はたいがい食堂と兼業になっている。入るとまずオーダーを訊かれるのが常だった。

陽子は店の中を見わたす。食堂の雰囲気を見れば、宿の程度が分かる。この宿は良くはないが、そうひどくもなさそうだった。

「泊まれますか」

宿屋の男は陽子を胡散くさそうに見る。

「坊主、ひとりかい」

陽子がただ頷くと、

「百銭だ。金はあるんだろうな」

陽子は黙って財布を示してみせる。宿では後払いが普通だった。

通貨は硬貨で、四角いものと丸いものが何種類もあり、四角いもののほうが価値が高い。単位はどうやら「銭」で、硬貨にはそれぞれ値が彫ってあった。金貨や銀貨もあるようだが、紙幣は見かけない。

「何かいるかい」

男に訊かれて陽子は首を横に振る。宿で無料のサービスは井戸を使わせてもらうことぐらいで、風呂を使うのにもお茶を頼むのにも料金がいった。それを達姐との旅で知っていたから、食事は門前の屋台ですませた。

男はぶっきらぼうに頷いて、店の奥に声をかける。

「おい、泊まりだ。案内しな」

ちょうど奥から出てきた老人がそれに応えて頭を下げた。老人はニコリともせずに陽子に目線で奥を示す。ちゃんと自分で宿を取れたことに安堵して、陽子はそれに蹤いていった。

2

奥にある階段を上り、老人は四階に上がっていく。こちらの建物はほとんどが木造で、大きな街では三階建てになっている。この宿屋は四階建てになっているようだった。そのぶん天井はうんと低くて、陽子がごく軽く腕を挙げて届くほどしかない。達姐のような大きな女

なら、身を屈めなければならないだろう。

案内された部屋は小さかった。畳二枚ほどの面積で、床は板張り、奥に天井から下がった棚があって、そこに薄い布団が何組か入っているのが見える。寝台はないから床の上に布団を敷いて寝るのだろう。

部屋の奥は棚があるので膝をついても身を屈めなければならない。立って一畳、寝ると二畳というわけだった。達姐と泊まったのは天井の高い、寝台もテーブルもある小綺麗な部屋で、その料金はふたりで五百銭ほどしたようだった。

治安が悪いせいだろう、こんな宿でもドアにはきちんと内外から鍵を使って開ける錠がついていた。その鍵を陽子に手渡して去っていこうとする老人を呼び止める。

「すみません、井戸の場所は？」

陽子が声をかけると、老人は弾かれたように振り返って目を見開いた。しばらく、まじまじと陽子を見ている。

「あの……」

聞こえなかったのだろうか、と同じことをくりかえす陽子に、老人は目を見開いたままで言った。

「日本語じゃ……」

言うなり、老人は廊下を小走りに戻ってくる。

「……おまん、日本から来たがか？」
答えられない陽子の腕を老人は摑む。
「海客か？　いつこっちに来た？　出身はどこぜ？　もう一度喋ってくれ」
陽子はただ目を見開いて老人の顔を見る。
「頼むから喋ってくれんかえ。俺はもう何十年も日本語を聞いてないがよ」
「あの……」
「俺も日本から来たがやき。なあ、日本語を聞かせてくれ」
老人の皺の中に沈んだ目に、みるみる透明なものが盛りあがって、陽子もまた泣きたい気分になった。何という偶然だろう。異境にまぎれこんだ人間が、この大きな街の片隅で出会うなんて。
「おじいさんも海客なんですか？」
老人は頷く。何度も何度ももどかしげに頷いて、声が出ないようだった。節の立った指が陽子の腕を握りしめてきて、その力に彼の今までの孤独が見えたような気がして、陽子はその手を握り返した。
「……茶」
震える声で老人が呟いた。
「茶はどうぜ？」

陽子は首を傾ける。

「茶ぐらい飲まんかえ。ちょっとだけやけんど、煎茶があるがよ。持ってくるきに。……な？」

「……ありがとうございます」

老人は、しばらくして湯呑みを二つ持ってきた。部屋に現れたときには彼の落ちくぼんだ目は真っ赤になっていた。

「……あまりええ茶やないがやけんど」

「ありがとうございます」

からりとした緑茶の匂いが懐かしかった。そっと口に含む陽子を見守りながら、彼は陽子の正面の床に腰を下ろした。

「あんまり嬉しいき、仮病を使うて店をさぼってしもうた。……坊ちゃん、それとも嬢ちゃんかえ。名前は？」

「中嶋、陽子です」

そうか、と老人は目を瞬いた。

「俺は松山誠三いうが。……嬢ちゃん、俺の日本語は妙じゃないろうか」

陽子は内心首をかしげつつ、頷いた。訛はあるが、おおよそ理解はできる。

「そうかえ」
老人は本当に嬉しそうに笑う。やはり泣き笑いになった。
「生まれはどこなが？」
「生まれですか？　東京です」
誠三は湯呑みを握る。
「東京？　ほんなら、東京はまだあるがやな」
「え？」
問い返す陽子には構わず、彼は上着の衿で頬を拭った。
「俺は、高知の生まれよ。こっちに来たときには呉におった」
「呉？」
「広島の呉じゃ。知っちゅうかえ」
陽子は首を傾けながら、昔に習った地理の授業を思い出そうとした。
「……聞いたことはあるような気がするんですけど」
老人は苦く笑う。
「軍港があって、工廠があった。俺は港で働きよった」
「高知から、広島へ、ですか？」
「ああ。母親の実家が呉のほうじゃったきに。七月三日の空襲で家が焼けてしもうて、伯父

さんの家に預けられたがよ。無駄飯は食えんきに働きに出たがやけんど、それが空襲があっての。港に入ってた船があらかた沈んだが。そのどさくさで海に落ちたがよえ」

それが第二次世界大戦のことを言っているのだと、陽子は悟る。

「……気がついたら虚海じゃった。海を漂流しよったところを助けられたがや」

老人が口にした「虚海」は少しイントネーションが違う。音も「キョカイ」よりは「コカイ」に近かった。

「そう……なんですか」

「その前にも何度かひどい空襲があって、工廠はもうあってなきがごとしじゃったわ。軍港にしたって、船はあったが使いもんにはならんかったし、第一、瀬戸内海と周防灘は機雷だらけで通れやせんかった」

陽子はただ相づちを打つ。

「三月には東京が大空襲で焼け野原になったらしいし、六月には大阪じゃち大空襲で焼け野原よ。ルソンも沖縄も陥落して、正直勝てるとは思うちゃあせんかった。……負けたかよ」

「……はい」

老人は重い溜息を落とした。

「やっぱりのぉ。……ずっとそれが気にかかっちょったがよ、俺は」

陽子にはよく分からない。陽子の両親は戦後の生まれで、戦争について語ってくれるよう

な祖父母も身近にはいなかった。はるか遠い昔の話だ。教科書や映画やテレビの中だけで知る世界。

それでも老人が語る世界はこちらの世界ほど陽子にとって遠くない。うまくイメージが摑めないなりに、耳になじみの深い地名や歴史を聞くのは嬉しかった。

「東京はまだあるがやな。やっぱり米国の属国になったがかえ？」

「とんでもない」

陽子は目を見開いた。老人もまた目を見開く。

「そうか。……そうかえ。けんど、嬢ちゃん、その目はどうしたが？」

陽子は一瞬キョトンとし、自分の緑色に変色してしまった瞳のことを言われたのだと悟った。

「……これは別に」

言い淀むと、老人は顔を伏せて頭を振った。

「えい、えい。言いとうないがやったら、かまんき。俺はてっきり、日本がアメリカの属国になったせいじゃと思うたがよ。違うんなら、かまんき」

きっとこの老人は、自分が見届けることのできなかった故国の運命を、遠い異境の空の下で案じ続けていたのだろう。故国がどんな運命を辿るのか分からないのは陽子も同じだが、立ち去った時期が時期だけに老人の想いは深かったに違いない。

こんな世界に放りこまれて、それだけでもこんなに辛いのに、その上さらにこの老人は四十数年もの時間を故国の心配までし続けたのだと思うと胸が痛かった。

「……陛下はご無事か？」

「昭和天皇ですか？　だったら、そう……無事でした。もう、し……」

死にました、と言いかけて、慌てて陽子は言葉を変える。

「亡くなりましたけど」

老人はパッと顔を上げて、そうして深く頭を下げて袖で目元を押さえた。陽子はためらったあげく、丸めた背中をそっと撫でた。老人が嫌がる様子を見せなかったので、ひとしきり嗚咽が治まるまでそうやって骨の感触のあらわな背中を撫でていた。

3

「……すまんのぉ。歳を取ると涙もろうてなぁ」

陽子は黙って首を振る。

「……で、何年やった？」

「え？」

問い返す陽子を老人は表情の窺えない目で見る。

「大東亜戦争が終わったがは？」
「確か……一九四五年だったと……」
「昭和？」
「ええと」
陽子はしばらく考えて、受験勉強のときに暗記した年表を無理やり掘り起こした。
「昭和二十年だと思います」
「昭和二十年？」
老人は陽子を凝視する。
「俺がこっちに来たのも二十年じゃ。二十年のいつぜよ？」
「八月……十五日だったと」
老人は拳を握った。
「八月？　昭和二十年の八月十五日？」
「はい……」
「俺が海に落ちたのは七月の二十八日じゃったがやき」
彼は陽子を睨む。
「たった半月じゃいか！」
陽子はただ俯く。何と言葉をかけていいのか分からなかった。それで黙って、老人が涙混

じりに戦争のために犠牲にしてきたものを数えあげるのをじっと聞いていた。

夜半に近づくにつれて、老人は陽子について質問を始めた。家族は、家は。どんな家だったのか、どんな生活をしていたのか。質問に答えるのは少しだけ辛かった。ここに陽子が生まれる前から捕らわれて帰れない人がいることが、否応なく胸にしみた。

陽子もまたこうして生きるのだろうか。一生を帰れないまま、この異境で過ごすのだろうか。せめて海客どうし、出会えたことは好運なことなのかもしれない。老人がたったひとりで過ごしてきたことを思えば、それは本当に幸福なことなのかもしれなかった。

「俺が何した言うがじゃろうのぉ」

老人は胡座をかいた膝に肘をついて頭を抱えた。

「仲間も家族も放り出して、こんな妙なところに来た。どうせ空襲で死ぬがやろうと覚悟しちょったけんど、たったの半月で終わったがよ。あと、たった半月で」

陽子はただ口を閉ざしている。

「戦争が終われば良い目が見れたのに、腹いっぱい食わんまんま、楽しいこともないまんまで、こがいなところに来てしもうて」

「そうですね……」

「いっそ空襲で死んだほうがましじゃったような気がするわえ。こんな得体の知れん、地理も分からんなら、言葉も分からん、こがいなところになぁ……」

陽子は目を見開いた。
「……言葉が、分からない？」
「俺にはさっぱりよ。今でも片言しかしゃべれん。おかげでこんな職しかないわえ」
言ってから陽子を怪訝そうに見る。
「嬢ちゃんは分かるがか？」
「はい……」
陽子は老人を凝視する。
「日本語なんだと思ってました」
「莫迦な」
老人も呆然とした顔をする。
「日本語なもんかえ。日本語を聞いたがは自分のひとり言をのぞけば、今日が初めてやき。どこの言葉だか、ようは分からん。支那語に似てる気もするけんど、だいぶん違う」
「漢字を使うでしょう？」
「使う。けんど、支那語じゃないき。港には支那人もおったけんど、こんな言葉じゃなかったき」
「そんなはず、ありません」
陽子は混乱した気分で老人を見つめる。

「あたしはこちらに来てから、一度だって言葉に困ったことはありません。日本語以外なら分かるはずがありません」
「店の連中の言葉も分かるが？」
「分かります」
老人は首を振った。
「ほんなら、おまんが聞きゆうがは日本語じゃない。ここには日本語を話す奴なんかおらん」
これはいったいどういうことなのだろう。陽子は混乱を極める。
自分は確かに日本語を聞いてきた。なのにそれは日本語ではないと、老人は言う。ずっと聞いてきた言葉と、老人が話す言葉と、何の差異もないように聞こえるのに。
「ここは巧国ですよね。巧みな国、と書く」
「そうだ」
「わたしたちは海客で、虚海から来た」
「そうだ」
「この街には郷庁がある」
「郷庁？　郷城のことか、郷のことかえ」
「県庁みたいなものだと」

「県庁」
「県知事のいる」
「県知事じゃいうのは、ここにはないき。県のいちばんえらい人なら県正よ」
そんな、と陽子は呟いた。
「わたしはずっと、県知事って」
「そんなものはないき」
「人は冬には里に住んで、春が来たら村に帰る」
「冬に住むがは里。春に住むがは廬」
「でも、あたしは」
老人は陽子を睨み据える。
「おまん、何者ぜよ！」
「あたし……」
「おまんは、俺と同じ海客やない。俺はずっとこの異国でたったひとりじゃった。戦争中の日本から、言葉も習慣も分からん場所に放り出されて、この歳まで女房も子供もおらん、正真正銘のたったひとりよ」
なぜこんなことが起こるのか。陽子は必死に原因を探ろうとする。どう考えても今まで見聞きしてきた現実の中に手がかりはありそうになかった。

「最低のところから、最低のところへ来た。どうして戦後の、俺たちの犠牲の上で安穏と生活しよったおまんが、ここに来てまでまたそんな楽な目を見るが」
「分かりません！」
陽子が叫んだとき、ドアの外から声がかけられた。
「お客さん、どうかしましたか」
老人は慌てて口元に指を当て、陽子はドアのほうを見る。
「すみません。何でもありませんから」
「そうですか？　ほかのお客さんもいるんでね」
「静かにするよう、気をつけます」
ドアの外に遠ざかっていく足音を聞いて、陽子は軽く息をつく。そんな陽子を老人は険しい色の表情で見ていた。
「今のも分かったがか？」
言葉のことだと気づいて陽子は頷く。
「……分かりました」
「今のはこっちの言葉やき」
「あたしは……どちらの言葉でしゃべっていました？」
「日本語に聞こえたな」

「でも、ちゃんと相手に通じてました」
「そのようじゃな」
陽子は常にたったひとつの言語しか喋っていない。常に聞くのもたったひとつの言語だ。なのにどうしてこんな現象が起こるのだろう。
老人は表情を和らげた。
「……おまんは、海客じゃないき。少なくとも、ただの海客じゃない」
カイキャクという音はイントネーションだけでなく、少しだけ陽子が耳なれた音とは違って聞こえた。
「……おまん、どうして言葉が分かるが？」
「分かりません」
「分からない、かよ」
「あたしにはぜんぜん分からないんです。どうして自分がここに来ることになったのか、どうしておじいさんとあたしは違うのか」
どうして姿が変わってしまったのか、と心の中で呟きながら染めて硬い手応えになった髪に触れる。
「……どうやったら帰れるのか」
「俺も探した。答えは、帰れん、ってそれだけよ」

言ってから、彼は乾いた声で笑う。
「帰れたらとっくに帰っちゅうき。もっとも、帰ったところで今浦島じゃけんど」
言ってから彼は気落ちしたように陽子を見た。
「……嬢ちゃんはどこに行くが？」
「あてはありません。――ひとつ、訊いてもいいですか？」
「何ぜ？」
「おじいさんは捕まらなかったんですか？」
「捕まる？」
誠三は目を見開いてから、何かに思い至った表情をした。
「……そうか、ここじゃ海客は捕まるがやな。いいや、俺は違うき。俺は慶国に流れ着いたがよ」
「――え？」
「海客の扱いは国によって違うらしいがよえ。俺は慶国に辿り着いて、そこで戸籍をもろうたが。去年まで慶国におったけんど、王様が崩御なすって国が荒れた。住むに住めんなって逃げてきたがよ」
陽子は街で見かけた難民を思い出す。
「……じゃあ、慶国なら、逃げずにすむんですか？」

誠三は頷く。

「そういうことやな。もっとも今はいかんき。内戦があっての、国はひどいありさまよ。俺の住みよった村は妖魔に襲われて半分が死んだ」

「妖魔？　内乱のせいじゃなくて？」

「国が乱れると妖魔が現れるき。妖魔だけじゃない。日照りに洪水、地震。悪いことばっかりよえ。それで俺は逃げてきたが」

陽子は目を伏せる。慶国なら追われずにすむ。このまま巧国を逃げまわるのと慶国に行ってみるのと、どちらが安全だろうか。考えていると誠三が続けた。

「女はもっと前から逃げ出しちょったな。王様が何を考えたのか国から女を追い出そうとしての」

「まさか」

「本当じゃ。都の堯天じゃ残った女は殺されるという話じゃった。もともとろくな国じゃなかったきに、これを機会に逃げ出した連中も多いろうよ。近づかんほうがえいぜ。あそこはもう妖怪の巣よ。いっときまでは、ずいぶんたくさんの人間が逃げ出しよったけんど、最近じゃそれもめっきり減ったわ。おそらく国境を越えられんがやろう」

「そう……なんですか」

呟いた陽子に誠三は自嘲めいて笑ってみせた。

「日本のことは訊かんと分からんけど、こちらのことなら教えちゃれるき。……俺はこっちの人間になってしもうたがやなぁ」

「そんな」

誠三は笑って手を挙げる。

「巧は慶にくらべりゃ、ずっとマシな国やき。けんど海客じゃゆうて捕まるがじゃ、マシでもしかたないわな」

「おじいさん、あたし……」

誠三は笑った。半分泣いたような笑顔だった。

「分かっちゅう。嬢ちゃんのせいじゃないきに。分かっちゅうけんど、何だかせつのうてなぁ。あたってすまざったの。逃げにゃいかんがじゃ、嬢ちゃんのほうが大変じゃのにのぉ」

陽子はただ首を振った。

「俺は仕事に戻らんと。朝飯の仕込みがあるき。——道中気をつけての」

それだけを言って彼は外に滑り出た。

陽子は誠三を呼び止めかけて、それをやめ、おやすみなさい、とそれだけを言った。

4

棚から薄い布団を引っぱり出し、陽子はそこに寝ころんで溜息をついた。久しぶりに布団の上で眠れるのに、ひどく目が冴えてしまっていた。気にかかることがあるからだと、分かっている。

どうして陽子は言葉に困らなかったのだろう。もしも自分が言葉を理解できなかったら、今ごろ何が起こっているか想像するまでもない。しかしながら、なぜこんなことが起こるのかは想像がつかなかった。

ここで通用しているのが日本語でないなら、それが陽子に理解できるはずがない。ドアの外の人物と話したとき、陽子はいったい何語で喋っていたのだろう。それが老人には日本の言葉に聞こえ、ほかの人間にはこちらの言葉に聞こえた——。

老人の話すこちらの単語は、少しだけ音が変わって聞こえた。それすらも奇妙なことに思える。ましてや、県知事などという言葉はないという。では、ずっと陽子が聞いてきた県庁だの県知事だのという言葉は、いったい何だったのか。

陽子は低い天井をじっと見た。

——翻訳されている。

陽子が聞いている言葉は、どこかで何かによって陽子が理解できるよう、都合よく翻訳されてはいないか。

「ジョウユウ？　あなた？」

自分の背中に向けて呟いた言葉に、もちろん返答はなかった。

いつものように懐に剣を抱きこんで眠って、そうして目覚めたとき、部屋の隅においた陽子の荷物は消えていた。

陽子は飛び起き、慌ててドアを検める。ドアにはきちんと鍵がかかっていた。

店の者を捉まえて、事情を話す。ドアと室内とを怪訝そうに検めた従業員たちは、陽子を剣呑な目つきで睨んだ。

「――そんな荷物が、本当にあったのか？」

「あった。あの中に、財布だって入ってる。誰かに盗まれたんだ」

「しかし、鍵はかかってるぜ」

「合い鍵は？」

陽子が訊くと男たちはさらに剣呑な目つきをした。

「店の者が盗んだ、と言いたいのか」

「そもそもありゃしねえんだろう？　最初から難癖をつけて逃げるつもりだったな」

男たちは陽子ににじり寄る。陽子はそっと剣の柄に手をかけた。
「違う」
「とにかく代金を払ってもらおうか」
「財布は盗まれた、と言ってる」
「それじゃあ役所に突き出すまでだ」
「ちょっと待って」
陽子は布を解きかけ、それからふと気づいて男たちに言った。
「昨日のおじいさんを呼んでくれる」
とっさに浮かんだのは彼に口添えを頼もう、という考えだった。
「じいさんだ？」
「慶国から来た。松山、という」
男たちは顔を見合わせた。
「あいつが、どうした？」
「呼んで。彼が荷物を見てる」
男のひとりが入り口に仁王立ちになり、背後の若い男に顎で合図をした。若い男が走って廊下を去っていく。
「その左手の荷物は何だ？」

「これにはお金は入ってない」
「俺が検めてやるよ」
「おじいさんが来てから」
ぴしゃりと言うと、男は胡散くさそうに陽子を眺める。すぐにけたたましく足音がして、若い男が戻ってきた。
「いないぜ」
「いないだ？」
「荷物もない。あのじじい、出て行きやがった」
ドアに立ちはだかった男が舌打ちをして、陽子はその音に歯を食いしばった。
——彼だ。
あの、老人がやったのだ。
陽子は目を閉じる。同じ海客でさえ、陽子を裏切るのか。
陽子が戦後の豊かな時代に育ったのが許せなかったのか、それとも言葉を理解できるのが許せなかったのか。あるいは、そもそもその程度のつもりだったのか。
同胞を見つけたと思った。老人のほうもそう思ってくれたのだと信じこんでいた。達姐に騙され、陽子にはもはやこの国の人間を信じる勇気が持てない。なのに同じ海客の誠三までが裏切るのだ。

苦いものが、せりあがってきた。怒りは陽子の中に荒れた海の幻影を呼び起こす。そのたびに自分が何かの獣になり変わっていく気がした。

陽子は波にゆさぶられるまま吐き捨てた。

「あいつが盗んだんだ」

「あいつは流れ者だ。きっとここが気に入らなかったんだろうよ」

「つべこべ言わずにそいつをよこしな。金目のものが入ってないか、俺が見てやる」

陽子は柄を握りしめた。

「……わたしは、被害者だ」

「こっちも商売なんでな。只で泊めてやるわけにはいかねえんだ」

「そっちの管理が悪い」

「うるせぇ。それを、よこせ」

男が間合いを詰めてきて、陽子は身構えた。巻いた布を腕を振って解く。小さな窓から入った光が刀身を煌めかせたのが視野に入った。

「て、てめえ」

「……そこをどけ。わたしは被害者だと言ってる」

若い男が声を上げて走り去り、ひとり残された男がうろたえたようにたたらを踏んだ。

「どけ。金がほしかったら、あいつを捜せば」

「……最初からこういうつもりだったな」

「違うと言ってる。じいさんを捕まえたら、荷物の中から代金は取っておいて」

剣を前に出すと、男が退る。さらに突きつけたまま三歩進むと、男が慌てて転がる勢いで逃げだした。

陽子はそのあとを追うようにして駆け出す。

若いほうの男が呼んだのだろう、駆けつけてきた数人を剣で脅して宿から外に飛び出した。雑踏を掻き分けて走る。

腕がひどく痛い気がした。あの老人が切なる力で摑んだ場所が。

二度と人を信じるなという、これはその戒めなのだ。

5

そこからはまた野営を続ける旅が始まった。

何とはなしに街道を辿って次の街に着いたが、どうせ所持金もなし、宿に泊まれるわけでも食事ができるわけでもない。せめて門を入って難民のように城壁の下で眠ればよかったのかもしれないが、城門には衛士が構えていたし、陽子には大勢の人の間に交じることが苦痛でならなかった。

ここには味方はいない。誰も陽子を助けない。

ここには陽子に許されるものは、何ひとつないのだ。

騙され裏切られることを思えば、妖魔を剣で追い払いながら野宿したほうがずっとましなことに思えた。

着物を着がえてからは女には見られない代わりに、年齢よりも年下に見られることが増えた。こちらの治安は悪い。目つきの悪い連中にからまれることが何度かあって、人に対して剣を向け脅すことの躊躇が完全に消えた。

昼には、すれ違う人間に注意をしながら歩き、夜には妖魔と戦いながら歩く。夜に眠れば妖魔の急襲があるかもしれず、いきおい夜に歩いて昼には寝る生活になる。

街道沿いの廬には食べ物を売る家もあったが、それも昼にかぎられていたし、何よりも陽子には所持金がなかったので、食事をすることは当然のように絶えた。

何度か飢餓に耐えかねて、嫌悪を抑えて仕事を探してみたが、大量の難民が流入した街には職がない。非力そうに見える子供ならば、なおさら雇ってくれるところなどありはしなかった。

妖魔は夜毎に現れ、ときおり昼にも現れて陽子に苦渋を強いた。疲労と飢餓は間断なく陽

子を悩ませ続けた。それ以上に陽子を懊悩させるのは、剣の見せる幻影と、蒼い猿だった。

母親が泣く姿を見るのは辛かった。蒼猿は死んだほうがましだろうと誘惑を続ける。それでも母親の姿を、自分の生活していた場所をせめて見たいという欲求に勝てず、せめて誰かと会話をしたいという欲求には勝てなかった。

剣の見せる幻影が訪れるのは必ず夜で、それは陽子の帰りたいという思いに反応する。剣が不思議な力を現すのが夜なのか、そもそも夜にしか起きていないから夜なのか、それは陽子にも分からない。

妖魔の襲撃がひきもきらず故郷を思う暇もない夜は身体に辛く、少しでも余裕のある夜は心に辛かった。剣が光り始めても無視すれば良いのだと分かってはいても、それをできるほど心強くはなれない。

そうして陽子は今夜も燐光を浮かべ始めた剣を見ている。妖魔から逃げて分け入った山の中、背中を白い樹に預けていた。

山の深いところでときおり見かけるその白い樹は、陽子の知るいかなる樹とも似ていなかった。樹皮はほとんど純白で、枝のさしわたしが一軒の家ほどもあるが、高さは低い。いちばん上の枝はどんなに高くても二メートルを超えないだろうと思われた。

葉のない枝は地に垂れるほど低く、細いが恐ろしく堅牢で、剣を使っても断ち切ることができなかった。それはほとんど白い金属でできた作り物の樹を思わせる。枝には黄色い木の

実がなっていたが、溶接されたようにもぎ取ることができなかった。

白い枝は夜目にも、はんなりと白い。月があればいっそう白くて陽子は気に入っていた。

枝は低いが、それを掻き分けて幹のほうへ潜りこむと、根元には座っていられるぐらいの隙間がある。白い樹の下にいると、どういうわけか妖魔の襲撃が間遠だったし、野獣の襲撃はほとんどなかったので休憩を取るには申し分がなかった。

その樹の下に潜りこみ、幹に背中を預けて陽子は剣を見ている。拓丘で海客の老人に会ってからすでに十日以上が経っていた。

剣は淡く光を放って、それに照らされて間近の枝が白く輝く。木の実は金色に光った。

当然のように母親の姿を待った陽子の目の前に、複数の人影が動くのが見えた。

大勢の人間。黒い服。若い女の子。広い部屋と並んだ机。

――教室の風景だった。

教室には制服を着た少女たちが、たむろしていた。あまりに見なれた休み時間の光景だった。綺麗にブローした髪とプレスされた制服。清潔そうな白い肌。見ている自分との対比がおかしくて、自嘲の笑みがもれた。

「中嶋、家出したんだって」

聞きなれた友人の声を皮切りに、どっと雑談をする喧噪が陽子の耳に押し寄せてきた。

「家出？　嘘ぉ」

「ほんと、ほんと。中嶋、昨日、休んでたじゃない。あれって家出なんだって。ゆうべ中嶋の母親から電話かかってきて、ビックリよぉ」

（ずいぶん前のことだな……）

「おどろきぃ」

「あの委員長がねぇ」

「やっぱ、まじめな人ほど陰で何をしてるか分からない、ってことじゃないの」

「かもなぁ」

陽子はさらに笑った。自分のおかれた状況との差がおかしかった。

「何かさぁ、学校に妙な仲間が迎えに来たらしいよ。それがけっこう危なそうな男だったんだって」

「男ぉ？　やるー」

「じゃ、駆け落ちじゃない」

「そうとも言うね。ほら、職員室のガラスさ、全部割れてたじゃない。あれ、中嶋の仲間がやったんだって」

「まじ？」

「ね、男って、どんな？」

「よくは知らないけど。髪をロングにして脱色した奴だったらしいよ。ずるずるした妙な恰

好をしてたって」
「中嶋って、実はヘビメタだったんだ」
「だったりしてー」
（ケイキ……）
陽子は喧噪を前に、亡霊のように身動きできずにいる。
「やっぱりねー。あの髪ってさぁ、ぜったい染めてるって思ってたんだよね」
「生まれつきだって言ってたじゃない」
「嘘にきまってんじゃん。生まれつきであんな色になるわけないだろ」
「けどさー、教室に鞄とコートがあったって聞いたよ」
「えー、何それ」
「きのうの朝、森塚が見つけたって」
「本当に駆け落ちなんじゃない。身体ひとつで……ってやつ」
「ばぁか。――でも、それって家出じゃなくて失踪っていうんじゃないの」
「こわ……」
「そのうち駅前にポスターとか貼られたりして」
「タテカン立って、街頭で中嶋んちの母ちゃんがビラを配るんだな」
「うちの子を捜してください、ってか？」

「無責任なこと言ってるよ、こいつらは」
「だって、あたしには関係ないもん」
「どうせ家出だって」
「そうそう。案外ああいう優等生に限って、屈折してたりするわけだ」
「駆け落ちなんでしょ。堅いのに限って、コイに燃えると何をするか分からない、と」
「冷てーの。お前、中嶋とけっこう仲よかったんじゃないの」
「そりゃ、話ぐらいはしてたけどぉ。でも実を言うと、あいつあんまり好きじゃなかったんだよね」
「分かる。優等生ぶっててさぁ」
「だよねー」
「何かっちゃ親が厳しい、って、お前はお嬢か、っての」
「いえてる。ま、宿題をマメにやってるのは助かったけど」
「ああ、ほんと。今日も数学のプリント、手つかずなんだよ、実は」
「あー、あたしもー」
「ちょっと、誰かやってないの」
「中嶋ぐらいっきゃ、いないって」
「陽子ちゃーん、帰ってきてぇ」

どっ、と明るい笑いが湧く。ふいにその安穏とした景色がぼやけた。みるみる歪んで、形をなさなくなる。瞬きをひとつすると視界が澄んだが、すでに陽子の目の前には光をなくした刀身しか見えなかった。

6

陽子は剣を下ろした。ひどく手に重い気がした。

友人、と呼んでいた誰もが実は友人ではないことなど、心のどこかで分かっていた。人生のほんのいっとき、狭い檻の中に閉じこめられた者どうし、肩を寄せ合っていただけだ。進級してクラスが変われば忘れる。卒業すれば会うこともない。おそらくは、そんなことだったのだ。

そう思っても、涙がこみあげた。

かりそめの関係だと、きっとどこかで分かっていた。それでもなおその中に、何かしらの真実が隠されているのではないかと期待していたのだ。

できれば教室に飛びこんで陽子のおかれた状況を訴えてみたかった。そうしたら彼女たちはどう反応するだろう。

どこか遠い世界の、平和な国で生きている人たち。彼女たちにもきっと、悩みや苦しみが

ありはするのだろう。かつての陽子がそうだったように。そう思うと心底笑えて、陽子は地面に寝ころんで身体を丸めた。

この世の全てのものから切り離されてひとりで——まさしくひとりで身体を丸めている自分。切実に孤独だと、思う。

親と喧嘩をしたとき、友達と仲違いをしたとき、たんに感傷で気分が落ちこんだとき、孤独だな、と呟いていた自分の言葉がいかに甘かったか。帰る家があり、決して敵にはなりえない人がいて、気分を慰めてくれるものがあって、たとえそんなもの全てをなくしたとしても、きっとすぐに友達なら作れる。それが上辺だけの友達にしても。

そのとき、いくら聞いても耳に慣れない嫌な音がして、陽子は丸くなったまま顔を蹙めた。

「だから帰れねえってばよ」

「うるさい」

「帰れると思うなら、やってみるがいいサァ。帰ったところで、誰もお前を待っちゃいないけどなぁ。仕方ないよなぁ。お前は待つだけの値打ちのない人間だったんだから」

どうやら猿は剣の幻に何かの関係がある。蒼い猿が現れるのは幻を見る前後だと決まっていた。特に危害を加えるわけではない。ただ聞きたくもないことを耳障りな声と口調で言っていくだけだ。だからだろう、ジョウユウも決して反応しなかった。

「――お母さんがいるもの」

いつか幻で見たぬいぐるみを撫でて泣く母親の姿が目に浮かんだ。友達と呼んでいた同級生の中に本当の友達がいなくても、母親だけは真実陽子の味方のはずだ。どっと懐かしさがこみあげて胸が痛む。

「お母さん、泣いてた。だからあたしは、いつかぜったい帰るんだ」

猿はひときわ高く笑った。

「そりゃあ、母親だからサァ。子供がいなくなりゃ悲しいさ」

「……何よ、それ」

陽子が顔を上げると、短い雑草に覆われた地面の、手を伸ばせば届きそうなあたりに蒼く光る猿の首がある。

「別にお前が消えたのが悲しいわけじゃないのさァ。自分の子供をなくしたのが悲しくて、そんな自分が哀れなだけさ。そんなことも分からねえのかい」

胸を衝かれた。陽子には反論できなかった。

「たとえ子供がお前じゃなくて、もっと最低の子供でも、母親はやっぱり悲しいのさ。そういう生き物だからサァ」

「黙れ」

「怖い顔をするこたないだろう。オレは本当のことを言ってるだけだ」

きゃらきゃらきゃらと耳に刺さるような音で猿は大笑いする。
「長いこと育てた家畜と一緒だよ。育てりゃ情がうつるもんだ。ナァ」
「黙れっ！」
軽く身を起こして剣を構える。
「怖い、怖い」
猿はそれでも笑い続けた。
「親が懐かしいか、え？　そんな親でもよォ」
「聞きたくない」
「分かってるともさ。お前は家に帰りたいだけなんだ。親に会いたいわけじゃねえよなァ。あったかい家と味方のいる場所に帰りてえんだよナァ」
「……なに」
きゃらきゃらと猿は笑う。
「親なら裏切る心配はねえか。本当にそうなのかい。飼い主と同じじゃねえのかい」
「何を」
「お前は犬や猫と一緒なのサァ。おとなしくかわいがられてる間はいいけどよォ、飼い主の手を噛んだり家を荒らしたりしたらそれまでなんだぜ。そりゃァ、連中にも世間体ってもんがあるからお前を叩き出したりはしないけどよォ。世間さえ黙ってりゃ、子供を縊り殺した

いと思ってる親なんざ、いくらでもいるに決まってるサァ」
「ばかばかしい」
「そうか、ばかばかしいな」
猿はいたずらっぽく目を見開いてみせる。
「連中は子供をかわいがってる自分が好きなんだからなァ。確かに莫迦なことを言ったよ。子供想いの親ってのを演じるのが、大好きなんだもんナァ」
きゃらきゃらと哄笑が耳に刺さる。
「……この」
「お前だってそうだろうが、えェ？」
陽子は柄にかけた手を止める。
「いい子をやってるのが楽しかったんだろうが。親の言うことを聞いてたのは、親が正しいと思ってたからかい。逆らったら叩き出されるような気がして、飼い主の機嫌を取ってただけじゃねえのかい」
陽子はとっさに唇を噛む。叩き出されることを心配したわけではないが、叱られること、家の中の空気が重くなること、欲しいものを買ってもらえないこと、ペナルティーを課されること、そんなことが心配でいつの間にか両親の顔色を窺っていた自分を知っている。
「お前のいい子は嘘だ。いい子なんじゃねえ、捨てられるのが怖いから親に都合のいい子供

のふりをしてただけだろう。親の、いい親も嘘だ。いい親なんじゃねえ、うしろ指を指されるのが怖いから世間なみのことをしてただけだろう。嘘どうしの人間が裏切らないはずがあるかい。どうせお前は親を裏切る。親はお前を必ず裏切る。人間てのは、みぃんなそうなのさァ。おたがいに嘘をついて、裏切って裏切られて回ってるんだよォ」

「……この、化物」

ひときわ高く猿は笑った。

「立派な口がきけるようになったじゃねえか。そうとも、オレは化物サァ。けどなァ、オレは正直だからナァ。嘘は言っちゃいないぜ。オレだけがお前を裏切らない。残念だナァ、そのオレが教えてやってるのにヨォ」

「黙れ！」

「帰れねえよ。死んだほうがマシだヨォ。死ぬ勇気がねえなら、もっとマシな生き方をしなよォ。そいつでサァ」

猿は陽子が掲げた剣を見る。

「もっと正直にサァ。味方はいねえんだ、敵ばっかりだ。ケイキだって敵なんだからヨォ。腹が減ってるだろう？　真っ当な暮らしがしたいだろう？　そいつを使いなよォ。それでちょいと人を脅してサァ」

「うるさい！」

「どうせどいつもこいつも汚い金しか持ってねえんだ。ちょいと銭を出させてサァ。そうすりゃマシな生き方ができるのにナァ」

きゃらきゃらと耳障りな声に向かって剣を振り下ろしたが、そこにはもう何の姿も見えなかった。夜の中を哄笑だけが遠ざかっていく。

陽子は土を掻く。鉤爪の形に曲がった指の間から、何かがこぼれ落ちていくような気がしていた。

7

陽子は道をさまよっていた。拓丘を出て何日が経ったのか、そもそも家を出て何日が経ったのか数えようとしてももう思い出すことができなかった。

陽子がいるのがどこで、そしてどこへ向かっているのか、それは陽子自身にも分からなかったし、すでに興味をなくしていた。

日が暮れるから剣を握って立つ。敵が来るから戦う。朝が来るから寝場所を探して寝る。それだけがただ続いていく。

珠を握り、剣を杖にして立ち上がるのが当たり前になった。敵がいなければ座りこむ。間合いが遠ければ足は引きずる。人の気配がなければ喋る代わりに始終呻く。

飢餓は身内に張りついてすでに身体の一部になった。飢えに負けて妖魔の死体を切り刻んでもみたが、異常な臭気があってとうてい口に持っていけない。たまに出会う野獣をしとめ、それを口にしたときにはすでに身体が固形物を受けつけなくなっていた。

幾度目かの夜を乗り切って、夜明けを迎えた。街道から山に踏みこもうとして木の根に足を取られ、長い斜面を転がり落ちて、投げやりな気分でそこで眠った。眠る前に周囲を見まわすことさえしなかった。

夢も見ずに眠って、目が覚めるとどうしても立ち上がることができなかった。周囲は樹影の薄い林の中の窪地、すでに陽は傾いてじきに夜がやってくる。このままこんなところで身動きできなくなったら、妖魔の餌食になるだけだ。一度や二度の襲撃なら、ジョウユウが無理にも戦わせてくれるだろうが、それ以上になればもはや身体がいうことをきかないだろう。

陽子は地に爪を立てる。何としてもせめて、街道まで出なくては。

せめて街道へ出て誰かの助けを求めなければ、ここで死ぬだけだと想像がついた。首に下げた珠を探る。それを必死で握りこんでも、剣を杖の代わりに地に突き立てることさえできなかった。

「助けなんて来やしないサァ」

とつぜん声がして、陽子は視線を向けた。光のあるうちにその声を聞いたのは初めてだった。

「これでとうとう楽になれるなァ」

陽子はただ粉を吹いたように見える猿の毛並みを見つめる。なぜこんな時間に現れたのか、とそれだけをボンヤリ考えた。

「これで街道に這って出ても、どうせ誰かに捕まるだけサァ。助けといえば助けかもしれねえなぁ。そいつがひと思いに殺してくれるかもしれないからヨォ」

確かにそうだ、とそう思う。

誰かに助けを求めなければ、と思う。その願いが切実だから、助けなどあるはずがないという気がする。街道に出ても助けは来ない。もしも誰かが通りがかったとしても、その誰かは陽子を振り向きもしないだろう。汚い、浮浪者のような姿に顔さえ蹙めていくのかもしれない。

そうでなければ、追い剝ぎだろう。彼は陽子に近づき、盗めるほどのものがないのを見てとって剣を奪っていく。ひょっとしたらご丁寧に止めを刺していってくれるかもしれない。

この国はそういうところだ、とそう思って、陽子は唐突に気づいた。

この猿は陽子の絶望を喰いにやってくるのだ。サトリの妖怪のように陽子の心に隠れた不安を言い暴いて、陽子をくじけさせるために現れる。

小さな謎をといたことが嬉しくて、陽子は軽く微笑んだ。それに力を得て寝返りを打つ。腕に力をこめて身体を起こした。

「諦めたほうが良くはないかい」

「……うるさい」

「もう楽になりたいだろう」

「うるさい」

陽子は剣を地に突き立てた。崩れそうになる膝を緊張させ、悲鳴を上げる手で柄に縋りついて身体を支える。立ち上がろうとしたが、バランスを崩した。こんなに身体は重かったのか。まるで地面を這うべくして生まれた生き物のようだ。

「そこまでして生きたいのかい。生きて何の得があるんだ、え？」

「……戻る」

「そんな苦しい思いをしてよォ、それで生きのびたって戻れやしねえよ」

「わたしは、帰るんだ」

「帰れねえよ。虚海を渡る方法はねえのさ。お前はこの国で、裏切られて死んでいくんだ」

「嘘だ」

この剣だけが頼りだ。陽子は柄を握った手に力をこめる。頼るものも縋るものもない。ただこれだけが、陽子を守ってくれる。

――そして、と陽子は思う。

これだけが希望だ。これを陽子に渡してくれたケイキは、二度と帰れないとは言わなかった。ケイキに会えさえすれば、戻る方法が見つかるかもしれない。

「ケイキが敵じゃねえと言えるのかい」

――それを考えてはいけない。

「本当に助けてもらえるのかい？」

――それでも。

このまま何の手がかりもなくさまよっているよりも、ケイキが敵であれ味方であれ、彼に会ってみること以上のことがあるはずがない。ケイキに会ってなぜ彼が陽子をこちらに連れて来たのか、帰る方法があるのかないのか、聞きたかったことを全部訊いてみる。

「帰って、それでどうなるんだい、えェ？　戻ればそれで、大団円になるのかい？」

「……黙れ」

分かっている。戻ったからといって、陽子はこの国を悪夢だと忘れてしまうことはできないだろう。何もかもなかったふりで、以前のとおりに生きていくことなどできるはずがない。ましてや、戻ったからといってこの姿が元に戻るという保証があるのか。そうでなければ「中嶋陽子」のいた場所に戻ることはできないのだ。

「浅ましいこったなァ。あきれた莫迦者だよ、お前はナァ」

きゃらきゃらと遠ざかっていく哄笑を聞きながら、陽子はもう一度身を起こした。

どうしてなのか自分でも分からない。莫迦だと思うし浅ましいとも思う。それでもここで諦めるぐらいなら、もっと前に諦めてしまえばよかったのだ。

陽子は自分の身体を思い出す。怪我だらけで血と泥に汚れたままで。ボロ布のようなありさまになりつつある服からは、身動きするたびに嫌な臭気がする。それでもこうしてなりふりかまわず守ってきた命だから、簡単に手放す気にはなれなかった。死んでいたほうがましだったというのなら、そもそもの最初、学校の屋上で蠱雕に襲われたときに死んでいればよかったのだ。

死にたくないのでは、きっとない。生きたいわけでもたぶんない。ただ陽子は諦めたくないのだ。

帰る。必ずあの懐かしい場所に帰る。そこで何が待っているか、それはそのときに考えればいいことだ。帰るためには生きていることが必要だから、守る。こんなところで死にたくない。

陽子は剣に縋って立ち上がった。斜面に突き立て、藪に覆われた坂を上り始める。これほどゆるくこれほど短いのに、これほど辛い坂を陽子は知らない。

何度も足をすべらせ、くじけそうになる自分を励まして、上を目指す。苦吟の果てにようやく伸ばした手の先に街道の縁がかかった。

爪を立てて道に這い上がる。呻きながら街道に身体を引き上げて、平坦な地面の上につっぷしたとき小さな音が聞こえた。

山道の向こうから聞こえる声に、陽子は思わず苦い微笑いを浮かべた。

――よくできている。

この世界はどこまでも陽子が憎いらしい。

山道を近づいてくるその声は、赤ん坊の泣き声にひどく似ていた。

8

殺到してきたのは、いつか山道で陽子を襲った黒い犬の群れだった。

重い剣を振り上げてそのほとんどを倒したときには、すでに全身が血みどろだった。

躍りかかってきた一頭を斬り捨てて、陽子は思わず膝をつく。左のふくらはぎに深い咬み傷がある。麻痺したように痛みは感じないが、足首から先の感覚が鈍い。

真っ赤に染まった足に目をやって、山道に残った敵を見わたす。まだ一頭が残っていた。最後に残った一頭は、すでに倒したほかの獣よりひとまわり大きかった。体力にも明かな差があって、すでに二太刀を与えているのに少しも堪えた様子がなかった。

その獣が低く身を屈めるのを見てとって、陽子は柄を握りなおす。手になじんだ剣が、切

っ先を上げるのさえ困難なほど重かった。ひどい目眩がする。意識が半ば混濁している。

跳躍してきた影に向かって剣を振り上げる。斬るというより、剣を叩きつける恰好になった。ジョウユウの力を借りてなお、すでにもう剣をただ振りまわすことしかできない。

剣で殴打されて、黒い影が地面に転がる。すぐさま起きあがってもう一度飛びかかってくる鼻面めがけてとにかく剣を突き出す。

切っ先が獣の顔面を裂いたが、代わりに鋭利な爪が陽子の肩口を裂いた。衝撃で剣をとり落としそうになるのをかろうじて受けとめ、短く高い声を上げて転がった影に向かって力任せに振り下ろす。

勢いあまって前のめりに倒れながら、何とかその首に切りつけるのに成功した。

剣は黒い毛皮を斬り裂いて、そのまま土に食いこむ。切っ先を咥えこんだ地面に、黒く鮮血が散った。

倒れた陽子も動けなかったが、同じく倒れた敵も動けなかった。

双方の距離はわずかに一メートル、互いに油断なく、顔だけを上げて相手の様子を窺う。陽子の剣は土に食いこんだまま。相手も血泡を吹いている。

しばらく見合って、先に陽子が動いた。

萎えた手で何とか柄を握りなおし、地に突き立った切っ先で体重を支えて身を起こす。

一拍遅れて相手も身を起こしたが、すぐに横ざまに倒れた。

重い重い剣を何とか持ち上げ、膝でいざって間合いを詰める。両手で剣を振り上げた。敵は頭を上げ、うなり声と一緒に血泡を噴き出した。足が弱く地を掻いたが、起きあがることはできなかった。

両手で支えた剣の重みを、獣の首に向かって落ちるに任せる。血脂でぬらぬら光る刀身が毛皮に食いこんで、同時に獣の爪を出したままの四肢が痙攣した。

さらに血泡を吐き出した獣が、それと同時に何かを呟いたような気がした。

重い剣をもう一度、渾身の力で引き上げて、落とす。今度は獣は、痙攣さえしなかった。

剣が首の半ばまで食いこんでいるのを見てとって、陽子はようやく柄を放す。そのまま仰向けに転がった。頭上には雲が垂れこめていた。

しばらく空を睨んだまま、声を上げて息をする。脇腹が灼けつくように痛かった。息をするたび喉が裂ける気がする。腕も足も、切断されたように感覚がなかった。

珠を握りこんでいたかったが、指先でさえ動かすことができなかった。それでただ船酔いのような目眩をこらえながら、空を流れる雲を見ている。一方の雲が薄く茜色に染まっていた。

突然、ひどい吐き気がこみあげた。とっさに顔を背け、そのままの姿勢で吐瀉する。ひどい臭いのする胃液が頬を伝う。切迫した息と一緒に吸いこんで激しくむせた。反射的に寝返

りを打って伏せ、しばらく咳きこむ。
——生きのびた。
何とか、生きのびることが、できた。
咳きこみながら、頭の中でそれをくりかえし、ようやく息がおさまったところで、陽子は微かな音を聞いた。
——土を踏む音だった。
「……！」
まだ敵がいたのかと、とっさに顔を上げたが、そのとたん視野が回転する。すっと目の前が暗くなって、地面に顔をつっこんだ。
起きあがることが、できない。
それでも、一瞬にも満たない間に目眩のする目で捉えたもののことは忘れなかった。
——金の色。
「——ケイキ！」
土に顔をつっこんだまま叫んだ。
「ケイキぃっ‼」
——やはり、お前が。
——お前が、この妖魔を。

「理由を言えぇっ!!」

すぐ間近で足音を聞いた。陽子は顔を上げた。

かろうじて上げた視線が最初に捉えたのは、鮮やかな色の着物。次いで捉えたのは金の髪。

「……どうして」

こんなことを、と言いかけた言葉は声にならなかった。

仰け反るようにして見上げた相手の顔は、ケイキのものではなかった。

「……あ――」

ケイキではない。女、だった。

彼女はじっと陽子を見下ろしている。陽子は目を見開いてその瞳を見返した。

「誰……？」

金の髪の似合う女だった。陽子よりも十ばかり年上のようだった。華奢な肩の上に、色鮮やかな大きなオウムが留まっている。

愁いを含んだ表情がひどく美しく見えた。陽子が下から覗きこむ顔には、いまにも泣きそうな表情だけがある。

「誰……だ」

掠れる声で聞いたが、女はじっと陽子を見つめたまま返答をしなかった。澄んだ目が、静

かに涙をこぼした。

「なに……？」

彼女は深く瞬きをした。頬を透明な涙がこぼれ落ちていく。

意外なことに言葉をなくした陽子の目の前で、女は顔を背ける。すぐ脇にある獣の死体に目を向けた。少しの間、悲痛な顔でそれを見つめ、ゆっくりと一歩を踏み出す。死体の側に膝をついた。

陽子はそれをただ見守った。言葉は出ず、身動きもまたできない。身を起こそうとする努力ならさっきからしているが、指の一本でさえ動かなかった。

女はそっと手を伸ばして獣に触れる。指先に赤いものがついたとたん、何か熱いものに触れたように手を引いた。

「あなた、誰なの……」

女は返答しない。もう一度手を伸ばして、今度は獣に刺さったままの剣の柄を握って引き抜いた。抜いた剣を地面におき、獣の首を膝のうえに抱き上げた。

「あなたが、そいつをさしむけたのか」

女は黙ったまま膝の上の毛並みを撫でる。高価そうに見える着物にべっとりと血糊がついた。

「いままでの妖魔もそう？　わたしに何の恨みがあるの」

女は獣の首を抱いたまま首を振る。陽子が眉を顰めたとき、女の肩に留まっていたオウムが羽搏いた。

「コロセ」

甲高い声で言ったのはまぎれもなくそのオウムだった。陽子ははっと視線を向け、女もまた目を見開いて自分の肩に留まった鳥を見る。

「トドメヲ、サセ」

女が初めて口を開いた。

「……できません」

「コロセ。イキノネヲ、トメルノダ」

「……お許しを！　それだけはできません！」

女は激しく首を振る。

「ワシノ、メイレイダ。コロセ」

「できません！」

オウムは大きく羽搏いて宙に舞い上がった。一度だけ旋回し、地面に降り立つ。

「デハ、ケンヲ、ウバッテコイ」

「この剣はこの方のもの。そんなことをしても、無駄です」

女の声には哀願する響きがある。

「ソレデハ、ウデヲ、オトセ」
オウムは甲高い声で叫んで、地に留まったまま大きく羽搏いた。
「ソレクライハ、ヤッテモラウ。ウデヲ、オトセ。ケンヲ、ツカエヌヨウニ、シロ」
「……できません。だいいち、あたくしには、この剣は使えません」
「デハ、コレヲ、ツカウガイイ」
オウムは大きく嘴を開く。嘴の奥の丸い舌のさらに奥から、何か光るものが現れた。
陽子は目を見開く。オウムは黒く、つややかな棒のようなものの先端を吐き出した。驚愕する陽子の目の前で、吐き出し続ける。一分ほどかかって完全に吐き出されたそれは、黒い鞘をつけた日本刀のような刀だった。
「コレヲ」
「お願いです。お許しください」
女の顔は絶望の色に染まっている。オウムは再び羽搏いた。
「ヤレ！」
声に打たれたように女は顔を覆った。
陽子はあがく。何としても起きあがって逃げねばならない。それでも指先で土を掻いて、それだけでもうせいいっぱいだった。
女は涙にぬれた顔で陽子を振り返る。

「……やめて」

陽子の声は自分にも聞き取れないほど掠れた。

女はオウムが吐き出した刀に手を伸ばす。獣の血で汚れた手で鞘を払った。

「やめて。……あなたは、何者なの」

そのオウムは何者なのだ。その獣は、何なのだ。どうしてこんなことをする。

女はかすかに唇を動かした。本当に微かな、許してください、という言葉を陽子は聞き取った。

「……おねがい、やめて」

女は刀の切っ先を、土を掻く陽子の右手に向ける。

不思議なことに女のほうが今にも倒れそうな顔色をしていた。

見守っていたオウムが飛んできて、陽子の腕に留まった。細い爪が肌に食いこむ。どうしたわけか、まるで岩を乗せられたように重い。払い除けたかったが、全く腕が動かなかった。

オウムが叫ぶ。

「ヤレ！」

女は刀を振り上げた。

「やめてぇっ!!」

渾身の力で腕を動かそうとしたが、萎えて、しかも重しが載った腕が動くよりも、女が刀を振り下ろすほうが速かった。

痛みはなく、ただ衝撃があった。

自分の運命を見届けることが、陽子には到底できなかった。

衝撃が痛みに変化する前に、陽子は意識を手放した。

9

ひどい痛みで、陽子は意識を取り戻した。

とっさに目を上げて自分の腕を確認し、陽子はそこに突き立った刀を見つける。

最初はそれが何を意味するのか、分からなかった。曇天の空に向かって、まっすぐに立った一振りの刀。

一瞬ののちに痛みで我に返った。

刀は陽子の右手を地面に縫い留めていた。

細い刀身が深々と手の甲に刺さっていた。そこから脈打つような痛みが頭に向かって突き上げてくる。

そっと腕を動かしてみたが、引き裂かれる痛みに悲鳴が上がる。

目眩と痛みをこらえて身を起こした。縫い留められた手を、これ以上痛めぬように気をつけて何とか起きあがる。震える左手を伸ばして柄を摑んだ。目を閉じ、歯を食いしばってそれを引き抜く。全身が痙攣するほどの激痛があった。

抜いた刀を投げ捨て、傷ついた手を胸に抱いて、陽子は獣の死体が倒れた間を転げまわる。悲鳴は声にならない。痛みのあまり猛烈な吐き気がした。

のたうちながら左手で胸を探る。珠を握って紐を挙った。握りこんだ珠を右手に当てる。歯ぎしりし、呻きながら強く珠を当てて身体を丸めた。

宝重の奇跡は陽子を救った。痛みがすみやかに引いていった。しばらくそのまま、息を詰めるようにして堪えてから身体を起こす。

珠を傷に当てたまま、そっと右手の指を動かそうとしてみたが、手首から先は感覚がなかった。とにかく左手で右手に珠を握らせた。

地面に転がったまま陽子は右手を抱えこむ。薄く目を開けて空を見ると、雲はまだ茜色に染まっている。気を失っていたのは、ごく短い時間だったようだ。

あの女は何者だったのか、どうしてこんなことをしたのか、考えたいことはたくさんあったが、到底思考することができない。とにかく手探りで陽子自身の剣を捜し、柄を握ると剣と右手とを抱きこんで、しばらくそのまま丸くなっていた。

声が聞こえたのは、そうしていくらもたたない頃だった。

「……あ」

声のほうに視線を向けると、小さな子供が立ち竦んでいた。女の子は背後を振り向いて声を上げた。

「お母さん」

小走りに女がやってきた。

子供は邪気のない顔をしていた。その母親は実直そうに見えた。貧しい身なりの、大きな荷物を背負った女だった。

子供も母親も心配そうな色を顔いっぱいに浮かべて駆けてくる。獣の死体を跨ぐときに、気味悪そうに顔を蹙めた。

陽子には身動きができなかった。それで倒れたまま親子が駆けてくるのを、ぼんやりと見ていた。

助かった、と一瞬だけ思い、そうして不安になった。

陽子は今、切実に助けが必要だった。ひどい痛みは引いたが、全く消えたわけではない。すでに体力は尽きている。二度と立ち上がれない気さえした。

だからこそ、嬉しいよりも不審な気がする。何だか話がうますぎはしないか。

「……どうしたの？　だいじょうぶ？」

子供の小さな手が陽子の顔に触れる。母親のほうが陽子を抱き起こした。布越しの体温がなぜだかひどく気持ち悪かった。

「いったいどうしたんだね？　こいつらに襲われたのかい？　怪我はひどいのかい？」

言って母親は、陽子の右手に目を留める。小さく悲鳴を上げた。

「……まあ、何てこと。ちょっと、お待ち」

女は着物の袂を探った。薄い手拭い状の布を引っぱり出して、それで陽子の右手を押さえる。子供は背負った小さな荷物を下ろして、そこから竹の筒を出した。それを陽子に差し出す。

「おにいちゃん、お水、いる？」

陽子は一瞬躊躇する。何となく不安を感じた。

荷物の中に入っていたということは、この水筒はこの子が自分のために持っていたもののはずだ。だとしたら、毒など入っているはずがない。差し出すまでに入れた様子もなかった。

そう自分に納得させてから頷くと、小さな両手で栓を抜いた筒を口元に当ててがってくれる。ぬるい水が喉を通って、それで一気に呼吸が楽になった。

母親が陽子に訊く。

「ひょっとして、ひもじいのかい？」

今は空腹を感じなかったが、自分が飢えていたことは知っていたので陽子はただ頷く。
「どのくらい食べてないんだね」
数を思い出すのが面倒なので、陽子は黙っていた。
「お母さん、揚げパンがあるよ」
「ああ、駄目、駄目。そんなのじゃ喉を通りゃしないよ。飴を出しておあげ」
「うんっ」
子供は母親が下ろした荷物を解く。籠の中に大小の壷が入っていて、そこから子供が棒に水飴をすくい出した。何度かこんな荷物を背負った人々を見かけたことがある。おそらく水飴を売り歩く行商なのだろう。
「はい」
今度はためらわず、陽子はそれを左手で受け取る。口の中に含んだ飴は滲みるほど甘かった。
「旅の途中かい？　いったい何があったんだい？」
陽子は答えない。本当のことは言えないし、嘘を考える気力はない。
「よくもまぁ、妖魔に襲われて無事だったねぇ。――立てるかい？　もう陽が落ちる。麓の里まであと少しだ。そこまで歩けるかい？」
陽子は首を横に振った。里に行くつもりはないという意思表示のつもりだったが、母親は

動けないという意味に取ったのだろう、子供を振り返った。
「ギョクヨウ、里まで走って人を呼んで来ておくれ。時間がないよ。全速力でね」
「うんっ」
「けっこうです」
陽子は身体を起こした。親子を見据える。
「ありがとうございました」
突き放すように言って陽子は何とか立ち上がった。道を横切って険しい上り斜面を作っている反対側へ向かう。
「ちょっと、どこへ行くんだね」
そんなことは陽子にも分からない。だから答えなかった。
「お待ち。もう陽が暮れるよ。山に入ったら死ぬだけだ」
陽子はゆっくり道を渡る。歩くたびに右手が痛んだ。
「一緒に里へ行こう」
上り斜面はずいぶんと急で、これを上るのは——ましてや片手が使えない状態で上るのは、ひどく骨が折れそうだった。
「あたしたちは行商でね、バクロウまで行くところさ。怪しい者じゃない。せめて里へ行こう。ね？」

陽子は道に張り出した枝に手をかけた。
「ちょっと、あんた！」
「どうしてそんなにムキになるんですか」
陽子が振り返ると女は不思議そうに目を見開いた。動きかねた子供までが困ったように陽子を見ている。
「ほっといてください。それともあたしが一緒に里に行くと、何かあるんですか」
「そんなことじゃないだろ！　もう陽が暮れるんだよ！　怪我だって――」
「分かってます。……急いだほうがいいですよ。小さい子もいるんだし」
「ちょっと……」
「わたしは、慣れてますから。――飴をありがとう」
困ったように陽子を見ている女は、たんに親切なのかもしれなかったし、そうでないのかもしれなかった。どちらかは分からないが、見定めたいとも思わない。
苦労して斜面を一段上ると、下から陽子を呼ぶ声がした。見ると子供が両手を差し上げている。片手には水の入った竹筒が、片手には素焼きの湯呑みが握られている。湯呑みには水飴が縁まで入っていた。
「持ってお行き。あれっぽっちじゃ足りないだろ」
陽子は母親のほうを見る。

「でも」
「いいから。――さ、ギョクヨウ」
促されて子供は精いっぱい背伸びをして陽子の足元にそれをおく。おいてから身を翻して荷物を背負った母親のもとに駆け戻った。
陽子は、ぼんやりと子供が荷物を背負うのを見る。どう反応していいか分からずに、親子が何度も振り返りながら坂道を下りていくのをぼうっと見ていた。
親子の姿が見えなくなってから、陽子は竹筒と湯呑みを拾い上げる。なぜだか膝が崩れてその場に座りこんだ。
――きっとこれでよかったんだ。
あの親子が真実善良であるという保証はどこにもない。里に着いてから態度を変えるのかもしれなかったし、たとえそうでなくても陽子が海客だと知れば役所に突き出すだろう。せつなくても用心はしなければならない。信用してはならない、期待してはいけない。うかつに甘いことを考えれば痛い目にあう。
「助けだったのかもしれないのにナァ」
また耳障りな声が聞こえた。陽子は振り返らずに答えた。
「罠だったかもしれない」
「これでもう二度と助けはないかもなァ」

「ぜんぜん助けじゃなかったかもしれない」
「その身体と手で、今夜を乗り切れるのかい」
「何とかなる」
「蹤いて行きゃあよかったのにサァ」
「これでいいんだ」
「お前はサァ、たった一度の、最初で最後の助かる機会をフイにしたんだ」
「――黙れぇっ！」
振り返って薙ぎ払った先に猿の首はなかった。きゃらきゃらと笑う声だけが斜面の上、下生えの中を消えていった。
陽子は何となく道を振り返った。たそがれ始めた道に小さな黒いしみが落ちて、初めての雨が降り始めた。

10

その夜はかつてないほど過酷な一夜になった。
すでに体力は尽きている。雨は冷たく体温を奪う。人には辛い夜なのに妖魔のほうはむしろ活発なぐらいだった。

張りついた服が動きを妨げる。萎えてかじかんだ身体は少しも思うように動かない。右手は何とか感覚が戻ったとはいえ、少しも握力が出ない。その手で剣を握るのは途方もない難行事だった。しかも雨で柄がすべる。あたりは真の暗闇で敵の姿が定かでない。しかも襲ってくる妖魔は小物だが数が多かった。

泥の中に突っこみ、返り血を被り、自らの怪我から溢れたもので血だらけになった。それすらも雨が洗い流していって、一緒に最後の力までも押し流していく。剣は重く、ジョウユウの気配は希薄な気がした。構えた剣の切っ先は敵に会うたびに下がっていく。

祈るように何度も空を見上げて夜明けを待った。戦いながら過ごす夜はいつも短いが、この夜に限って敵はひきもきらないのに恐ろしく長い。何度も剣を取り落とし、拾い上げるたびに傷だらけになって、ようやく夜明けの気配が見えた頃に白い樹影が見えた。

陽子は枝の下に転がりこむ。硬い枝が身体を傷つけた。同時に追い縋っていた敵の気配が止まる。枝の下で息を整えている間、遠巻きにしていたようだったが、やがて雨の向こうへ消えていった。

敵の気配が消え去った頃、やっと空が明るんで木立が作る影が見え始めた。

「……助かっ……た」

陽子は息をつく。肩で息をする口の中に雨の滴が降ってきた。

「切り……抜け……た……」

泥を擦りこまれた傷口が疼いたが、それすらも気にならなかった。

しばらく寝ころんだまま息を整えて、白い枝を透かして見える空がどんよりと明るむのを待った。息が治まるとひどく寒かった。白い枝は雨を遮らない。抜け出してどこかで雨宿りしなければならないと分かっていても身体が動かなかった。

必死で珠を握りしめる。指の先を温める奇妙な力を懸命に取りこんで蓄えようとしてみる。渾身の力で寝返りを打ち、這って樹の下から抜け出し、とにかく斜面の低いほうへ動いてみる。濡れた草と土のせいで這うのは、けっこう楽だった。

できるだけ街道を外れないように移動したはずだが、光のない深夜、敵に追い立てられてのことだから、どれほど山の奥へ迷いこんでいるか想像もつかなかった。

珠に縋り、剣に縋って立ち上がる。

怪我をしている自覚はあり、ひどい痛みを感じていることも分かっていたが、どこが痛いのかはよく分からない。一歩あるくごとに膝が崩れそうになるのを持ち堪えなくてはならなかった。

半ば這って斜面を下りると、街道とは思えない細い道に出た。轍の跡は見えないし、馬車が通れるほどの道幅もない。そうして、そこが限界だった。膝をついて、木肌に爪を立てて身体を支えようとした手は全く用をなさなかった。

頭からぬかるんだ道に突っこんで、それきり身動きができない。

手の中に固く珠を握りこんだが、そこからやんわりと押し寄せてくる温もりは何の慰めにもならなかった。そこから補給されていくものよりも、雨に溶けて流されていくもののほうが数段多い。それはついに宝重の奇跡が及ばなくなったことを意味した。

——こんなところで死ぬのか。

そう思うと、少し笑えた。

クラスメイトの中でも、野垂れ死にするのは陽子だけだろう。

違う世界の人たちだ。彼女たちにはいつでも帰れる家があり、守ってくれる家族があり、決して飢えることのない未来が約束されている。

できる限りのことはした。これが限界。諦めたくはなかったが、どんなに努力してももう指一本動かせなかった。限界まで耐えたご褒美がこのゆるやかな死なら、我慢した値打ちがあったのかもしれない。

雨音に混じって高く澄んだ音がした。目を上げると頬のすぐ傍に落ちた剣が、淡く光を放っていた。地面に顔を伏せた陽子の目からは刀身はよく見えなかったが、それでも地を叩く雨足がかすんで薄い影が見えた。

——中嶋は、と男の声が聞こえた。

陽子の担任が座っていた。そこがどこなのかはよく分からない。

「中嶋はおとなしくて真面目な生徒でしたよ。少なくとも担任にとっては、あれくらい楽な

生徒はなかったです」
担任は誰かに向かって話をしていた。その相手の声が聞こえる。太い男の声だった。
「素行の悪い連中と付き合っていたというようなことは？」
「分かりません」
「分からないんですか」
担任は肩を竦める。
「中嶋は絵に描いたような優等生でしたからね。どんな生活をしているのか、ひょっとしたら道を踏み外していないか、心配する必要がなかったんです」
「妙な男が学校に乗りこんで来たんでしょう？」
「そうなんですが。何だか中嶋はあいつとは面識がないようでしたがね。実際のところどうだったのか、わたしには分かりません。何だか中嶋には得体の知れないところがありましたから」
「得体が知れない？」
担任は渋い顔をする。
「ちょっと言葉が違うかな。うまく言えないんですが。中嶋はね、優等生でしたよ。クラスの生徒ともうまく折り合いをつけていた。両親との関係もいいようだった。でもねぇ、そういうことはありえないんですよ」

「……ほう？」

「わたしがこんなことを言ってはいけないのでしょうが、教師は教師の都合を押しつけ、友達は友達の都合を押しつける。親は親の都合しか言わない。誰も彼もが勝手な学生像を作って無理やりそこに押しこもうとするんです。この三者の意見が一致することなんかありえません。教師と親の期待どおりであれば、生徒にとっては鼻持ちがならない。誰にとってもいい子であったということは、誰に対しても合わせていたということじゃないかと思うんです。だからだろうと思うんですが、中嶋は誰ともうまくやってた代わりに、誰とも特別親しくなかった。誰にとっても都合がいいだけで、それ以上ではなかったんだと思います」

「先生はいかがです？」

担任は少し渋い顔をした。

「本音を言いますとね、教師にとっては多少手を焼かせて目が離せないような生徒のほうが、かわいいんです。わたしは中嶋をいい子だと思っていましたけどね、きっと卒業してしまえば忘れてしまったでしょう。十年あとに同窓会があっても、覚えてなかっただろうと思いますよ」

「……なるほど」

「中嶋が故意にそう振る舞っていたのか、いい子でいようとするあまりそういうことになったのか、それはわたしにも分かりません。故意にそう振る舞っていたのだったら、陰で何を

やっていたか想像もつかない。故意でなければ、そんな自分に気がついたときひどく虚しいだろうと思うんですね。自分はいったい何だったのか、虚しく思ってふいと姿を消す、そういうことがあっても不思議じゃないような気がします」

陽子は呆然と担任の姿を見ている。その姿が薄くなって、代わりにひとりの少女が現れた。陽子とは比較的仲のよかった生徒だった。

「君は中嶋さんと仲がよかったと聞いたけど？」

と、声が訊くと少女は険のある目つきをする。

「別に。特に仲がよかったわけじゃないです」

「そうなの？」

「そりゃ、学校でならちょっとは話をしましたけど。別に学校の外で会うわけじゃないし、家に電話をするわけでもないし。多少はそういうこともありましたけど、そんなのクラスメイトとしてのお付き合いの範囲内です」

「なるほどね」

「だから、あたしにあいつのこと訊かれても分かりません。当たり障りのない話しかしなかったし」

「彼女を嫌いだったのかい？」

「別に嫌な奴じゃなかったけど、特にいい奴だとも思ってませんでした。何か、いつも適当

に話を合わせてるような感じあったんですよね。嫌いじゃなかったけど、面白くなかったから」

「ふうん？」

あたしは嫌いでした、と言ったのは別の少女だった。

「だって中嶋さんって、八方美人だったんですもん」

「八方美人？」

「そうです。あたしたちが誰かの悪口を言ってたとするでしょ？　そうしたら、頷くんですよ。そうだね、って。でもそいつがあたしたちの悪口を言ってると、今度はそれにも頷くんです。誰にも彼にもいい顔ばっかりして、だから嫌いだった。仲がよかったなんて、とんでもないです。愚痴を言うのにはよかったですけど。何を言っても頷いてくれましたから。それだけです」

「――ふむ」

「だから、家出なんだと思いますよ。彼女が陰で変な連中と付き合ってて、そいつらと、教師もクラスメイトもバカだ、ふざけんじゃねぇ、なんて気炎をあげてても驚きません。そういうのって、ありそうな感じがする。そういう得体の知れない感じってありましたから」

「何かの事件に巻きこまれた可能性もあるんだがね」

「だったら、陰で付き合ってた連中と何か揉めたんじゃないですか。あたしには関係ないで

す」

あたしは大嫌いでした、と言ったのはさらに別の少女だった。

「だから、正直言っていなくなってすっとしてます」

「君は、クラスでいじめられてたんだって？」

「そうです」

「中嶋さんも参加してたの？」

「してました。みんなと一緒になってあたしのこと無視して、それでも自分はいい子の顔をしてたんです」

「……ふむ？」

「みんながあたしにひどいことを言うでしょ？　そういうとき、中嶋さんって、積極的に参加しないんです。いつも自分はこういうことは嫌いなんだけど、って顔をしてるんです。そういうのって、卑怯だと思う」

「なるほど」

「自分だけは善人の顔をして、あたしのほうを気の毒そうに見るんです。でも、みんなを止めないの。だからよけいに腹が立った」

「そうだろうね」

「家出でも誘拐でも、あたしには関係ないです。中嶋さんは加害者で、あたしは被害者だっ

たんだから。そんな人に同情するような、中嶋さんみたいな偽善者になりたくないです。あたしのこと、疑ってもらってもいいです。あたしは中嶋さんが嫌いだったし、あの人がいなくなって嬉しい。これが本当の気持ちです」

そんな子じゃありません、と言ったのは母親だった。悄れたようにどこかに座っている。

「いい子だったんです。家出をするような子じゃありません。不良と付き合うような子でもありません」

「しかし、陽子さんは家庭に不満があったようですね」

母親は目を見開く。

「陽子が？　そんなはずはありません」

「ずいぶんと同級生にこぼしていたようですよ。ご両親が厳しい、と言って」

「それはときには叱ったりもしましたけど、親なんだから当たり前でしょう？　いいえ、そんなはずはありません。あの子は不満そうな様子なんてこれっぽっちも」

「では、家出の理由に心当たりはないんですね？」

「ありません。そんなこと、するはずがありません」

「学校に陽子さんを訪ねてきた男にも心当たりがない？」

「ありません。そんな人と付き合うような子じゃありません」

「では、なぜいなくなったのだと思われますか？」

「学校の帰りにでも、誰かに――」

「残念ながら、その形跡はありませんでした。陽子さんは職員室から男と一緒に出ていって、そのままどこかに行ったと思われます。別に無理やり引っぱっていかれたとか、そういうわけではなかったようです。親しいようだったと言っておられた先生もいらっしゃいましたが」

母親は俯いてしまう。

「面識はないと陽子さんは言っておられたようですが、たとえ面識はなくても、何らかの関係があったのではないかと思います。共通の知人がいるとかの。一応捜索はしてみますが……」

「陽子は本当に家の不満をこぼしていたんでしょうか？」

「そのようですね」

母親は顔を覆った。

「不満があるようには見えませんでした。家出をするような子でも、陰に隠れて悪い友達と付き合うような子でもないと思っていました。変な事件に巻きこまれるような子でもないと」

「子供というのは、なかなか親に本音を見せませんからね」

「よそさまのお宅の話を聞いて、陽子は何てできた子だろう、と思ってました。今から考え

ると、おかしいと思ってみなければいけなかったのかもしれません」

「そうそう子供は親の都合のいいようには育ってくれませんから。うちの子供もどうしようもない悪餓鬼ですよ」

「そうなんですね……。あの子はいい子の顔をして、ていよく親をあしらっていたんですね。わたしたちはうっかりそれに騙されて。子供を信じていたのが仇になったんだわ」

（お母さん、違う……）

泣きたかったが涙は出なかった。違う、と声にはならないまま口だけを動かすと、それですとんと幻が消えた。

あたりは一面の水溜まり、陽子は顔を泥の中に半ば伏せて、すでに立ち上がる余力はない。陽子が今こんな状況に置かれていることなど、誰ひとり想像しえないに違いない。これを知らないから、あんな勝手なことが言えるのだ、とそう思った。

こんな世界に放りこまれて、ひもじくて、せつなくて怪我だらけで、もう立ち上がることさえできなくて。それでも帰りたいと、それだけで歯を食いしばってきたのに。実を言えば陽子が故国で持っていたものは、こんな人間関係でしかなかったわけだ。

――どこに帰るつもりだったのだろう。

待っている人などいないのに。陽子のものは何ひとつなく、人は陽子を理解しない。騙す、裏切る。それにかけてはこちらもあちらも何の差異もない。

——そんなことは分かっていた。

それでも陽子は帰りたかったのだ。

妙に笑えて、大声で笑ってみたかったが雨に凍えた顔は少しも笑ってくれなかった。泣きたい気もしたが、涙は涸れていた。

——もういい。

もう、どうでもいいことだ。じきにぜんぶが終わるのだから。

（下巻につづく）

|著者|小野不由美　大分県生まれ。大谷大学在学中に京都大学推理小説研究会に在籍。講談社X文庫ティーンズハートでデビュー。『東京異聞』が第5回日本ファンタジーノベル大賞の最終候補作に。著書に本書を含む『十二国記』シリーズ、『悪夢の棲む家』『過ぎる十七の春』『緑の我が家』(以上、講談社X文庫)、『魔性の子』『東京異聞』『屍鬼』(以上、新潮社)などがある。

月の影 影の海(上) 十二国記
小野不由美
© Fuyumi Ono 2000

2001年1月15日第1刷発行
2003年3月7日第10刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-5817
業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-264773-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

大下英治　一を以って貫く〈八間・小沢一郎〉
大下英治　激録！総理への道〈最後の挑戦状相列伝・田中角栄から森喜朗まで〉
大下英治　手塚治虫〈ロマン大宇宙〉
大橋巨泉出発点　路
大橋巨泉岐
太田忠司　僕の殺人
太田忠司　美奈の殺人
太田忠司　刑事失格
太田忠司　新宿少年探偵団
太田忠司　怪人大鴉博士〈新宿少年探偵団〉
太田忠司　摩天楼の悪夢〈新宿少年探偵団〉
太田忠司　紅蛾〈新宿少年探偵団〉
おおきちひろ　スペインの食卓から
大竹昭子　バリの魂、バリの夢
大久保智弘　水着〈福島正則最後の闘い〉
尾崎秀樹編　徹底検証〈忠臣蔵〉の謎
小川洋子　密やかな結晶
小野不由美　月の影　影の海（上）（下）〈十二国記〉
小野不由美　風の海　迷宮の岸〈十二国記〉
小野不由美　東の海神　西の滄海〈十二国記〉
小野不由美　風の万里　黎明の空（上）（下）〈十二国記〉
小野不由美　図南の翼〈十二国記〉
小野不由美　黄昏の岸　暁の天〈十二国記〉
小野不由美　華胥の幽夢〈十二国記〉
乙川優三郎　霧の橋
乙川優三郎　喜知次屋
乙川優三郎　烏
奥田英朗　ウランバーナの森
奥田英朗　最悪
乙武洋匡　五体不満足〈完全版〉
小野一光　セックス・ワーカー〈女たちの「東京」二重生活〉
大石静　ねこの恋
大崎善生　聖の青春
恩田陸　三月は深き紅の淵を
海音寺潮五郎　孫子
勝目梓　悪女軍団
勝目梓　殺し屋
勝目梓　狩り
勝目梓　引き裂かれた夏
勝目梓　炸裂
勝目梓　はみだし者
勝目梓　女豹たちの宴
勝目梓　狼たちの宴
勝目梓　禁断の宴
勝目梓　火刑の朝
勝目梓　蒼い牙
勝目梓　淫夜
勝目梓　濡れる殺意
勝目梓　逃亡
勝目梓　あやしい叢
勝目梓　滴り
勝目梓　歯科医
勝目梓　耽溺
勝目梓　暗黒の狩人
勝目梓　悪党図鑑
勝目梓　闇に光る肌
勝目梓　処刑猟区

勝目　梓　獣たちの熱い眠り
勝目　梓　昏き処刑台
勝目　梓　眠れない
勝目　梓　処刑賛歌
勝目　梓　生花祭
勝目　梓　幻けもの道に罠を張れ
勝目　梓　あられもなく
勝目　梓　復讐回廊
勝目　梓　剝がし屋
勝目　梓　娼婦の朝
勝目　梓　地獄の狩人
勝目　梓　夢追い肌
鎌田　慧　自動車絶望工場〈ある季節工の日記〉
鎌田　慧　日本の兵器工場
鎌田　慧　「東大経済卒」の十八年
鎌田　慧　トヨタと日産〈自動車王国の暗闇〉
鎌田　慧　ルポ大事故！その傷痕
鎌田　慧　六ヶ所村の記録〈核燃料サイクル基地の素顔〉

鎌田　慧　いじめ社会の子どもたち
鎌田　慧　壊滅日本〈17の致命傷〉
鎌田　慧　家族が自殺に追い込まれるとき
桂　米朝　米朝ばなし〈上方落語地図〉
門田泰明　暗闇館くらやみやかた
河原敏明　美智子さまのおことば〈愛の喜び・苦悩の日々〉
加藤　仁　人生を楽しむ〈50歳からがゴールを決める〉
川田弥一郎　白く長い廊下
加来耕三　〈国志の謎〉徹底検証〈諸葛孔明の真実〉
加来耕三　信長の謎〈徹底検証〉
加来耕三　龍馬の謎〈徹底検証〉
加来耕三　武蔵の謎〈徹底検証〉
門野晴子　老親を棄てられますか
神田憲行　ハノイの純情、サイゴンの夢
加納喜光　知ってるようで知らない日本語辞典〈日日から鱗が落ちる言葉の蘊蓄〉
河上和雄　好き嫌いで決めろ〈知られざる犯罪捜査と裁判の基礎知識〉
河上和雄　ガーデン・ダイアリー〈ガリフォルニア 花と暮らす12カ月〉
加藤万里　鼻の拳

香納諒一　雨のなかの犬
笠井　潔　三匹の猿〈私立探偵飛鳥井の事件簿〉
笠井　潔　鼻の巨なる黄昏〈デュパン第四の事件〉
笠井　潔　群衆の悪魔
笠井　潔　熾天使の夏
鏡リュウジ　2000年運命の占星術
鏡リュウジ　占いはなぜ当たるのですか
神崎京介　女薫の旅
神崎京介　女薫の旅　灼熱つづく
神崎京介　女薫の旅　激情たぎる
神崎京介　女薫の旅　奔流あふれ
神崎京介　女薫の旅　陶酔めぐる
神崎京介　女薫の旅　衝動はぜて
神崎京介　女薫の旅　放心とろり
神崎京介　滴
神崎京介　イントロ
神崎京介　もっとやさしく
神崎京介　愛技
金谷多一郎　金多一郎のバーディコナングラグ

金丸弘美　産地直送おいしいものガイド
加納朋子　ガラスの麒麟
勝谷誠彦　いつか旅するひとへ
河原まり子／利岡裕子　犬から学ぶ心のレッスン
川上信定　本当にうまい朝めしの素（もと）
金井美恵子　軽いめまい
金田一春彦／安西愛子　編　日本の唱歌全三冊
岸本英夫　死を見つめる心（ガンとたたかった十年間）
北方謙三　君に訣別の時を
北方謙三　鎖
北方謙三　烈日
北方謙三　われらが時の輝き
北方謙三　魂の岸辺
北方謙三　夜の終り
北方謙三　帰路
北方謙三　火焔樹
北方謙三　秋ホテル
北方謙三　遠い港
北方謙三　錆びた浮標（ブイ）
北方謙三　いつか光は匂いて
北方謙三　汚名の広場
北方謙三　活路
北方謙三　余燼（上）（下）
北方謙三　夜の眼
北方謙三　逆光の女
菊地秀行　魔闘学園
菊地秀行　ブルー・マン　神を食った男
菊地秀行　邪神聖宴（ブルー・マン2）
菊地秀行　闇の旅人（ブルー・マン3）
菊地秀行　魔神降臨（ブルー・マン4）
菊地秀行　鬼花人（ブルー・マン5）
菊地秀行　魔界医師メフィスト（黄泉姫（よみひめ））
菊地秀行　魔界医師メフィスト（影斬士（シャドウ））
菊地秀行　魔界医師メフィスト（海妖美姫（マーメイド））
菊地秀行　魔界医師メフィスト（夢盗人（ドリームバスター））
菊地秀行　ちょっとエッチなショートストーリー
菊地秀行　懐かしいあなたへ
北原亞以子　深川澪通り木戸番小屋
北原亞以子　深川澪通り燈ともし頃
北原亞以子　新地橋（深川澪通り木戸番小屋）
北原亞以子　降りしきる
北原亞以子　風よ聞け（雲の巻）
北原亞以子　贋作天保六花撰（うそっぱっかり・えどのはなえら）
北原亞以子　花冷え
岸本葉子　それでもしたい?!　結婚
岸本葉子　よい旅を、アジア
岸本葉子　アジア発、東へ西へ
岸本葉子　旅はお肌の曲がり角
岸本葉子　三十過ぎたら楽しくなった!
岸本葉子　炊飯器とキーボード（エッセイストの12カ月）
岸本葉子　家もいいけど旅も好き
桐野夏生　顔に降りかかる雨
桐野夏生　天使に見捨てられた夜
桐野夏生　OUTアウト（上）（下）
岸本裕紀子　モテる女たち（恋も仕事も私らしく）
岸本裕紀子　いつか王子さまが
岸本裕紀子　もっと、モテる女たち

京極夏彦　文庫版　姑獲鳥の夏
京極夏彦　文庫版　魍魎の匣
京極夏彦　文庫版　狂骨の夢
京極夏彦　罠
北森　鴻　狐
北森　鴻　メビウス・レター
北森　鴻　花の下にて春死なむ
北上秋彦　クラッシュ・ゲーム
キムミョンガン　恋愛の基礎
北村　薫　盤上の敵
木村　剛　小説ペイオフ〈通貨が堕落するとき〉
綾辻行人　どんどん橋、落ちた
黒岩重吾　明日なき巡礼たち
黒岩重吾　古代史への旅
黒岩重吾　磐舟の光芒(上)(下)
黒岩重吾　天風の彩王(上)(下)〈藤原不比等〉
黒岩重吾　訣別の時
黒岩重吾　雨毒

栗本　薫　ぼくらの時代
栗本　薫　優しい密室
栗本　薫　女狐
栗本　薫　鬼面の研究
栗本　薫　伊集院大介の冒険
栗本　薫　伊集院大介の私生活
栗本　薫　天狼星
栗本　薫　天狼星II
栗本　薫　天狼星III　蝶の墓
栗本　薫　新・天狼星ヴァンパイア(上)恐怖の章(下)異形の章
栗本　薫　真・天狼星ソディアック全六冊
栗本　薫　伊集院大介の新冒険
栗本　薫　仮面舞踏会〈伊集院大介の帰還〉
栗本　薫　魔女のソナタ〈伊集院大介の洞察〉
栗本　薫　怒りをこめてふりかえれ
栗本　薫　タナトス・ゲーム〈伊集院大介の世紀末〉
黒柳徹子　窓ぎわのトットちゃん
久保博司　日本の警察〈警視庁vs大阪府警〉
久保博司　日本の検察

胡桃沢耕史　紫の拳銃〈弁護士&講釈師・大神田紫〉
草野　厚　国鉄解体〈JRは行政改革の手本となるのか〉
黒川博行　アニーの冷たい朝
黒川博行　燻り
軍司貞則　本田宗一郎の真実〈不況知らずのホンダを創った男〉
蔵前仁一　ホテルアジアの眠れない夜
蔵前仁一　旅ときどき沈没
蔵前仁一　旅人たちのピーコート
黒崎　緑　柩の花嫁〈聖なる血の城〉
久世光彦　触れもせで〈向田邦子との二十年〉
久世光彦　夢あたたかき〈向田邦子との二十年〉
久世光彦　ニホンゴキトク
黒田福美　ソウルハート
黒田福美　ソウルマイデイズ
熊谷真菜　おいしい物物大研究〈大阪発〉
楠見千鶴子　エーゲ海ギリシア神話の旅
倉知　淳　星降り山荘の殺人
鍬本實敏　警視庁刑事〈私の仕事と人生〉
黒田信一　ルチャリブレがゆく

今野　敏　蓬　莱
今野　敏　イ　コ　ン
今野　敏　ST　警視庁科学特捜班
今野　敏　ST　警視庁科学特捜班〈毒物殺人〉
小林道雄　〈冤罪〉のつくり方〈大分・女子短大生殺人事件〉
小杉健治　容　疑　者
小杉健治　失　跡
後藤正治　ス　カ　ウ　ト
後藤正治　奪われぬもの
幸田　文　崩　れ
幸田　文　台所のおと
幸田　文　季節のかたみ
幸田　文　月　の　塵
小池真理子　記憶の隠れ家
小池真理子　美神ミューズ
小池真理子　冬の伽藍
グループ・子どもと向き合う父親編　子どもに伝える父のワザ52
けらえいこ　おきらくミセスの婦人くらぶ
けらえいこ　セキララ結婚生活

講談社文庫編　ワールドカップ全記録
幸田真音　小説ヘッジファンド
幸田真音　マネー・ハッキング
郡山和世　噺家カミサン繁盛記
古森義久　影のアメリカ〈超大国を動かす見えない勢力〉
小森健太朗　ネヌウエンラーの密室
神坂次郎　海の伽倻琴(上)(下)
神坂次郎　〈雑賀鉄砲衆がゆく〉
神坂次郎　海の稲妻(上)(下)〈根来・種子島衆がゆく〉
神坂次郎　おれは伊平次
小松江里子　若葉のころ
小松江里子　Summer Snow
小松江里子　青の時代
五味太郎　大人問題
小峰有美子　宿曜占星術
小柴昌俊　心に夢のタネを持とう
佐野　洋　生きていた灰(上)(下)
佐野　洋　いつまでも昨日
佐野　洋　折々の犯罪
佐野　洋　卑劣な耳(上)(下)
佐野　洋　折々の事件
佐野　洋　動詞の考察
佐野　洋　折々の憎悪
佐野　洋　光る砂
佐野　洋　指の時代
佐野　洋　〈佐野洋短篇推理館〉〈文庫オリジナル最新14作〉
佐野　洋　推理日記V
佐野　洋　推理日記VI
斎藤　栄　ブライダル・マーダー
斎藤　栄　箱根高原殺人事件
斎藤　栄　巨人機が消えた
斎藤　栄　横浜ランドマークタワーの殺人
笹沢左保　夕暮れ〈夜明日出夫の事件簿〉
笹沢左保　一方通行〈夜明日出夫の事件簿〉
笹沢左保　死の追走次は誰か
早乙女　貢　沖田総司(上)(下)
早乙女　貢　からす組
早乙女　貢　会津　啾々記
早乙女　貢　〈脱走人別帳〉生十兵衛
早乙女　貢　秘剣柳〈隻眼一人旅〉

早乙女　貢　江戸の夕映え
早乙女　貢　新選組斬人剣〈小説・土方歳三〉
早乙女　貢　淀　君
佐藤愛子　戦いすんで日が暮れて
佐木隆三　復讐するは我にあり(上)(下)
佐木隆三　正　義　の　剣
佐木隆三　死刑囚　永山則夫
サトウハチロー　新装版詩集おかあさん(1)(2)〈沢田教一ベトナム戦争写真集〉
澤地久枝　試された女たち
澤地久枝　ベラウの生と死
澤地久枝　時のほとりで
澤地久枝　六　十　六の暦
沢田サタ　泥まみれの死〈沢田教一ベトナム戦争写真集〉
佐高　信　孤高を恐れず〈石橋湛山の志〉
佐高　信　官僚たちの志と死
佐高　信　官僚国家＝日本を斬る
佐高　信　社長のモラル〈日本企業の罪と罪〉
佐高　信　ニッポンの大問題
佐高　信　日本を撃つ
佐高　信　こんな日本に誰がした！
佐高信編　美学〈ビジネスマンの生き方20選〉
佐高信　政治家の本音〈宮本顕治の生き方〉
佐藤雅美　揚羽の蝶(上)(下)〈半次捕物控〉
佐藤雅美　日本とは何か
佐藤雅美　「大変一な時代」〈常識破壊と大競争〉
佐藤雅美　堺屋太一　時代末(上)(下)
佐藤雅美　堺屋太一　樹
佐藤雅美　坂本光一　白色の残像
佐藤雅美　斎藤　純凍
佐藤雅美　斎藤　肇　思いがけないアンコール
佐藤雅美　斎藤　肇　新・魔法物語　竜形の少年
佐藤雅美　佐藤隆三　菊　と　鷲
佐藤雅美　斎藤　澪　ノサップ岬の女
佐藤雅美　佐藤泰子　春夏秋冬　色(カラー)物語〈カラーマニュアル〉
佐藤雅美　佐々木譲　愚か者の盟約
佐藤雅美　酒見賢一　童　貞
佐藤雅美　柴門ふみ　サイモンの秘訣
佐藤雅美　柴門ふみ　笑って子育てあっぷっぷ
佐藤雅美　柴門ふみ　愛さずにはいられない〈ミーハーとしての私〉
佐藤雅美　佐江衆一　神州魔風伝
佐藤雅美　佐江衆一　江戸は廻灯籠
佐藤雅美　佐江衆一　からたちの記〈女剣士道場日誌〉
佐藤雅美　青春読書ノート〈大学時代に何を読んだか〉
佐藤雅美　手跡指南神山慎吾　岸夢一定〈蜂須賀小六〉
佐藤雅美　物書同心居眠り紋蔵
佐藤雅美　隼小僧異聞〈物書同心居眠り紋蔵〉
佐藤雅美　密約〈物書同心居眠り紋蔵〉
佐藤雅美　尋お者〈物書同心居眠り紋蔵〉
佐藤雅美　開国〈感直の宰相・堀田正睦〉
佐藤雅美　官僚に告ぐ！
佐藤雅美　影帳　半次捕物控
佐藤雅美　恵比寿屋喜兵衛手控え
佐藤雅美　無法者　アウトロー

ISBN4-06-264773-7

C0193 ¥533E (0)





謎の男、ケイキとともに海に映る月の光をくぐりぬけ、高校生の陽子がたどりついたのは地図にない国——巧国。おだやかな風景とは裏腹に闇から躍り出た異形の獣たちとの苛烈な戦いに突きおとされる。なぜ、孤独な旅を続ける運命（さだめ）となったのか、天の意とは何か。『屍鬼』の著者が綴る愛と冒険のスペクタクル。

月の影 影の海 (上)
十二国記
小野不由美
定価：本体533円(税別)

お81/1